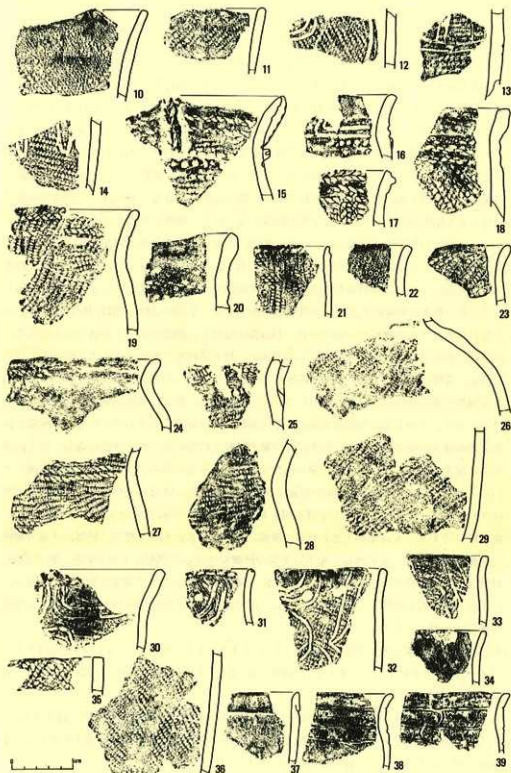




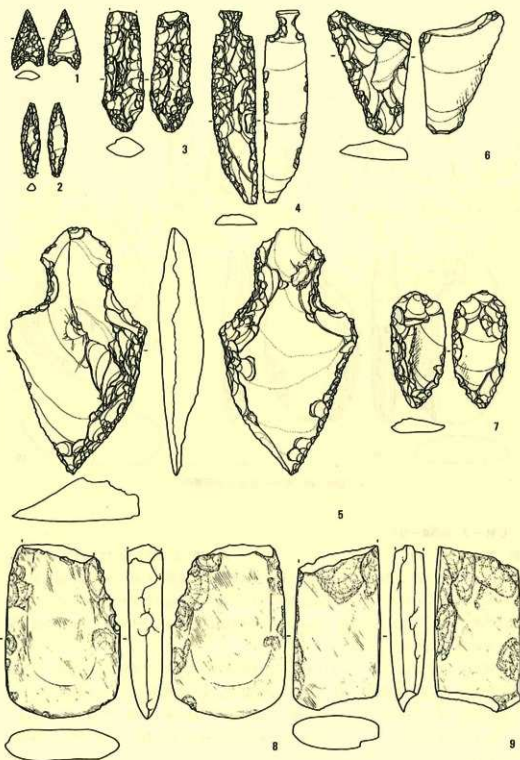
図Ⅷ-28 CH-6出土の土器

れている。胎土に少量の砂粒を含む。内面の調整は丁寧で焼成も良い。2は、小型土器である。口縁部は欠損している。底部は張り出しをもつ。体部に粗い斜行縄文が施されている。4は体部に斜行縄文が施されている。5は、平縁で、口縁部が外反する。口縁部直下に2条の縄線文がある。頸部には円形刺突文が加えられた2本の貼付帯が文様帯を構成する様に貼付けられ、それをつなぐように円形の貼付帯がみられる。地文は、不規則の斜行縄文である。6は、細い貼付帯、半截竹管状工具による刺突文が加えられている。7は、切り出しナイフ状口縁で、口唇部に篋状工具による刻み目が施されている。10は、山形口縁で、複節の斜行縄文が施されている。胎土に砂礫粒を多く含む。焼成が良く、硬質である。12は、体部破片で複節の斜行縄文地に沈線文が施されている。胎土に砂粒を含む。焼成はよく硬質である。3は小さな山形口縁で、口唇には1条の沈線が見られる。頸部に横走する4条の沈線が施され、その間に円形刺突文が施されている。体部には沈線による2重の円が描かれ、部分的に刺突文が加えられている。地文は粗い撚糸文である。胎土に砂礫を多量に含み、調整は粗雑で焼成も悪い。30は、低い山形突起を有し、突起部分に半截竹管状工具による刻み目が施されている。胎土に砂礫粒を多く含み調整も粗雑である。3・30~33は、Ⅲ群B₂類に近いものと思われるがここで扱った。15~29は、口縁部が外反し、頸部が強くくびれているもので、貼付帯、縄線文、沈線文が施されるものが多い。地文は粗雑で横走するもの、斜行するものがある。器厚は厚手である。調整は粗雑なものが多い。15は口縁に山形突起を有し、突起部から縄線の押圧のある貼付帯が垂下している。頸部には、横位に円形刺突文の加えられた貼付帯があり、その上下に竹管状工具による馬蹄形の連続刺突文をそわせている。口縁部には2条の縄線文が施されている。胎土には少量の砂粒と白色の粘土粒を多量に含む。地文は横走する縄文である。16は、頸部に薄い貼付帯があり、それに刻み目を加え上下縁を区画している。17~21・24は口縁部に2条の縄線文が施されている。17は、口唇上端にも縄線文が押圧されている。22は、不規則な2段の円形刺突文、23は、斜行縄文のみのもの、25~29は、胴部破片である。26は壺形と思われる。頸部には、貼付帯がある。27は、頸部に2条の縄線文が施されている。35・36は、胎土に多量の砂礫粒を含むが調整は丁寧である。35の内面、口唇は、篋状工具で調整されている。34・37~39は、小型のもので縄文は施されていない。いずれも炭化物が内外ともに付着している。37は折り返し口縁、39は粗い沈線で「S」字状の懸垂文が見られる。

(石器) すべて覆土出土である。石鐮(1)、ドリル(2)、ポイント(3)、つまみ付ナイフ(4・5)、スクレイパー(6・7)、石斧(8・9)、すり石(10~13)、くぼみ石(14)、石製垂飾品(15)、有孔石(16)

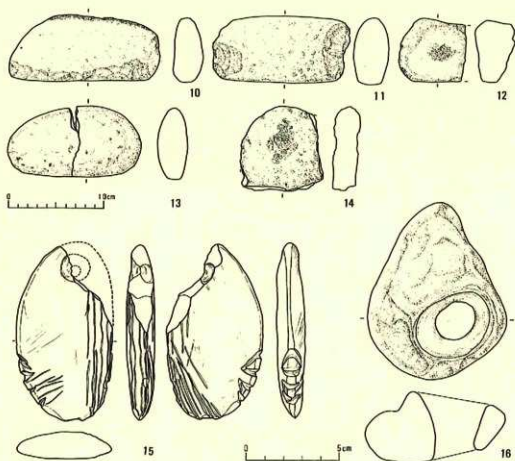
3は、先端部欠損、10は、周囲に敲打痕がある。12は、わずかに敲打によるくぼみをもつ。15は、両面から穿たれた孔をもつ。側縁部を両面から擦り、両刃のように加工している。4は、篋所に刻みを入れている。16は、加工がみられない。

時 期 縄文時代中期中葉と思われる。



図Ⅷ-29 CH-6出土の石器(I)





図Ⅷ-30 CH-6出土の石器(2)

CH-7 (図Ⅷ-31)

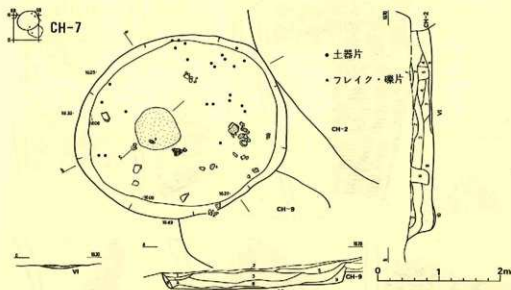
位置 M・N-69

規模 $3.43 \times 2.90 / 3.13 \times 2.15 / 0.36$

特徴 第V層上面で確認する。北側をCH-2に壊され、東側はCH-9を壊し構築されている。平面形は長円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は北側がわずかに高いが、ほぼ平坦である。床面はあまり締っていない。地床が、長軸線上の中央部よりわずかに南側にある。柱穴は検出されなかった。

覆土は、1：黒色土（ローム粒・焼土・炭化物が混じる）、2：黒褐色土（少量のローム粒が混じる）、3：暗黄褐色土（ローム粒が多量に混入）、4：暗黄褐色土（ローム粒混入）、5：暗褐色土（柱穴状のくぼみで焼土粒の細かい粒子が混じる）、6：暗褐色土（柱穴状のくぼみで細かい焼土が混じる）、7：暗黄褐色土、8：暗黄色土、9：褐色土、10：褐色土（多量の炭化物が混じる）。

遺物 床面からの遺物はない。



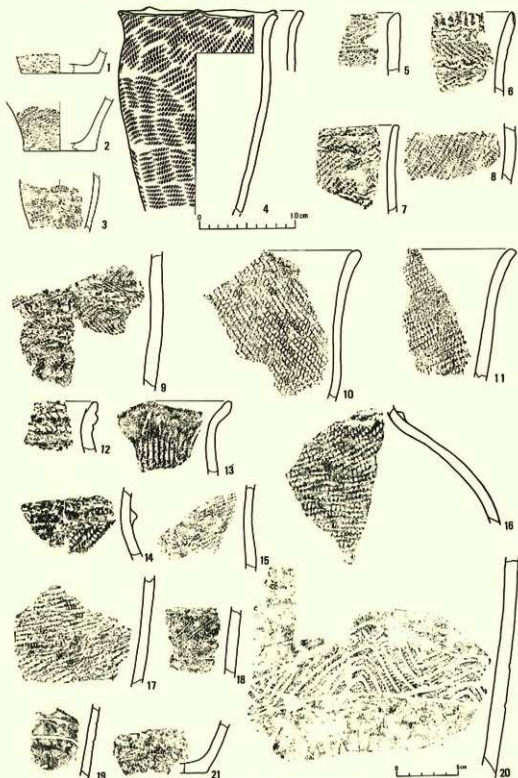
図Ⅶ-31 CH-7

(土器) II群B₁類(5)、III群A類(1・2・6・7・9)、III群B₁類(4・10・11)、III群B₂類(3・8・12・17)、IV群A₂類(18~21)

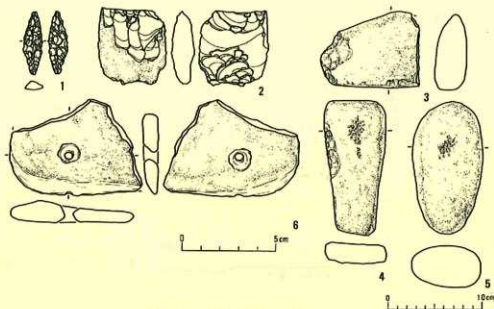
4は、底部欠損。口唇部は平縁で、3箇所に小さな山形突起をもつ。上半部に縦行ないし斜行縄文、下半部には、ほぼ横走する縄文が施されている。10の地文は複節の斜行縄文である。14・16は、壺形土器。頸部を一周する帯状の貼付をもつ。13は、縦行の縄文を施し、口縁部に無文帯をもつ。18・19は、無文地に細い沈線文をもつ、20は、部分的に帯状の縄文を施し、沈線による文様帯区画後、鋸歯状の沈線文を描いている。

(石器) すべて覆土出土である。石鏃(1)、くさび形石器(2)、すり石(3)、たたき石(4・5)、石鋸(6)、6は、欠損している。刃部は片刃である。

時期 時期の判る遺物が出土していないため不明であるが、縄文時代中期前葉と思われるCH-9を切っていること、後期末葉の時期のCH-2に壊されていることから、縄文時代中期前葉から後期末葉の間に構築されたものと思われる。



図VIII-32 CH-7出土の土器



図Ⅶ-33 CH-7出土の石器

CH-8 (図Ⅶ-34)

位置 L・M-67・68

規模 不明

特徴 第IV層上面で確認する。CH-5の覆土1から3層を0.10 m程掘り込んで構築され、竪穴の北東側がCH-10によって壊されている。平面形は、掘り込みが浅く、西側の一部を検出したのみで不明である。壁は緩やかに立ち上がり、皿状である。床面は軟かく締りが無い。CH-10によって北東側が壊された石組炉がある。北西側には炉石の抜き取り跡は見られなかった。

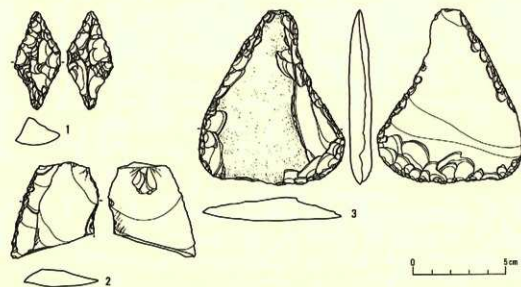
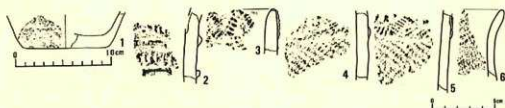
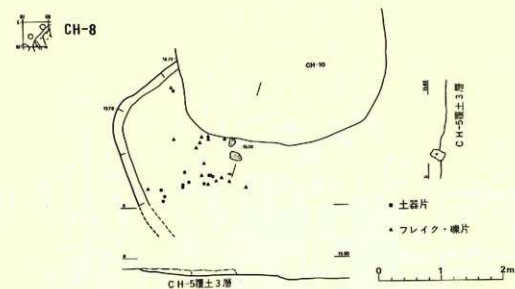
覆土は、1：黒色土（炭化物が混入）

遺物 加工痕のあるものは出土していない。炉石は自然礫を用いている。

(土器) III群A類(2~5)、III群B₁類(6)、IV群A₁類(1)、いずれも覆土から出土している。1は、底部破片である。内面に炭化物が付着している。2~4は、比較的細い貼付帯をもつ。3・5には貼付帯上の縄の圧痕がある。2に無文の貼付帯がある。いずれも半截竹管状工具による刺突が器面に加えられている。6は、斜行縄文が施されている。

(石器) すべて覆土出土である。ポイント(1)、スクレイパー(3・4)、1は粗雑な両面加工で分厚く、明瞭な回転による擦痕と歯こぼれが見られる。ドリルの機能もある。

時期 伴う遺物は出土していないが、縄文時代前期末葉の竪穴(CH-5、円筒土器下層d式)の住居跡の覆土を掘り込んで構築され、同中期後葉の竪穴(CH-10)によって壊されている。したがって、縄文時代前期末葉から中期後葉の間に構築されたものと思われるが、石組炉の形態から、CH-10に先行するが、さほど時間差をもたないものと思われる。



図Ⅷ-34 CH-8と出土遺物

CH-9 (図VIII-36)

位置 N-68・69

規模 (2.30)×1.85/ (1.89)×1.63/0.26

特徴 第V層上面で確認する。西側がCH-7に壊されている。平面形はほぼ隅丸方形と思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は平坦で固く締っている。竪穴のほぼ中央部に地床炉が検出されている。柱穴は竪穴の外に2個検出されている。いずれも浅いものである。

覆土は、1：黒褐色土、2：黄褐色土(多量のローム粒と炭化物が混じる)、3：暗褐色土(第2層と類似するが、ローム粒、炭化物の量が少ない)、4：暗赤褐色土(=焼土)、5：暗黄褐色土(壁崩落土)

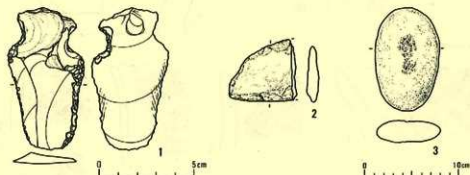
焼土、1：暗赤褐色土(=焼土)、2：炭化物層

遺物 床面からⅢ群A類土器(1)が出土している。

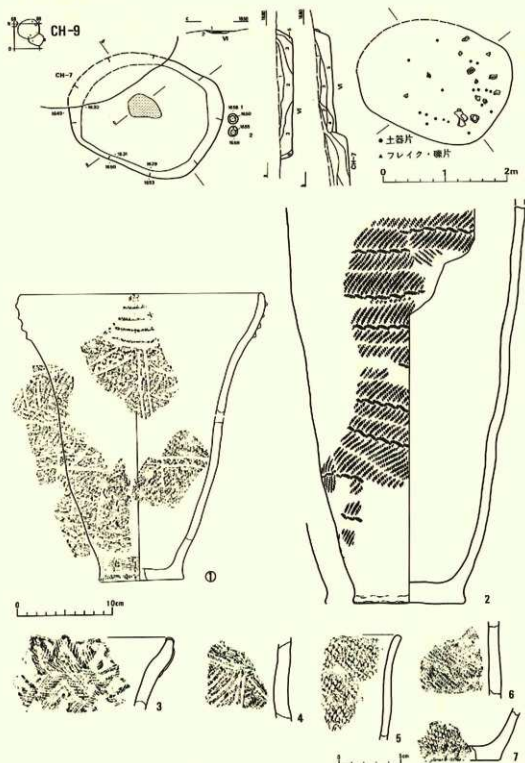
(土器) Ⅲ群A類(1～7)、1は、4つの弁状突起をもつとみられる。突起頂部を4条の貼付帯が弧状に施されている。底部が張り出す深鉢と思われる。地文は羽状縄文であるが、底部付近は無文である。体部には太い棒状工具によって沈線文が加えられている。2は、結束斜行縄文が施されている。底部は張り出している。3は、細い粘土紐を貼付し、貼付帯上と貼付帯の間に3本並列する縄を押圧している。馬蹄形圧痕もみられる。5・7は、複節の斜行縄文で、5には口唇に刻み目がある。

(石器) いずれも覆土から出土している。つまみ付ナイフ(1)、すり石(2)、くぼみ石(3)、2は、所謂半円状扁平打製石器と称されるもの、3は、両面にわずかにくぼみをもつ。

時期 縄文時代中期前葉頃のものとみられる。



図VIII-35 CH-9出土の石器



図Ⅷ-36 CH-9と出土土器

CH-10 (図VIII-37)

位置 L-68

規模 (3.34) × — / (2.95) × — / (0.10)

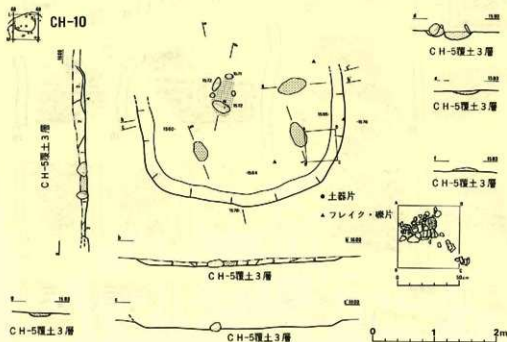
特徴 第V層上面で確認する。CH-5の覆土第1から3層を浅く掘り込んでいる。竪穴東側はCH-8を壊して構築している。平面形は、西側が耕作による削平で検出することが出来なかったが、ほぼ隅丸方形と思われる。壁は緩やかな立ち上がり、皿状である。床は、ほぼ平坦であるが、軟かく締りが無い。床面には、石皿・台石・自然礫を「コ」字状に配列した石組炉がある。石組炉の北側部分には炉石の抜き取り跡は検出されていない。

覆土は、1：暗黄褐色土（炭化物・焼土が混じる）、2：暗黄褐色土（炭化物が混じる）、3：暗黄褐色土（多量のローム粒・少量の炭化物が混じる）、4：黒色土（少量のローム粒が混じる）。

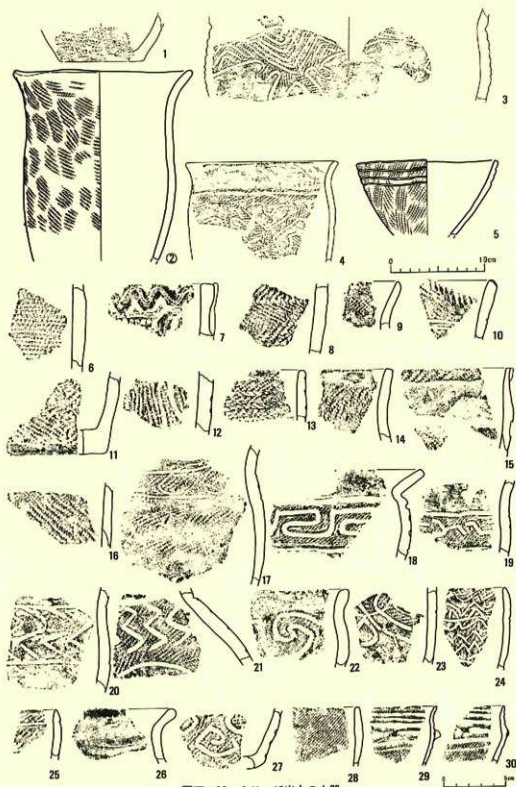
遺物 床面からⅢ群B₂類（2）の一個体分の土器とスクレイパー（1～4）コア（5）、石組炉の炉石として使用されていた石皿（6）と台石（7・8）が出土している。

（土器）Ⅱ群B₂類（1・6）、Ⅲ群A類（7～11）、Ⅲ群B₁類（12）、Ⅲ群B₂類（2・13・14）、Ⅳ群A₁類（15・16）、Ⅳ群A₂類（3・4・17～27）、Ⅴ群B類（5・28～30）

Ⅱ群B₂類はいずれも多軸絡条体による回転文である。7は、同じ撚りの縄を2本平行に圧痕し、縄端による刺突を加えている。12は、沈線施文後、器面をかるくなでたようにみえる。2の縄文は、原体を縦位方向に回転させている。14は、口縁部に幅1 cm 程の無文帯がある。15は、貼付帯間が無文である。3は、縄文施文後、沈線で文様を区画している。4も同様の



図VIII-37 CH-10

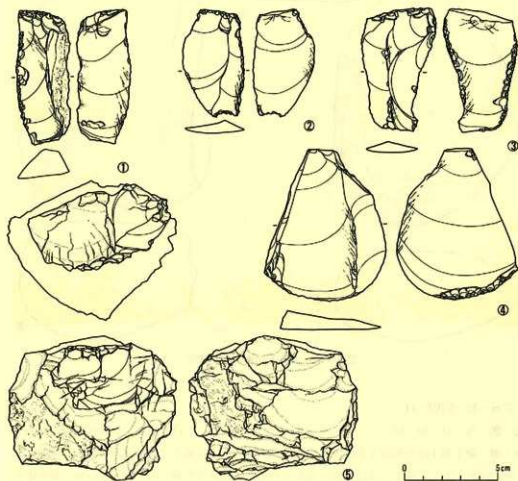


図Ⅷ-38 CH-10出土の土器

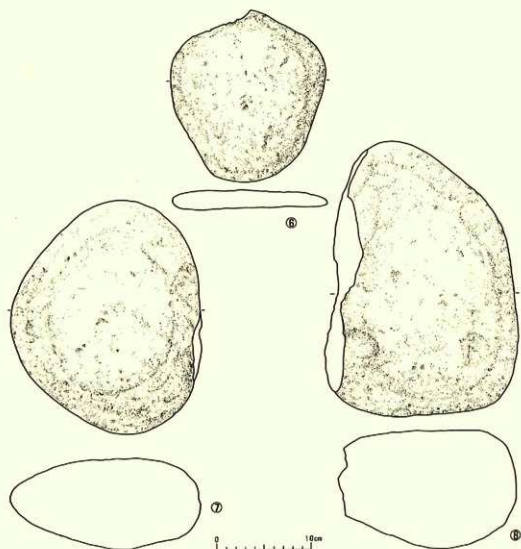
施文方法である。内面調整は粗雑で、多くの擦痕を残す。5は、胎土に少量の砂粒を含む、焼成は悪い。29・30は、口唇内部に1条の沈線をもち、器面に炭化物が付着している。

(石器) いずれも床面から出土している。スクレイパー (1~4)・コア (5)

時 期 縄文時代中期後葉と思われる。



図VIII-39 C H-10出土の石器(I)



図Ⅷ-40 CH-10出土の石器(2)

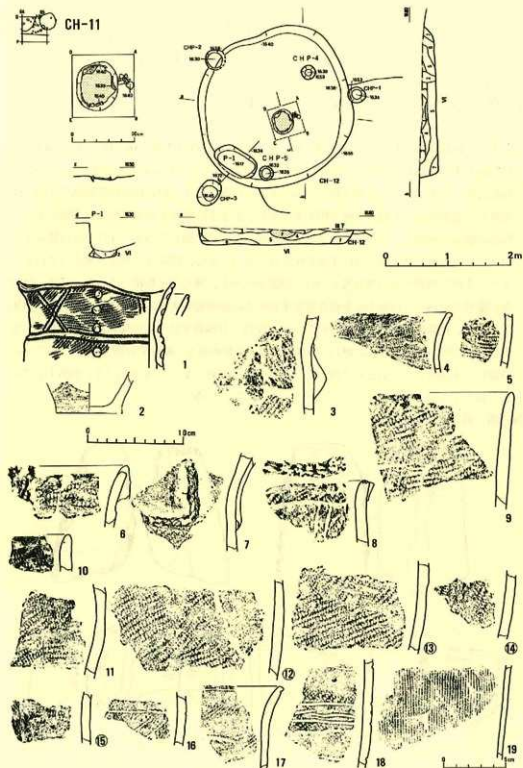
CH-11 (図Ⅷ-41)

位置 N・O-64・65

規模 $2.71 \times 2.50 / 2.47 \times 2.24 / 0.30$

特徴 第Ⅴ層上面で確認する。竪穴の東部分がCH-12を壊して構築されている。平面形はほぼ円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床はほぼ平坦で固く締っている。竪穴中央部よりわずかに東側に土器片を用いた土器片がある。ビット(P-1)が竪穴南側の壁際に検出されている。規模は、 $0.70 \times 0.40 \times 0.17$ で壁側がオーバー・ハングしている。柱穴は竪穴内外で5個検出されている。その配列に規則性は見い出せなかった。

覆土は、1：黒褐色土（炭化物が混じる）、2：暗黄褐色土（柱穴の可能性あり）、3：暗黄



図Ⅷ-41 CH-11と出土土器

褐色土（ローム粒が混入）、7：暗黄褐色土（第Ⅳ層崩落土）

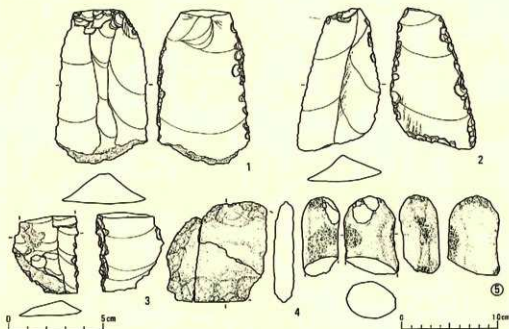
尚、本竪穴の覆土中位に焼土が確認されている。このことは、この竪穴が完全に埋まる前にくぼみを再利用したことが考えられる。したがって覆土第1～4層は、二次的に利用された後に堆積したものと思われる。

遺物 床面から炉の材料として用いていたⅢ群B₂類（12～15）と擦石（4）、たたき石（5）が出土している。

（土器） Ⅲ群A類（2・3）、Ⅲ群B₂類（1・4～15）、Ⅳ群A類（16～18）、Ⅴ群（19）。3は、粘土紐を貼付け、その上やその間に撚りの方向の異なる3本の縄を組合せた押圧がある。体部には、結束羽状縄文が施されている。1は、口縁部に4つの低い山形隆起部をもつ。隆起部から器面をえぐり取った様な円形文を施し、わずかに盛り上がる貼付帯と縄線によって頸部文様帯を区画し、その間に2条の縄の圧痕をX字状に施している。4は、ほぼ横走る縄文で、口唇直下に1条の縄による押圧が見られる。6は、横走る縄文が施されている。7は、上面に縄線をもつ貼付帯をつけ、頸部を区画し、無文帯を作出している。8は、口縁部に貼付帯を施し、口唇上に半截竹管状工具による連続刺突文がある。11～15は、同一個体と思われ、複節の斜行縄文が施されている。17は、口縁直下に1条の細い沈線が施され、器面に細かな斜行縄文がある。19は、深鉢形をなすと思われる。縦行する縄文が施されている。

（石器） 床面から、炉石として用いられていた、すり石（4）、たたき石（5）が出土している。覆土からは、スクレイパー（1～3）が出土している。

時期 縄文時代中期後葉



図Ⅷ-42 CH-II出土の石器

CH-12 (図VIII-43)

位置 O-65

規模 $3.26 \times \text{---} / 3.09 \times \text{---} / 0.09$

特徴 第V層上面で確認する。西側の一部がCH-11、風倒木による擾乱をうけている。南側は調査範囲外である。平面形は欠失している部分も多いが隅丸方形と思われる。壁は緩やかな立ち上がりを見せ、皿状である。床は固く締っている。地床炉は2箇所検出されている。竪穴のはは中央部のものと、やや南側のものがある。柱穴は6個検出されている。

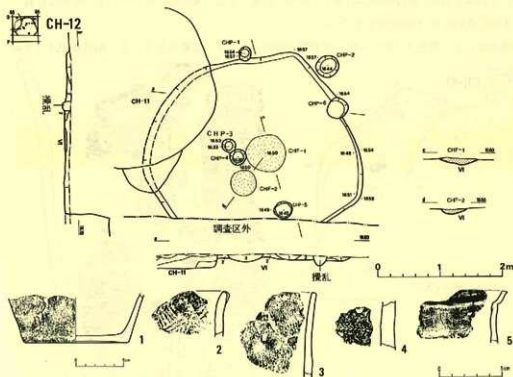
覆土は、1：褐色土、2：暗黄褐色土（炭化物が混じる）

遺物 床面からUフレイク（2）が出土している。

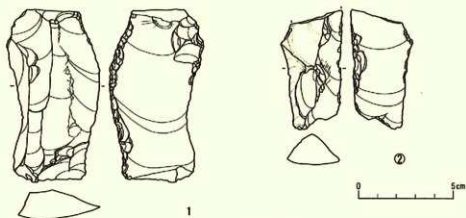
（土器） III群A類（2～4）、IV群A類（1）、V群B類（5）、2～4は、いずれも多量の砂礫粒を含み脆弱である。1は、無文である。5は、壺形の口縁部破片、内側に1条の沈線がみられる。

（石器） 床面からUフレイク（2）、覆土からスクレパー（1）、が出土している。

時期 縄文時代中期後葉（大安在B式土器）の竪穴住居によって壊されていることから、それ以前のものと思われる。



図VIII-43 CH-12と出土土器



図Ⅶ-44 CH-12出土の石器

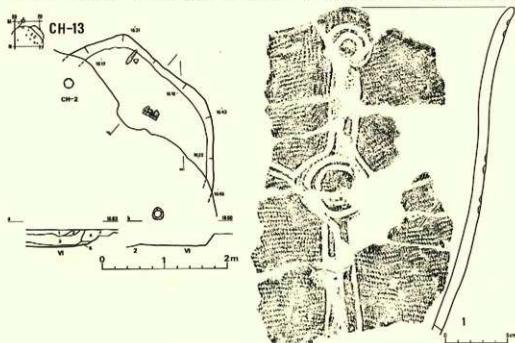
CH-13 (図Ⅶ-45)

位置 M-69・70

規模 不明

特徴 第Ⅴ層上面で確認する。CH-2により大部分壊されていて、竪穴の北側部分を検出したのみである。壁は緩やかに立ち上がり、皿状である。床は固く締っている。柱穴はCH-2の竪穴内から2個検出されている。

覆土は、1：黒色土（ローム粒、炭化物が混じる）、2：暗黄褐色土、3：暗黄褐色土（多量



図Ⅶ-45 CH-13と出土土器

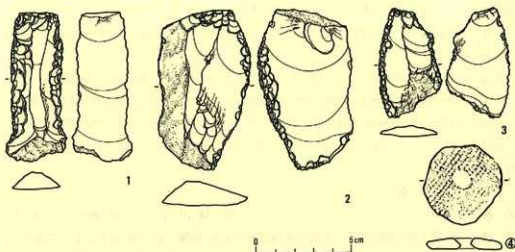
のローム粒と、少量の炭化物が混じる)、4:暗黄褐色土(多量のローム粒と少量の炭化物が混じる)、5:黒色土(ローム粒、暗赤褐色土=焼土、炭化物が混じる)

遺物 床面からⅢ群B₁類(1)と土製円盤(4)が出土している。

(土器) 大形の弁状突起をもつ。口縁部がゆるやかに外反している。口唇部断面は、丸味をもつ。地文として横走する縄文が施され、その上に太い棒状工具で沈線文が描かれている。

(石器) いずれも覆土から出土している。スクレイパー(1~3)は縦長剥片を素材としたものである。4は、床面から出土している。縄文のみのものであるがⅢ群B₁類の可能性はある。

時期 縄文時代中期中葉



図Ⅷ-46 CH-13出土の石器

(2) 土壌 (図Ⅷ-1)

本調査区からTビット(1)、土壌(13)と多くの柱穴状小ビットが検出された。Tビットは溝状のものである。昭和60年度の調査でもB地区のC地区寄り、同様な形態をもつもの(2)が確認されている。これらは、C地区の沢頭に沿う様に配列されている。土壌は断面形態によって、フラスコ状のもの(CP-4・10・11・13・15・16)、皿状のもの(CP-3・5・12)、円筒形のもの(CP-7・8・14・17)がある。フラスコ状の土壌は壱口・壱底の径が1m内外のものである。円筒形の土壌は壱口部の径が1m内外のものである。その覆土から北海道式石冠を出土したものが2例ある。C地区から検出された土壌は、A地区、B地区で見られた壱底部の径が2mをこえる大型のフラスコ状のものは見られず、比較的小型のものが多い。土壌の分布は、調査区東側の沢縁辺や沢斜面肩部分に多い。小ビットは壱穴住居跡が分布する範囲に多い。小ビットについては数が多く、遺物を出土したものの一部を図示した。全体の分布状態は遺構分布図に示してある。

CTP-1 (図Ⅷ-47)

位置 M・N-60

規模 $2.70 \times 0.83 / 2.52 \times 0.21 / 1.23$

特徴 Ⅲ層下部で確認する。平面形は長楕円形で、溝状である。開口部は漏斗状に開く。

壁の中位でオーバー・ハングし、狭くなっている。墳底は幅0.30m程で比較的しまった状態である。

覆土は、1：黒色土、1：灰白色土（粒子が極めて細かく灰状である。火山灰起源のものと思われる）、Ⅲ：暗褐色土（Ⅲ層下部と同質）、2：黒色土（乾燥するとクラックが入る）。3：黒色土（ローム粒の混入）、4：黒色土（ローム粒混入なし）、5：暗褐色土、6：黄褐色土（黒色土ブロックの混入）、7：暗褐色土、8：黄褐色土（壁崩落土）、9：暗黄褐色土（第8層と同質）、10：黄褐色土（第9層と同質、炭化物混入）、11：暗褐色土

遺物 すべての覆土からの出土で、3～6層に集中している。

（土器）Ⅲ群A類（1）、Ⅳ群A₁類（2・8）、Ⅳ群A₂類（3・5・7・9～12）、Ⅳ群C類（6・13・14）。

1は、口唇部に縄の圧痕がある。4・7・9～12は、同一個体と思われる。13は、切り出しナイフ状の口縁部で、地文上に細く浅い沈線を加えている。4は、口縁部を沈線で区画し、外面は爪形文、内面は円形刺突文を加えている。胎土は砂礫を多く含み、脆弱である。

（石器）Uフレイク（15・16）、たたき石（17）が出土している。

時期 不明

CP-3 (図Ⅷ-48)

位置 O-69

規模 $0.47 \times \text{—} / 0.46 \times \text{—} / 0.11$

特徴 第Ⅴ層上面で確認する。上面に後期初頭の土器（図Ⅷ-93-58）がまとまって出土し、その下部に暗褐色土のひろがり確認された。平面形は、ほぼ円形を呈し、皿状である。墳底は締りなくぼろぼろである。

覆土は、1：暗黄褐色土（黒色土ブロックの混入）、2：黄褐色土

時期 縄文時代後期前葉と思われる。

CP-4 (図Ⅷ-48)

位置 M-65

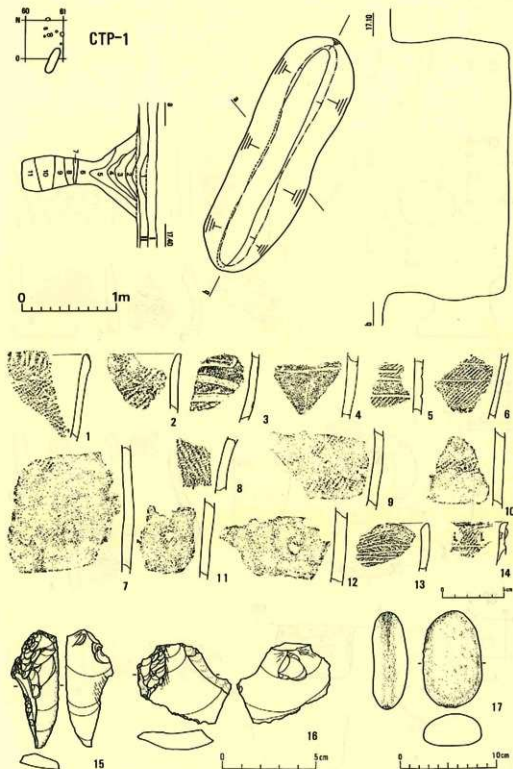
規模 $0.54 \times 0.78 / (0.43) \times 0.71 / 0.60$

特徴 東側沢斜面で確認する。覆土の暗黄褐色土が締りなく、ぼそぼそした感じであったため、最初は拔根穴とみなされたが、調査後の形状が小さなフラスコ状であるため、ビットとして扱った。

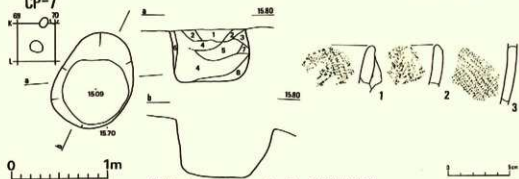
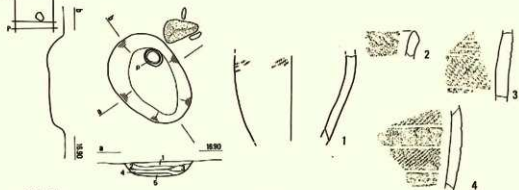
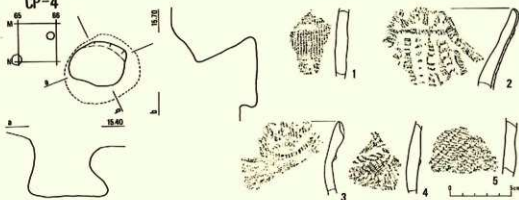
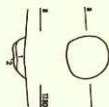
遺物 すべての覆土からの出土である。

（土器）Ⅱ群B₂類（1）、Ⅲ群A類（2～5）、1には、撫糸文、2には、細い貼付帯上に縄の圧痕と器面に半截竹管工具による刺突文が施されている。

時期 縄文時代中期中葉かと思われる。



図Ⅷ-47 CTP-1と出土遺物



図Ⅷ-48 CP-3・4・5・7と出土土器

CP-5 (図VIII-48)

位置 O-68

規模 $1.01 \times 0.70 / 0.74 \times 0.50 / 0.15$

特徴 第III層下部を確認する。CF-48に近接している。東側には、自然礫の立石がある。

平面形は卵形で皿状である。墳底に底部と口縁部の欠損した小型土器が正立して埋設されている。

覆土 1:暗褐色土(黄褐色ロームが混じる)、2:黒褐色土、3:褐色土(ロームが若干混じる)、4:褐色土(焼土・焼骨片が混じる)、5:暗黄褐色土

遺物 床面からIV群A₂類(1)が出土している。

(土器) III群A類(2・3)、2は口唇部に刻み目をもつ。IV群A₂類(1・4)、1は不規則な斜行縄文がわずかに施されている。4は縄文施文後、沈線で区画している。

時期 縄文時代後期前葉と思われる。

なお、覆土第4層から出土した焼骨片の同定結果は一覧表に示してある。

CP-7 (図VIII-49)

位置 J・K-69

規模 $1.04 \times 0.78 / 0.74 \times 0.50 / 0.54$

特徴 第V層上面を確認する。平面形は開口部で長円形で墳底面はほぼ円形を呈す。壁は垂直に立ち上がる。

覆土は、1:黒色土、2:黒色土(ローム粒混入)、3:暗黄褐色土、4:暗黄褐色土(炭化物が混じる)、5:褐色土、6:暗褐色土(崩落土)、7:暗褐色土、8:褐色土

遺物 すべて覆土から出土した。

(土器) III群A類(1~3)、1は、縄文を施した貼付帯が口縁部にある。

時期 縄文時代中期中葉かと思われる。

CP-8 (図VIII-49)

位置 J・K-69・70

規模 $0.80 \times 0.77 / 0.70 \times 0.74 / 0.37$

特徴 第V層上面を確認する。平面形、墳底とも円形である。壁は垂直に立ち上っている。

覆土は、1:黒色土、2:暗黄褐色土(ローム粒、炭化物混入)、3:暗黄褐色土、4:暗黄褐色土(ローム塊の混入)、5:黄褐色土(崩落土)

遺物 墳底出土のものはない。覆土中位の同レベルから北海道式石冠とすり石が並んで出土している。

(土器) III群A類(1~4)、いずれも胴部破片である。

(石器) 5は、北海道式石冠、6は、すり石である。

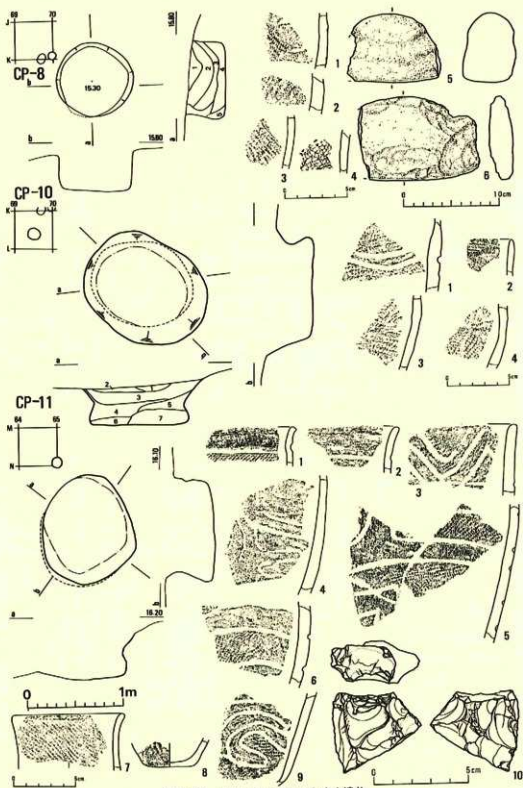
CP-10 (図VIII-49)

位置 K-69

規模 $1.32 \times 1.06 / 0.96 \times 0.90 / 0.40$

特徴 第V層上面を確認する。平面形は楕円形を呈す。壁はわずかにオーバー・ハングし、墳底は固く平坦である。

覆土は、1:黒色土、2:褐色土(ローム粒の混入)、3:黄褐色(ローム粒混入)、4:



図Ⅷ-49 CP-8・10・11と出土遺物

暗褐色土、5：黄褐色土（ローム粒混入）、6：暗褐色土（ローム粒混入）、7：暗褐色土（黒色土ブロック状に混入）

遺物 すべての覆土からの出土のものである。

（土器） III群A類（1～4）、1は、地文上に太い沈線が施されている。

時期 縄文時代中期中葉と思われる。

CP-11（図VIII-49）

位置 N・O-66・67

規模 $1.02 \times 1.00 / 0.87 \times 0.86 / 0.46$

特徴 第IV層上面で確認する。沢東側斜面の肩部に位置するため、東側は、欠失している。

平面形はほぼ円形を呈すと思われる。壁はオーバー・ハングしている。

遺物 すべての覆土からの出土のものである。

（土器） III群B₁類（7）、IV群A₂類（1～6・8・9）、4は無文地に比較的太い沈線によって曲線文が施されている。3・5・6は、同一個体と思われる。口縁部にわずかに縄文が見られる。胴部には太い沈線で区画された磨消文が施されている。8・9は、同一個体と思われる。胎土に少量の繊維を含む、胴部には曲線的な磨消文が施されている。

（石器） コア（5）が覆土から出土している。石材は頁岩である。

時期 縄文時代後期

CP-12（図VIII-50）

位置 M・N-67・68

規模 $1.07 \times 1.00 / 0.92 \times 0.82 / 0.28$

特徴 第V層上面で確認する。平面形は、ほぼ円形を呈す。第V、VI層を約30cm程掘り込んでいる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。墳底は平坦である。壁側の墳底から柱穴状の小ビットが3個検出されたが、木根の可能性もある。

覆土は、1：暗褐色土（ローム粒が多量に混入する）、2：黒色土、3：暗褐色土（ローム・ブロックが混入する）、4：黒色土

遺物 すべての覆土からの出土のものである。

（土器） III群（1～3）1～2は胴部破片、3は底部破片である。いずれも地文として斜行縄文が施されている。

時期 縄文時代中期

CP-13（図VIII-50）

位置 L・M-66・67

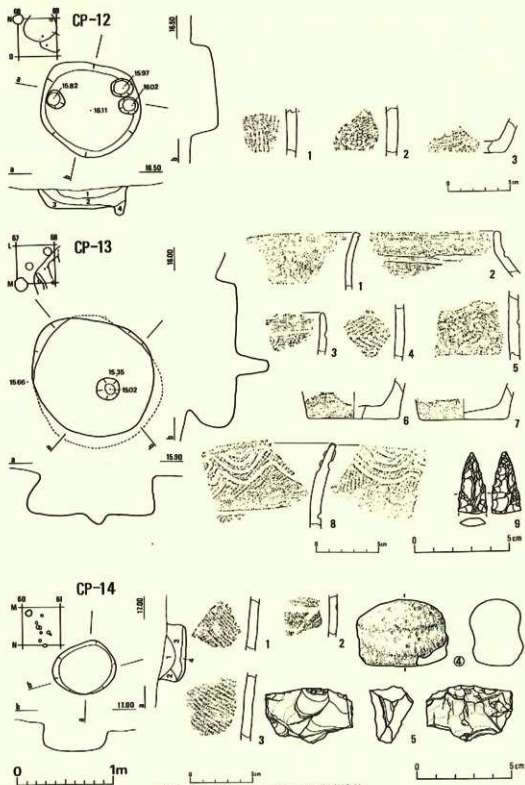
規模 $1.40 \times 1.22 / 1.30 \times 1.29 / 0.46$

特徴 沢東側斜面肩部分に位置する。平面形はほぼ円形を呈すと思われる。東側はけずられているが、壁北側は、オーバー・ハングしている。墳底はほぼ円形で平坦である。東側壁よりに深さ40cm程の柱穴状ビットが検出された。

遺物 すべての覆土からの出土のものである。

（土器） III群A類（4）、III群B類（5）、IV群A₂類（1～3・6～8）、4は、結束羽状縄文、5には、羽状縄文上に縄線文が加えられている。1は、口唇直下に細い沈線がある。3

Ⅷ 新道4遺跡 C地区の調査



図Ⅷ-50 C P-12・13・14と出土遺物

は、磨消縄文に細い半截竹管状工具による刺突文がある。8は、口唇部に部分的に斜行縄文を施し、弧状の沈線文が加えられている。口唇上にも縄文がある。

(石器) 石鏃片(9)が出土している。石材は頁岩である。

時期 縄文時代後期と思われる。

CP-14 (図Ⅶ-50)

位置 M-60

規模 $0.67 \times 0.53 / 0.56 \times 0.47 / 0.27$

特徴 B地区の境界に近接した位置にある。第VI層上面で確認する。平面形は、楕円形を呈す。壁は、第V、VI層をほぼ垂直に立上がる。墳底は平坦である。

覆土は、1：暗黄褐色土(第III層下部に数段のローム粒が多量に混入する)、2：暗黄褐色土(崩落土、ローム粒が混入)、3：暗黄褐色土、4：暗黄褐色土(上層と同質=崩落土)

遺物 すべて覆土からの出土のものである。

(土器) III群(1・3)、V群A₂類(2)、1・3は、比較的細かな斜行縄文である。2は、無文地に太い沈線文が加えられている。

(石器) 北海道式石冠(4)、コア(5)がいずれも覆土第3層から出土している。4の石材は安山岩、5は頁岩である。

時期 縄文時代中期前葉

CP-15 (図Ⅶ-51)

位置 L・M-69

規模 $\text{—} \times 0.45 / \text{—} \times 0.54 / 0.37$

特徴 竪穴住居跡CH-5の調査中、北側の壁付近で確認する。平面形は切り合いのため詳細は不明であるが、ほぼ楕円形を呈するものと思われる。断面形はフラスコ状である。CP-15が新しいと思われる。

覆土は、1：黒褐色土、2：褐色土(ローム粒が混じる)、3：暗褐色土、4：暗褐色土

遺物 遺物は出土していない。

時期 形態から縄文時代中期と思われる。

CP-16 (図Ⅶ-51)

位置 L-67

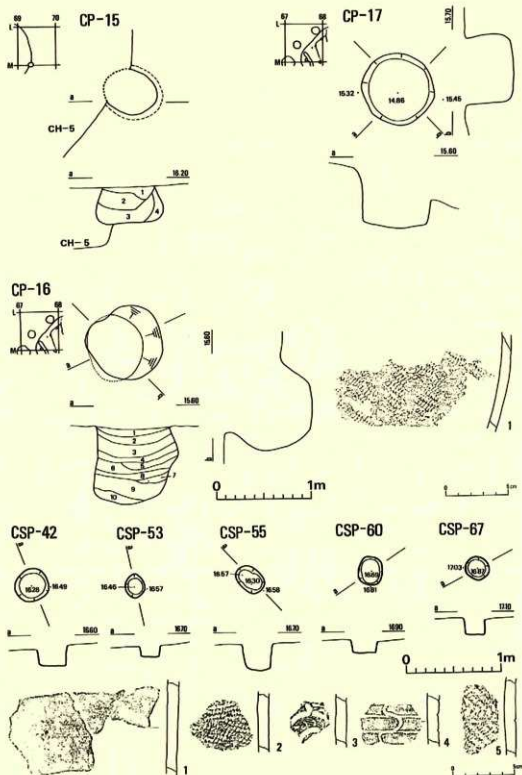
規模 $0.68 \times 0.64 / 0.68 \times 0.60 / 0.93$

特徴 CH-5に隣接して沢東側斜面肩部分に位置する。第V層上面で確認する。西側は、斜面のため、欠損している。壁は、南側がオーバーハングし、西側はほぼ垂直に立ちあがる。

覆土は、1：暗黄褐色土(ほぼそとしまりが悪く、少量の炭化物混入)、2：暗黄褐色土(1と同質だが、わずかに黄色味が強い。少量の炭化物が混入)、3：暗黄褐色土(ローム粒混入)、4：暗黄褐色土、5：暗黄褐色土(第2層と同質)、5：暗黄褐色土(わずかに黒味が強い)、6：暗黄褐色土(ローム粒が混入)、7：暗黄褐色土(第1層と同質)、8：暗黄褐色土(第2層と同質)、9：暗黄褐色土(第1層と同質、ブロック塊が混入)、10：黄褐色土

遺物 すべて覆土からの出土のものである。

(土器) III群C類(1)、1は、不規則な斜行縄文が施されている。



図Ⅷ-51 C P-15・16・17, 小ビットと出土土器

時期 縄文時代後期かと思われる。

CP-17 (図Ⅷ-51)

位置 L-69

規模 $0.74 \times 0.73 / 0.64 \times 0.64 / 0.52$

特徴 平面形は円形である。壁は垂直に立上がる。墳底は、ほぼ平坦である。

時期 縄文時代中期ないし後期のものと思われる。

(3) 焼土 (図Ⅷ-2)

焼土は、55箇所検出された。多くのものは調査区の東側に集中している。竪穴住居跡の覆土から検出されたものもあるが、ほとんどのものは包含層のⅢ層からⅤ層で検出された。規模は、大規模なものもあるが、長軸が1m内外のものが多く、層厚も10cm前後である。竪穴住居跡覆土の中位から検出された焼土のなかには、くぼ地を利用して竪穴住居を構築した可能性のあるものもある。長軸が4mを超える大規模なもの(CF-55)が、後期前葉のトリサキ式、大津式土器が集中して出土しているJ-62・63で検出されている。検出状況は、廃棄された多量の土器に挟在し、二次堆積の状態で検出された。これらのことから、焼土の形成時期は後期前葉のトリサキ式、大津式土器の時期である。焼土・土器の廃棄によって調査区西側の調査範囲外にこれらの時期の遺跡が広がることを示している。

焼土は個々の図示を省略し、分布図のみを示す(図Ⅷ-2)。焼土の計測値、フローテーション選別法で得られた自然遺物の同定結果は、一覧表で示した(表Ⅷ-1、表Ⅷ-14)。

4 遺物

(1) 土器集中I (図Ⅷ-52)

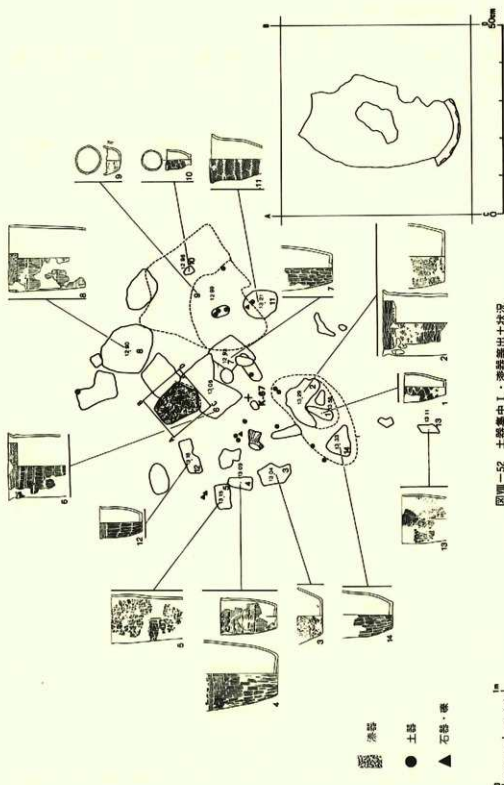
調査区東側斜面の沢底部分のJ・K-66・67でⅡ群B類を主体とする土器が集中して出土している。出土層位は沢底を構成している砂層上部の水つき黒色粘土質土層Ⅳ層である。その上部には、縄文時代前期～後期の遺物を包含する砂礫層が1m以上堆積している。本遺跡の基本層序と符合しない堆積状態を示している(図Ⅷ-3、図Ⅷ-82を参照)。土器の出土状況は、小型土器は潰れた状態で出土しているが、大型のもののほとんどは、半完形、大形破片ないし小破片で出土している。また水つき部分のため、土器が著しく磨滅したり、きわめて脆くなっている接合作業の困難なものが多かった。したがって、復原土器数は少なく、復原されたものでも半完形のものが大半である。

復原土器の特徴は次の通りである。

実測図1 小型深鉢で、口縁は平縁である。口縁部と体部には斜方向に異なる不規則な斜行縄文が施されている。Ⅲ群A類と思われる。同地点の30cm下位から実測図2a、2b、実測図14の土器が出土している。

実測図2a 底部は欠失した筒形土器である。比較的幅の広い口頸部をもち、数条の縄の不規則な押捺が加えられている。わずかに隆起した頸部下端に竹管状工具による刺突が施されている。体部の上部に綾格文、体部に多軸格条体回転文がある。

実測図2b 筒形土器、平底の底部である。体部は多軸格条体の回転文がある。実測図2a



図面-52 土砂・礫出土状況

と同一個体の可能性がある。

実測図3 筒形土器の揚げ底の底部である。体部には、撚糸文風の縄文がある。

実測図4a 筒形土器の揚げ底の底部である。体部は撚糸文で、結束羽状が加えられている。

実測図4b 小型筒形土器である。口縁は平縁で、比較的広い口頸部文様帯をもつ。文様帯内は縄線で三角形を描いている。体部には多軸絡条体の回転文がある。頸部と体部に数段の結束羽状縄文がみられ、体部は多軸絡条体の回転文である。

実測図5 底部を欠失する筒形土器で、口頸部文様帯に縄線文を施す。体部には多軸絡条体の回転文がある。

実測図6 底部を欠失する筒形土器である。口縁部は極めて緩やかな山形隆起部を4箇所にもつと思われる。口頸部文様帯に縄線で矢羽状の文様を描いている。体部は撚糸文で、頸部と体部に数段の幅の狭い結束のある斜行縄文を加えている。盆状の漆器を一部覆った状態で出土している。

実測図7 筒形土器の揚げ底の底部である。体部は不規則な撚糸文である。

実測図8 円筒形土器である。底部は欠失している。口縁は平縁である。比較的幅の狭い口頸部文様帯に縄線によって文様が施されている。頸部下端はわずかに隆起し、円形刺突文が加えられている。体部は撚糸文で、頸部直下と体部に数段の結束羽状縄文を施している。

実測図9 II群B類の多量の小破片を一括して取り上げた資料の中から復原されたものである。したがって、明確な出土点を捉えることが出来なかった。無文の小型浅鉢である。口縁部に2箇所の隆起部をもつ。調整は粗雑で、調整痕と思われる擦痕、指頭痕がみられる。底部は丸底ぎみである。

実測図10 小型土器である。多量のII群B類小破片中に潰れた状態で出土している。調整は粗雑である。体部には撚り戻しのある原体による斜行縄文が施されている。底部は揚げ底である。

実測図11 実測図9が出土したII群B類の土器片集中地点より約20cm高いレベルから出土している。底部は欠失している。口縁は平縁で、口唇は切り出してナイフ形である。器面全体に結束羽状縄文が施され、部分的に綾絡文がある。III群A類に比定される。

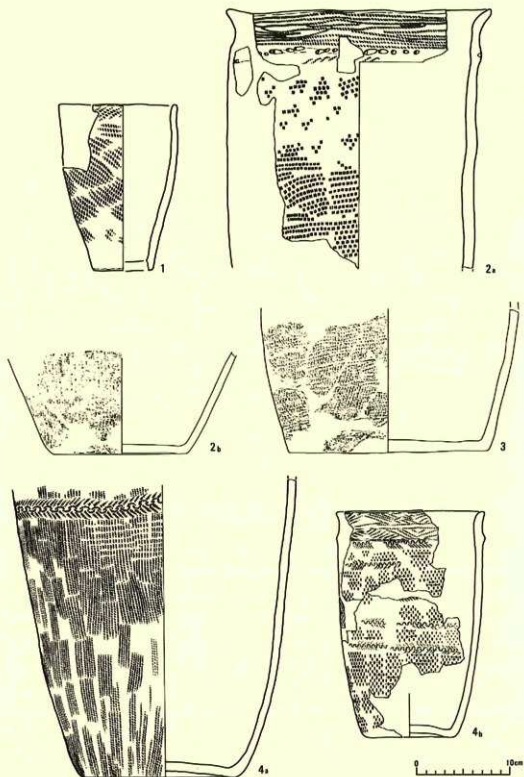
実測図13 平縁の円筒深鉢と思われる。幅の狭い口頸部に4条の縄線が押捺されている。体部は撚糸文、頸部と体部に数段の結束羽状縄文がある。

実測図14 平底の底部である。体部には撚糸文がある。

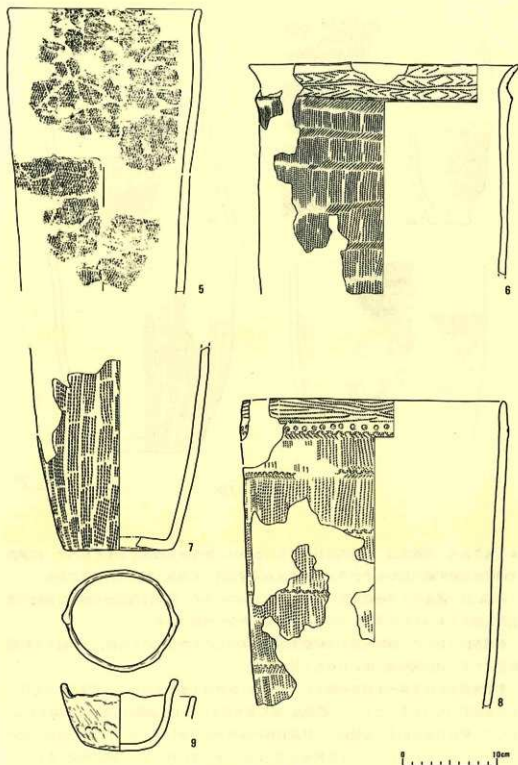
実測図1、11以外は、器形、文様構成、出土状況からII群B類土器に属するものと思われる。

1、11のIII群A類土器の出土状況は先述した通りII群B類土器とはレベル差を持って出土している。したがって、II群B類土器は、比較的混入の少ない一括資料と思われる。本II群B類土器の資料の特徴は次の通りにまとめられる。

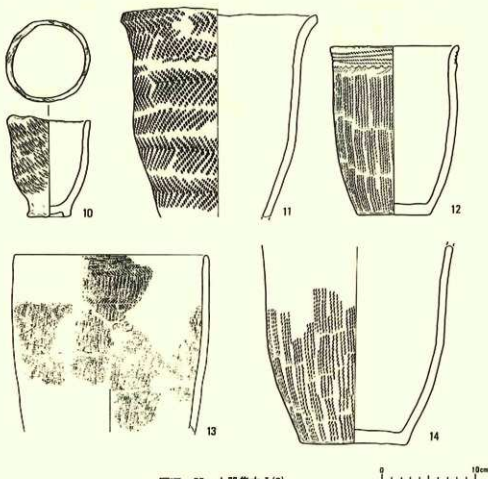
口縁部形態は、平縁ないし緩やかな山形を呈す。平縁のものは口頸文様帯の幅が狭いものに



図Ⅷ-53 土器集中Ⅰ(1)



図Ⅷ-54 土器集中Ⅰ(2)



図Ⅷ-55 土器集中Ⅰ(3)

多く施される。縄線文は、数段の平行線のものが多い。緩やかな山形を呈するものは、口頭部文様帯が比較的幅の広いものも多く、施される縄線文は、矢羽状、三角入れ子状である。

体部には、燃糸文と多軸絡条体の回転文を施すものがある。前者は頸部から体部に数段の結束羽状縄文をもつものが多いようであり、後者は少ない傾向がある。

本調査区において、体部文様が多軸絡条体回転文のものと燃糸文のものは、それほどの時間差をもたず、ほぼ同時期に用いられたと思われる。

集中地点からは多量の土器片が出土している割には復原土器数が少なく、復原されてもほとんど半完形のものが多いことから、破損品、破片等を廃棄した土器捨場的な性格を想定される。そして、Ⅱ群B類の出土分布傾向が、Ⅱ群B類の時期の住居跡CH-5に近接した斜面、沢底に集中していることから、この土器捨て場と想定される集中はCH-5の時期に形成されたことを示していると思われる。

なお、ここから盆状の漆器が比較的良好な状態で出土している。現存の大きさは、40 cm×22 cmで縁はわずかに立ち上がる。その先端には間隔をおき突起があったと思われる痕跡が見られる。木地は、わずかに縁辺部に残っているが、中央部は漆膜のみである。出土状況図、出土状況写真を掲載してある。

また、この周辺の同じ層から、石斧柄、加工痕のある材を含む96点の材が出土している。本報告において保存処理の終了したもの数点を掲載した。(図VIII-160・161)

なお、両側に切断痕のある半載状の丸太材(長さ約220×径30 cm)がある。これから採取した一部材の¹⁴C年代測定の結果は、次の通りである。

測定結果 K S U-1,205 4,430±40 y. B. P.(炭化量 7.31 g)

(2) 土器集中II (図VIII-56)

沢西側斜面、J-62・63グリッドで部分的に認められた第II層の下位に、砂礫・黄褐色ローム粒・炭化木片の混じる暗褐色土層が確認され、その中に焼土(CF-55)が検出された。その焼土上面から下位にかけて後期前葉と思われるトリサキ式と大津式が集中して出土していることが判った。斜面ではあるが焼土の上部をIII a層、下部をIII b層として遺物をとりあげた。III b層下位の黒褐色土層(III c層)、最下位の礫層上面(III d層)にまで同期の土器を包含していることが判り層別に遺物を取り上げた。層序は次の通りである。(図VIII-56)

I 層 黒色土 攪乱層で、盛土、耕作土等を含み、基本層序II層上部の黒色土を一括して扱った。

II 層 暗褐色粘土質火山灰、基本層第II層。

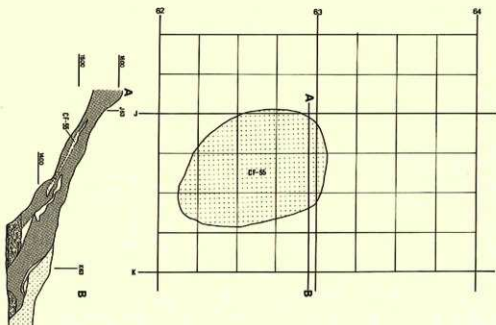
III a層 暗褐色粘土～シルト質腐植土、径2 cmほどの黄褐色ローム粒、径10 cm内外の礫、径2 cmの炭化木片を含む。III a層中にローム粒、ローム粒の多い部分が挟んでいる。

III b層 暗褐色粘土～シルト質腐植土、III a層と同質であるがCF-55の下位にある。

III c層 黒褐色粘土質腐植土、径3 cm以下の炭化木片、径1 cm以下の黄褐色ローム粒を含む。

III d層 礫層、径10 cm以下の頁岩、亜円～円礫からなる海成段丘堆積物。

グリッド別、層別に整理を行なった結果、III a層とIII b層とで接合関係が生じ、また土器の器形、文様構成等の観察からもほとんど時期差のないことを判ったので、III a層、III b層を一括して扱うことにした(以下III層と呼称する)。ただし、図版においてはIII a層、III b層を一括して扱ったが、掲載土器一覧表においては区別して示している。接合関係は、各層間において見られたが、復原土器においては接合した破片数の多い層で扱った。なお、IV群A₂類についてはa、bに細分し、aはトリサキ式相当、bは大津式相当のものとした。



図Ⅶ-56 土器集中Ⅱ，土層断面図とC F-55

J-62 グリッド

第Ⅰ層出土の土器（攪乱層）（図Ⅶ-60-35～51）

中期前葉から晩期前葉の遺物が出土している。35・36はⅢ群A類で、35は縄による馬蹄形圧痕文のみられるものである。37はⅢ群B₁類、38・39はⅢ群B₂類、40・41はⅣ群A₂類aのトリサキ式、42～48はⅣ群A₂類bの大津式、49・50はⅣ群B類、51はⅤ群B類で頸部無文帯下位の3条の沈線の最上段内に三角状の刺突が加えられている。

第Ⅲ層出土の土器（図Ⅶ-57-1～12、図Ⅶ-61・62-52～101）

前期末葉から後期前葉の土器まで出土している。主体は後期前葉Ⅳ群A₂類である。

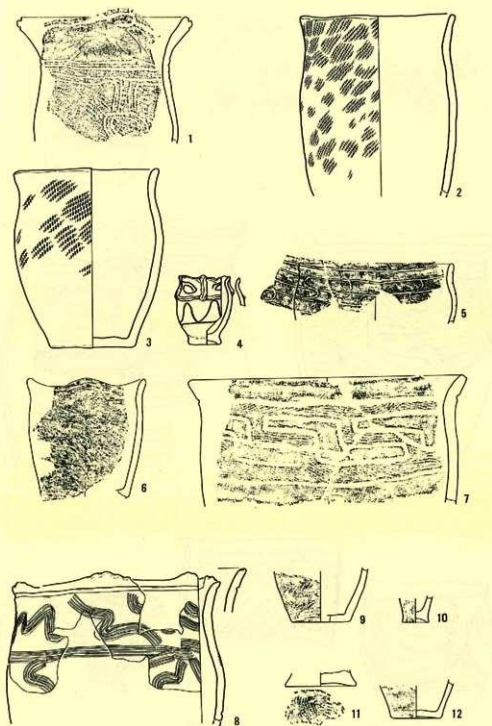
Ⅱ・Ⅲ群土器（図Ⅶ-79・80）

52はⅡ群B₂類、11・53～55はⅢ群A類、55は魚骨回転文。1・2・56はⅢ群B₁類、57はⅢ群B₂類で燃糸文。58・59はⅢ群C類であらかじめ貼付帯を施し、その後体部の縄文が施文されている。

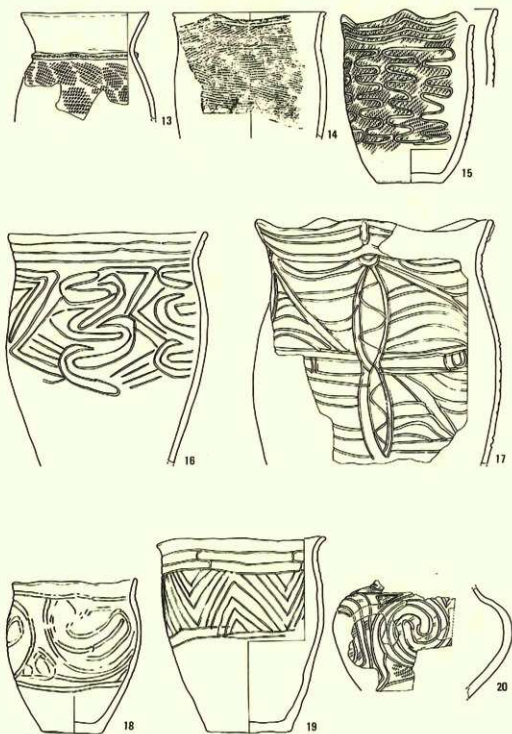
Ⅳ群A₂類（図Ⅶ-57-3～10・12・60～101）

Ⅳ群A₂類a（図Ⅶ-57・61・62-4～6・9・10・12・60～83）

4は頸部が縦横の貼付帯によって区画され、渦巻状の沈線文が加えられている。体部は体部文様帯を区画する沈線と波状の沈線文が描かれている。60～64は細い粘土による貼付をもつものである。61の体部には2本一組の沈線によって「S」字状の沈線文が描かれ、これは古い文様要素かとみられる。64は貼付帯に指頭による押捺が加えられている。65～68は体部に曲線的な

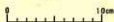
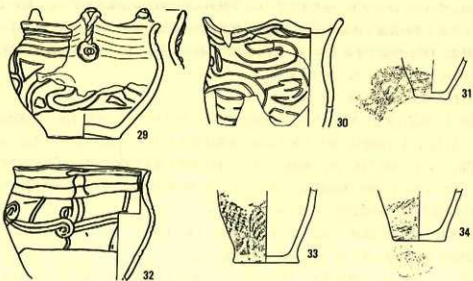
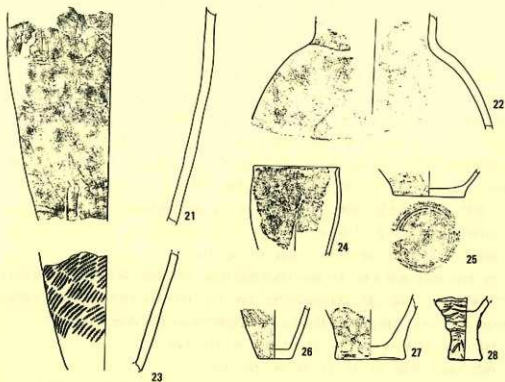


図Ⅷ-57 土器集中Ⅱ, J-62グリッド(I)



図Ⅶ-58 土器集中Ⅱ，J-62グリッド(2)

0 10cm



図Ⅷ-59 土器集中Ⅱ, J-62グリッド(3)

沈線文が施されている。69は頸部を微隆起線で、体部を垂下する2本一組の沈線2本で区画している。「く」の字状の2本一組の沈線で入組状の文様を描いている。91と文様構成が共通している。

Ⅳ群 A₂類 b (図Ⅷ-57・62-3・7・8・84-101)

8・84-86は櫛状工具による条線で文様を描き、沈線で縁取っている。84は口縁部隆起帯に細い粘土紐の弧状の貼付けがある。8は口縁部に5箇所の隆起部があり、刻み目が増えられている。7・87・88・96・97・99は縄文を沈線で縁取りしている。96には、半截竹管状工具による刺突が増えられている。90-94・98・100は地文上に沈線を加えている。91は縦位の入組文的な沈線文の可能性があり、95は無文で調整が粗雑である。

第Ⅲc層出土の土器 (図Ⅷ-58・59・63・64-13-28・102-145)

中期前葉から後期前葉の土器が出土している。

Ⅲ群土器 (図Ⅷ-58・59-13・23、図Ⅷ-61-52-116)

23・102-105はⅢ群 A 類、13・106-115はⅢ群 B₂類。13は頸部に刺突の加えられた貼付帯で区画している。106・112・113は縄の押捺。108-111・114・115は竹管状工具による刺突文が増えられている。116はⅢ群 c 類である。27は底部である。Ⅲ群 A 類とみられる。

Ⅳ群 A₂類 (図Ⅷ-58・59-14-22・24-26・28・117-145)

Ⅳ群 A₂類 a (図Ⅷ-59-14-19・24-26・118-137)

118-121・124は頸部に沈線で区画されているもの。118には頸部に弧線状の沈線が増えられている。121には粗い縄文が増えられている。24は体部に曲線の沈線文が施されている。17・122・123・126・132は口縁部に貼付帯をもつもの。16・18・124・125-127は、体部に入組文的な沈線文が施されるもの。16は「C」字状の沈線文を組合せて体部文様帯を区画し、鋸歯状文を加えている。18は2本一組の沈線で「C」字状の入組文的沈線が施されている。128・129は垂下する2本の沈線で体部を縦位に区画し、鋸歯状の沈線文が増えられている。19・133には鋸歯状文、137には垂下する3本一組の「S」字状の沈線文がある。15は地文上に縦位に蛇行沈線文が増えられている。25・26は底部である。

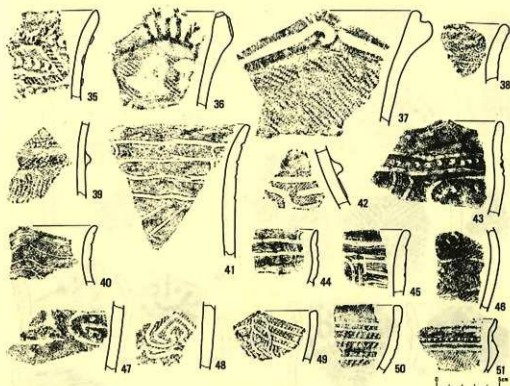
Ⅳ群 A₂類 b (図Ⅷ-58・59-20-22・138-145)

20は、体部に横位に展開される入組文的な沈線文が施されている。138・139は口縁隆起部に細い粘土紐による弧線状の貼付が増えられ、体部は櫛状工具による条線文に太い沈線で縁取りを加えている。140・143-145は磨消文のもの、141は無文地上に曲線的な沈線文が施されたもの。142は地文上に細い沈線が増えられている。21・22は無文のもの。22は壺形土器である。28は台付土器または蓋部分かとみられる。

第Ⅲd層出土の土器 (図Ⅷ-59・65-29-34・146-173)

Ⅲ群土器 (図Ⅷ-59-33・34、図Ⅷ-65-146-157)

33・34・146-150はⅢ群 A 類、146は縄による馬蹄形瓦痕文、149は細い刻み目のない粘土紐が貼付され、地文は斜行縄文である。Ⅰ群 B₂類の可能性もある。151はⅢ群 B₁類、152-157



図Ⅷ-60 土器集Ⅱ, J-62グリッド(4)

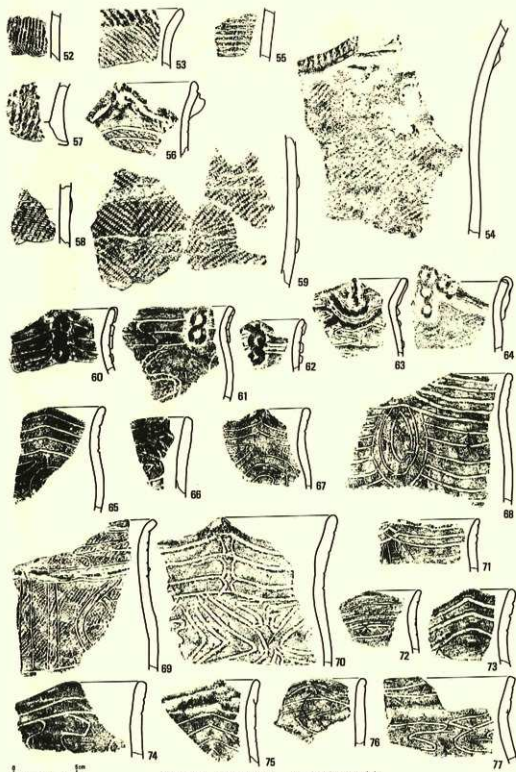
はⅢ群B₂類である。152・153は同一個体である。地文は摺糸文である。152は口縁に弧線状の沈線が加えられている。154は粘土瘤貼付けによる突起をもつ。155～157は地文のみである。

Ⅳ群A₂類 a (図Ⅷ-59・65-29～32・158～171)

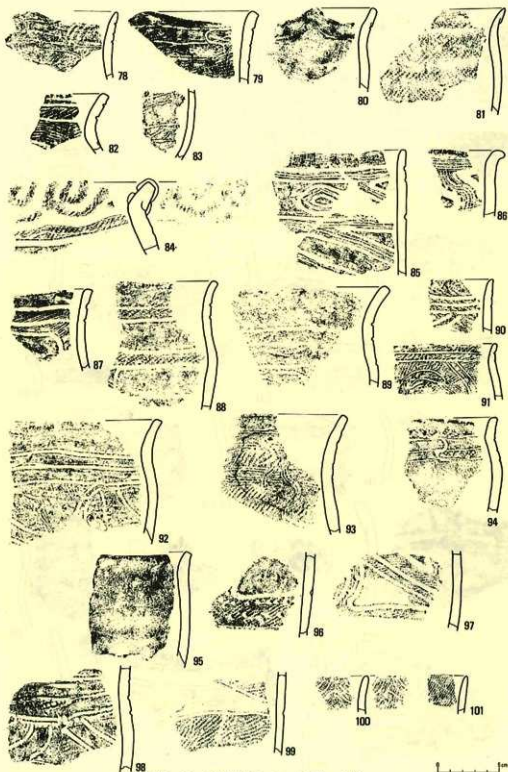
158は沈線によって区画された文様帯内に、粘土の隆起で弧状の文様を描き、円形刺突文を加えている。28・159～161は口縁に貼付けをもつものである。159は指頭による押圧が加えられている。162～164は体部に縦位に曲線的な文様が描かれたものと思われる。29・30・32は体部文様が横位に展開されているものである。29は波状に、30・32は横位に「J」字状をなして文様が展開される。30は隆起部に刻み目をもつ。31・165は直線的に垂下する沈線で体部文様帯を区画し、鋸歯状の沈線文を施している。168はオオバコの回転文である。

Ⅳ群A₂類 b (図Ⅷ-65-172・173)

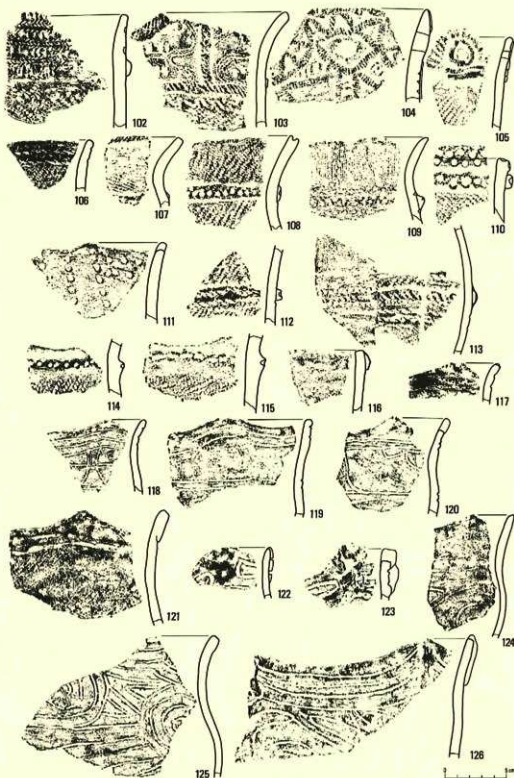
172は貼付帯をもつ。173は口唇部が篋状工具で角型に調整され、縄文が加えられている。2条の沈線が加えられている。



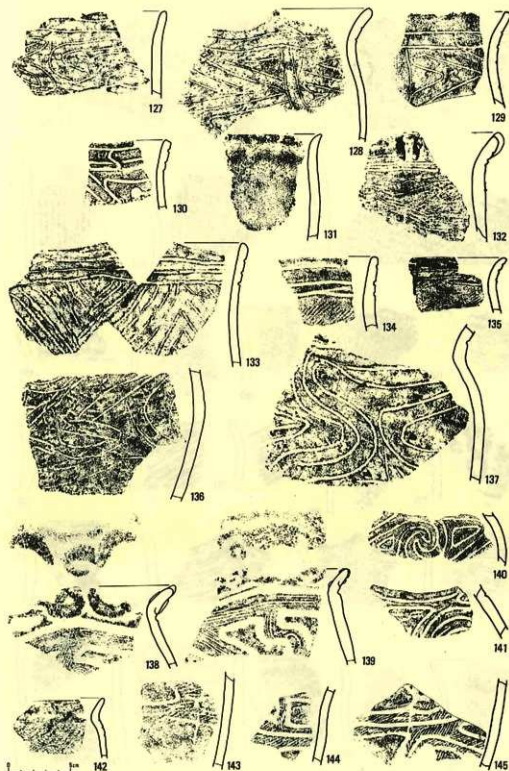
図Ⅶ-61 土器集中Ⅱ, J-62グリッド(5)



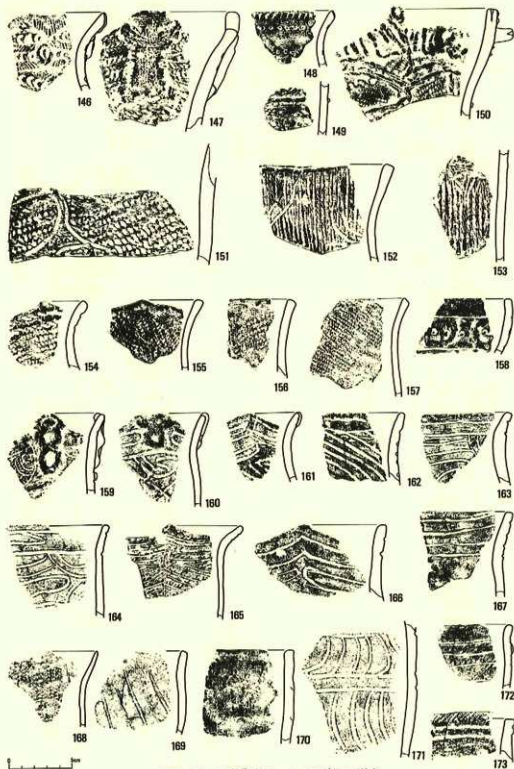
図Ⅷ-62 土器集中Ⅱ, J-62グリッド(6)



図Ⅶ-63 土器集Ⅱ, J-62グリッド(7)



図Ⅶ-64 土器集中Ⅱ, J-62グリッド(8)



図Ⅷ-65 土器集中Ⅱ, J-62グリッド(9)

J-63 グリッド

第I層出土の土器 (図VIII-66-72-1・45-53)

後期前葉から晩期中葉の土器が出土している。

45・46はIV群A₂類bである。46は頸部に無文帯をもつ。1・47・48はIV群B類である。1は低い山形波状口縁で、体部は不規則な斜行縄文である。49-53はIV群B類、49-51は浅鉢、52-53は壺形である。50は口縁部に刻み目をもつ。幅の狭い頸部は5条の沈線からなり、三角状の刺突が加えられている。

第III層出土の土器 (図VIII-66-69-2-30・54-133)

II・III群土器 (図VIII-73-54-66)

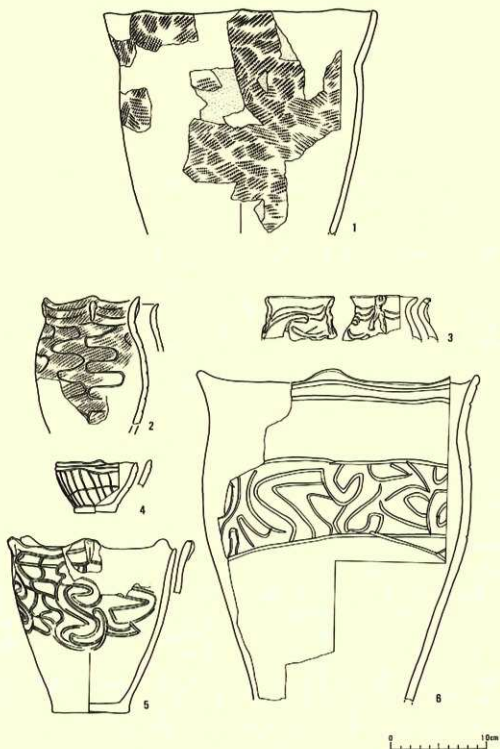
54はII群B₂類で、絡条体圧痕文が施されている。55-58はIII群A類、55は縄による馬蹄形圧痕文、58は魚骨回転文である。59-66はIII群B₂類、60-63・66は口唇部、頸部に条線文が加えられているもの。64は胴部破片、円形刺突文が加えられた貼付帯がある。65は沈線によるもの。

IV群A₂類 (図VIII-66-69・73-75-2-30・67-132)IV群A₂類a (図VIII-66-69・73・74-2-8・13-27・29・30・67-106)

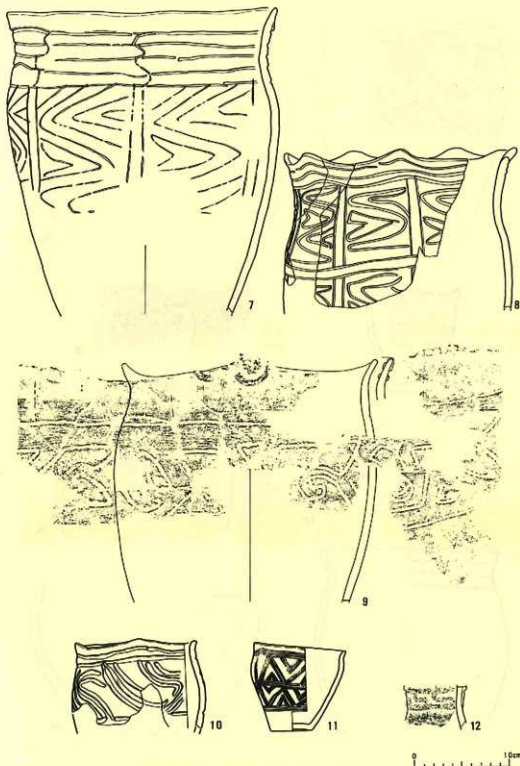
6・67・68は頸部無文帯を沈線で区画したもの。6は口縁に4箇所の突起をもち、頸部無文帯を沈線で区画している。体部には沈線で区画された文様帯をもち、文様帯を縦位に区画する「J」字状、ないし「S」字状の入組文的沈線文が描かれ、鋸歯状の沈線文が加えられている。古い段階のものか。2・3・5・69-71は貼付帯をもつ。2は蛇行する沈線文、3は「C」字状入組文的沈線文、5は2本一組の沈線で「S」・「C」字状を組合せた様な体部文様が施文されている。13・14は体部文様が横位に展開されるもの。13は体部上半部に斜行縄文が施されている。体部文様帯は沈線で区画され、中位に2本一組の沈線で波状文が描かれ、横位の「く」字状の沈線文が加えられている。14は体部上半部に斜行縄文が施されている。頸部、体部は沈線で縁取りした中に、波状の磨消文が描かれている。7・11は二組の沈線で文様帯を縦位に区画しているもので、横位の鋸歯状文的な沈線文が加えられている。15・17・18は地文のみのもの、21-23・92・93は無文のものである。またこれらの口縁部に数条の沈線が加えられたものもある。94-106は胴部破片で、体部の文様構成の判らないものが少なくないが、「S」・「C」字状・渦巻状の入組文的沈線文や2-4条の垂下する沈線文で文様帯を区画し、沈線文を加えているもの。横位に展開された波状の入組文的沈線文の描かれているものがある。

IV群A₂類b (図VIII-67-9-12・28・107-132)

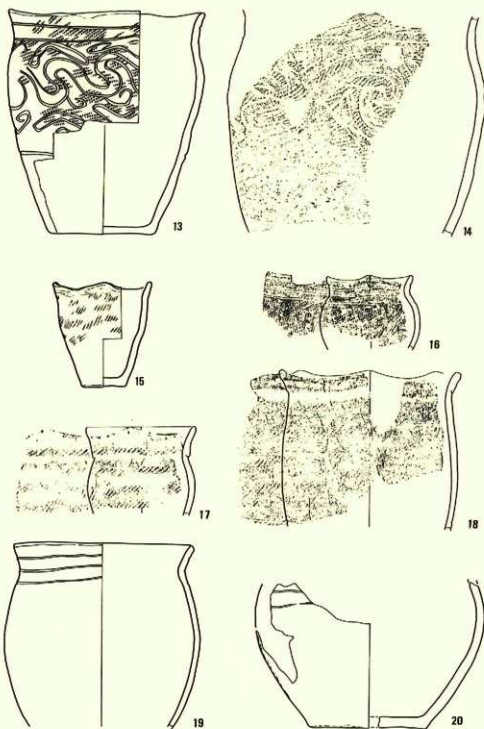
9にはカギの手状、107-110には口縁部に弧状の粘土紐の貼付のあるものである。12は壺形土器の頸部である。107-109は櫛状工具による条線文を太い沈線で縁取りしている。110は粘土紐を貼付後、器面全体に斜行縄文を施し、太い沈線を加えている。10・116・117は無文地に沈線文を描いている。111-113は櫛状工具で条線文を描き、太い沈線文で縁取りしたものである。11は櫛状工具で2段の鋸歯状文を施している。114・115・126は縄文を沈線で縁取りした



図Ⅷ-66 土器集Ⅱ, J-63グリッド(I)



図Ⅶ-67 土器集中Ⅱ，J-63グリッド(2)



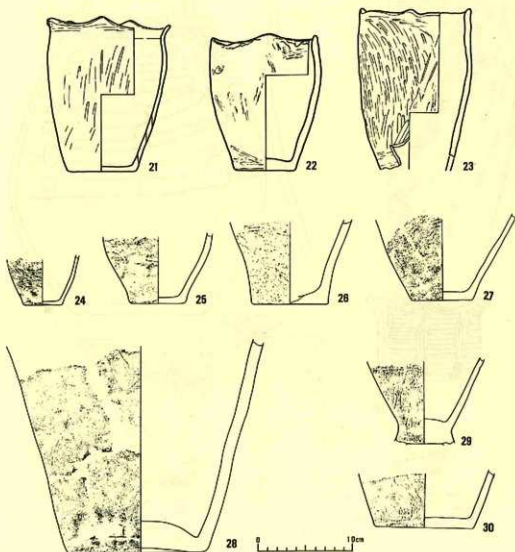
図Ⅷ-68 土器集中Ⅱ，J-63グリッド(3)

0 10cm

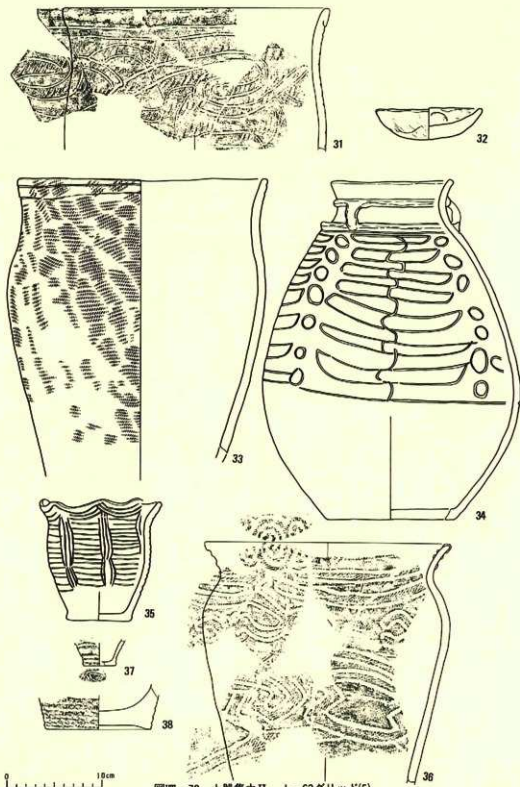
ものである。118は無文地の折返し口縁上に、2段の刺突が施されている。119～121・129・130は頸部に無文帯をもつもの、122は口唇直下に細い沈線が1条施されている。123・125・127～132は胴部破片である。124は半截竹管状工具による刺突が加えられている。131・132は磨消縄文上に円形刺突文が加えられている。十腰内II式の一部に相当するものと思われる。28は底部である。底面がわずかに揚げ底になっている。

V群B類 (図VIII-75-133)

133の頸部には4条の沈線が施され、頸部下端に山形突起がある。



図VIII-69 土器集中II, J-63グリッド(4)

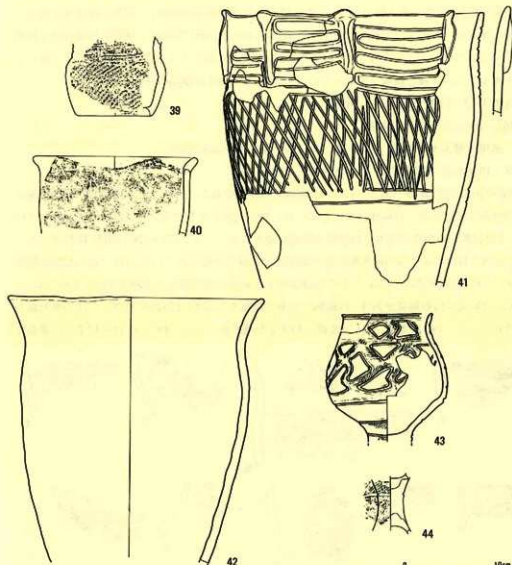


図Ⅶ-70 土器集Ⅱ, J-63グリッド(5)

第IIIc層出土の土器 (図VIII-70・76-31-36・134-168)

II・III群土器 (図VIII-70・76-38・134-146)

134はII群B₂類である。135・136はIII群A類で、135は口縁部に隆起部をもち、無文地に撚りの異なる2本の縄を平行して押捺している。古い段階のものかもしれない。136は肋骨状の沈線文が描かれ、隆起部直下に環状の貼付瘤の剝離痕がある。137はIII群B₁類、38・138-146はIII群B₂類である。138-142は口唇部または口縁部に縄の押捺があるもので、138の頸部には沈線、141は口唇部と頸部の横環する貼付帯に半截竹管状工具による押し引き文が加えられている。143-145は頸部の貼付帯上に刺突が加えられているもの、146は頸部の貼付帯に縄文が施されている。縄線文・沈線文・刺突文が併用されているものが多く、頸部は地文のあるものと



図VIII-71 土器集中II, J-63グリッド(6)

無文のものがある。38は底部破片である。無文地に4条の縄線文が施されている。

IV群 A₂類 a (図VIII-70・76-31~35・37・147~157)

31は折返し口縁で体部中位に横位の「S」字状の入組文が描かれ、上・下端に弧線文が加えられている。33は折返し口縁で、口縁直下に1条の沈線がある。胎土や調整が31に類似している。34は壺形土器である。口頸部に3箇所の橋状把手をもつと思われる。35は口縁部に7箇所の隆起部がある。32は小型の皿形土器である。148~150は口縁部に貼付があるもの。155・156は無文、157は胴部破片である。曲線的な沈線文が描かれている。37は底部破片である。底面に沈線文が描かれている。

IV群 A₂類 b (図VIII-70・76-36・158~168)

158・159は口唇部に刻み目をもち、2本一組の沈線で頸部が区画され、弧状の沈線文を加えている。36は強く外反した口縁部の隆起部に細い粘土紐を弧状に貼付け、体部には曲線的な磨消縄文でカニのハサミ状の文様を描いている。160は櫛状工具による条線文、163は櫛状工具による条線文に太い沈線で縁取りを加えているもの。164~166は胴部破片。

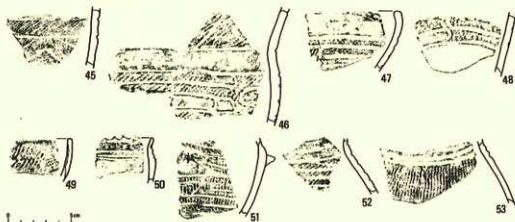
IV群 B類 (図VIII-76-167・168)

167・168は同一個体である。

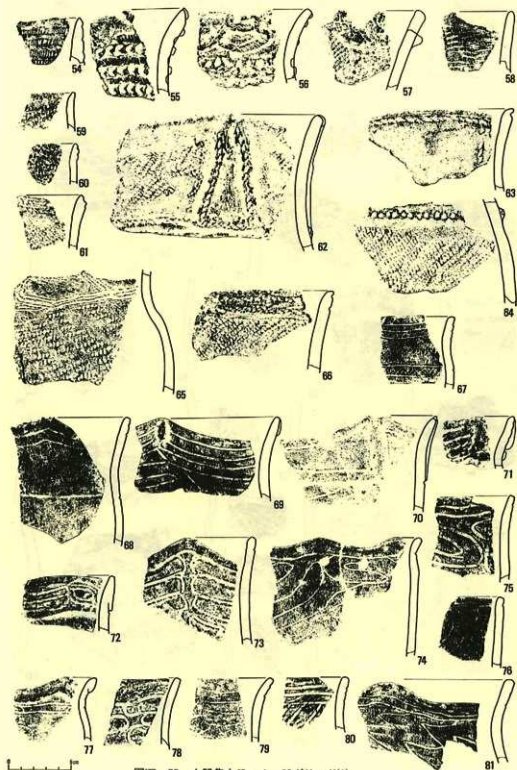
第III d層出土の土器 (図VIII-71・77・78-89~44・168~203)

II・III群土器 (図VIII-71・77-39・169~183)

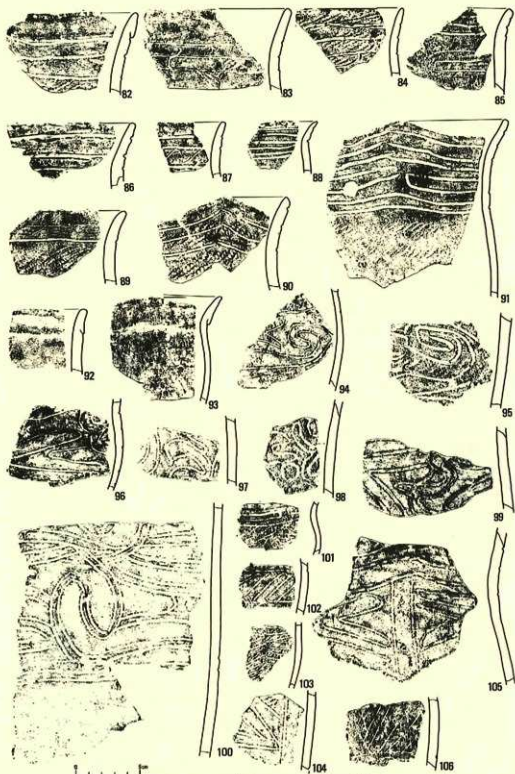
169~170はII群 B₂類である。170には縄線文の押捺がある。39・171~173はIII群 A類、39は小型鉢形土器である。口縁部は欠失している。撚りの同じ2本の縄を2条平行して押捺している。172は細い貼付文があり、口唇に爪圧痕が加えられている。174~176はIII群 B₁類である。175は刻み目による2頂の隆起部口唇に渦巻状の沈線文が描かれている。177~183はIII群 B₂類である。177は隆起部に刻み目のある口縁部直下と頸部の貼付帯上に縄線文が加えられている。178は口唇部に円形刺突があり、口縁部に2条の縄線文がある。179は口唇部に2段の短刻線が施されている。180は沈線、181は沈線と刺突文が施されている。182・183は貼付帯上に縄線文



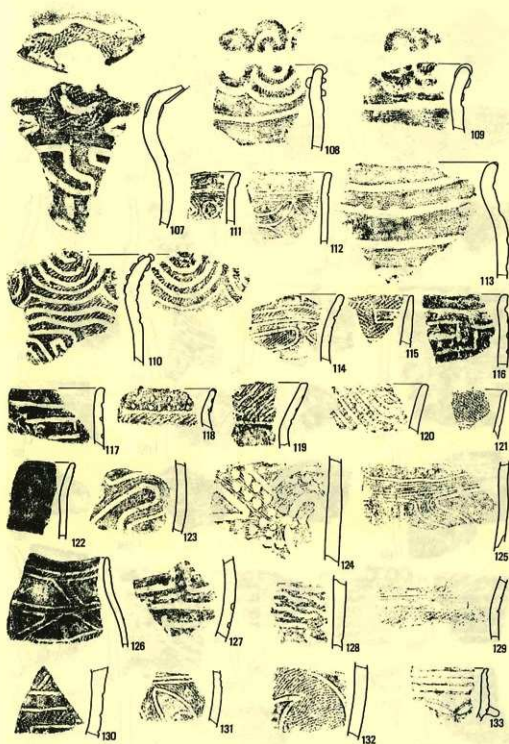
図VIII-72 土器集中II, J-63グリッド(7)



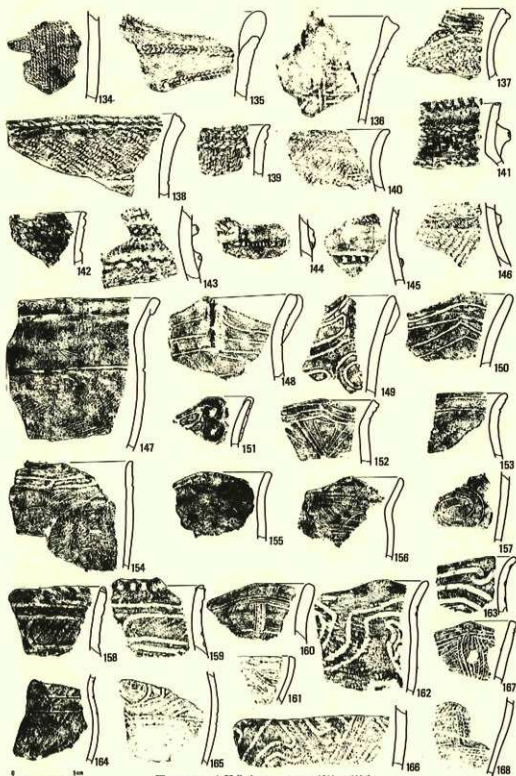
図Ⅷ-73 土器集中Ⅱ, J-63グリッド(8)



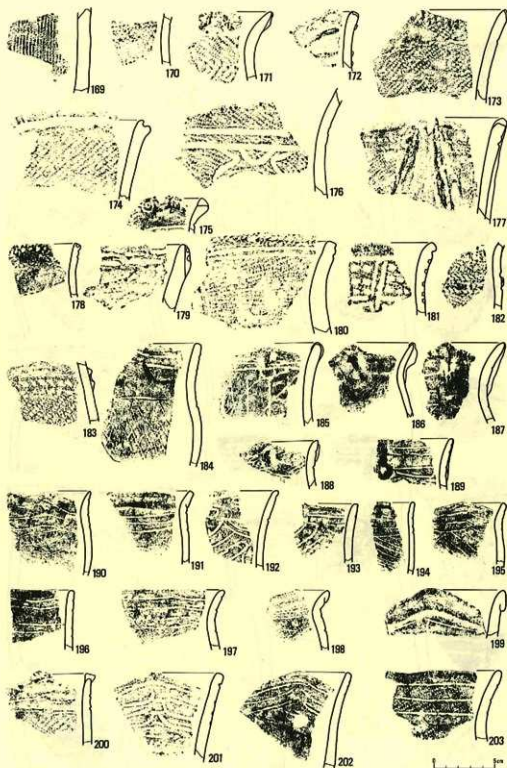
図Ⅷ-74 土器集中Ⅱ, J-63グリッド(9)



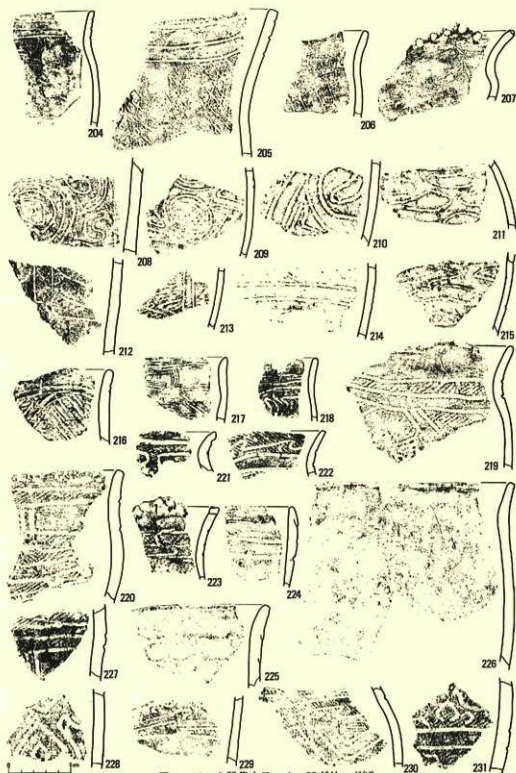
図版-75 土器集Ⅱ, J-63グリッド00



図Ⅷ-76 土器集中Ⅱ, J-63グリッド(1)



図Ⅶ-77 土器集中Ⅱ, J-63グリッド⑩



図Ⅷ-78 土器集中Ⅱ, J-63グリッド⑬

が加えられている。

IV群 A₂類 a (図VIII-71・77・78-40・41・184-215)

184は沈線で区画された頸部をもち、体部は網目状燃糸文である。41・185-189は口縁部に貼付けがあるもの。41は頸部に大きな縦位の貼付けをもち、幅の広い頸部には蛇行する沈線が加えられている。体部文様帯は沈線で区画し、網目状の沈線文が施されている。185は網目状の沈線文である。205は口縁部に刻み目のある隆起部をもち、IV群 A₂類のものかもしれない。208-215は胴部破片である。208-210は体部文様が入組文的な沈線文のもの、211は楕円形状の沈線文を描くもの、212・213は体部文様帯が垂下する沈線で縦位に区画するもの、215は蛇行する沈線文のものである。

IV群 A₂類 b (図VIII-71・78-42-44・216-231)

216は口縁部に低い隆起部をもち、半截竹管状工具の内側の切り口で鋸歯状の沈線文を描いている。217・218は櫛状工具で描いたもので、218には沈線による緑取りを加えている。43・44・219-221は縄文に緑取りを加えているもの。43は台付土器で、無節の縄文と櫛状工具による条線文が併用されている。44は台付部分である。222は頸部に無文帯をもつもの。42・225・226は無文のもの。227-231は胴部破片である。229・230には文様帯の地文上に流水文が描かれている。

小括

J-62・63 グリッド出土の土器をI層からIII d層まで、各グリッド別、層別別に図示した。J-63のIII層の最も新しい時期であるV群 B類を除き、ほとんどのものは後期前葉(IV群 A₂類)までに包括される。各グリッドの対応する層の土器を詳細に照合すると各層に時期の異なるものの混在している状態が認められ、斜面に形成されたことに起因する層位の攪乱・逆転が想定される。そして、III d層からIII層にかけて出土した土器がおおむねIV群 A₂類のものであることから、その堆積もその時期のものと思われる。

C地区においてIV群 A₂類 aの出土状況は沢の西側斜面から沢底にかけて集中し、東側の住居跡・ピットが検出されている調査区東側の平坦面には少ないという傾向を示している。この時期に沢の西側斜面に近接する平坦面が生活の場として利用され、本土器集中は土器捨て場として形成されたものと思われる。復原土器が小型土器を除き、浅鉢、深鉢の復原率が極めて低く、復原されたものでも半完形のものが多くことから想定される。

本項においてIV群 A₂類の後期前葉のトリサキ式、大津式を中心に据え、主として個々の型式の文様構成、文様要素によって細分を試みた。しかし、本資料は層位的なものでないことから、文様構成、文様要素の違いが時間的な違いを示すものか否か確めることが出来なかった。しかし、トリサキ式においては、その文様構成、文様要素においていくつかの細分が可能であると思われる。体部文様構成においては、縦位に展開されるもの、横位に展開されるものがある。文様要素としては、「S」字状、「C」字状、波状、入組状のものとがあり、これらの文様構成、文様要素の違いが土器のもつ時期差なのか、それとも文様のバリエーションとして捉えられる

ものなのか、先行すると思われる通元式の再検討を含めて、その移行形態を明確化してゆかなければならない。また、後続すると思われる大津式とは、器形、文様構成、文様要素においてかなり異ったものと言える。したがって、トリサキ式の終末と大津式の初源形態についても再検討を加えなければならないと思われる。

(3) 土器集中Ⅲ

V群土器は、沢東側の沢縁辺部、L・M・N-65、66に集中する傾向があるけれども、C地区のはほぼ全域から出土している。特にM・N-65では沢斜面の肩部分から斜面にかけて、十数個の土器が潰ぶされた状態でまとまって出土している。M・N-65出土のものを一括資料として示した。ただし、復原土器は、体部に文様のないものがほとんどである。したがって、器形と体部文様との対応関係を明確に示すことが出来なかった。同グリッドから出土した破片資料をも用いて体部文様との対応関係を示し、本資料の編年の位置づけを試みる。

M・N-65からは、浅鉢形(1-14・23-43)、深鉢形(15-19・44-55)、壺形(20-22・56-60)が出土している。包含層では入組文、雲形文の施された皿形や雲形文の施された台付土器の脚部が出土している。本資料の27・34-39は器形の傾き、調整等から台付土器の可能性がある。出土層位は、ほとんどのものが包含層Ⅲ層から出土している。

浅鉢形、深鉢形は、器形と口頸部の文様要素によって4つに大別される。

I類 器形の最大幅が口縁にあるもの。

a 頸部が数条の沈線からなるもの。

b 頸部が無文帯のもの。

Ⅱ類 器形の最大幅が口頸部下端直下にあるもの。

a 頸部が数条の沈線からなるもの。

b 頸部が無文帯のもの。

浅鉢形(図Ⅷ-79-1-14・23-43)

I a類(図Ⅷ-79-10-11)

復原土器 10 頸部は磨消された無文地に幅の広い3条の沈線がある。口頸部下には刻み目の施された貼付瘤がある。口縁部内部に1条の浅い沈線がある。口縁部の断面形は口唇に向かって薄くなる。体部は縦行縄文である。

復原土器 11 頸部は、磨消された無文地に4条の沈線がある。口頸部下端直下には刻み目の施された貼付瘤がある。口縁部内面に1条の沈線がある。体部は縦行縄文である。

I b類(図Ⅷ-79-81-12・14・36・40)

復原土器 12 頸部の上端に1条、下端に3条の沈線を加え、無文帯を区画している。口唇には、2個一対の突起が4箇所に貼付けられている。口縁部内面に幅の広い沈線が1条ある。体部は比較的節の大きい縦行縄文である。

復原土器 14 口唇部は、2頂の比較的大きい突起と小突起が組合せられた複雑な形状をもつ。口頸部下端直下の4箇所には、2個一対の貼付瘤がある。そして、貼付瘤間を結ぶ様

に沈線が加えられている。斜行縄文が施されている体部には、7条の横走る沈線が加えられている。口縁部内面に1条の沈線がある。突起部の内面には三叉文的な沈線が施されている。器面の内外に炭化物が付着している。

拓本資料 (図VIII-81-36・40)

36は、口唇に2個一對の突起をもつ。口頸部下端直下には、2条の細かい沈線を刻み目の施された瘤を両側にもつ把手状突起がある。突起の内外面に沈線による三叉文的な沈線文がある。口縁部内面に1条の沈線がある。40は雲形文の施された体部破片である。地文は体部文様帯にのみある。

IIa類 (図VIII-79・81-1~5・7~9・13・24・25・27~33)

復原土器1 頸部には、縄文地に4条の沈線が加えられている。器形全体が丸味をもち、口縁部は内湾する。口頸部下端直下には離れた2個一對の貼付瘤がある。口縁部内面には浅い1条の沈線がある。体部は縦行縄文である。

復原土器2 頸部には、縄文地に4条の沈線が加えられている。器形は全体に丸味をもち、口縁部は内湾する。口頸部下端直下に離れた2個一對の貼付瘤がある。口縁部内面には浅い1条の沈線がある。平底である。体部は縦行縄文である。

復原土器3 破片資料である。口頸部に粗雑な調整を加えたのち、無文地に3条の沈線を加えている。器形全体が丸味をもつ。口頸部下端直下には大きな粘土の中央に刻み目を入れた2個一對の貼付瘤がある。口縁部内面に浅い1条の沈線がある。体部は縦行縄文である。

復原土器4 頸部には、縄文地に4条の沈線がある。口縁部内面に浅い1条の沈線がある。

復原土器5 破片資料である。頸部には、無文地に3条の沈線がある。最下段の沈線上に2個一對の貼付瘤がある。口縁部内面に浅い1条の沈線がある。

復原土器7 頸部は無文地に3条の沈線がある。口頸部下端直下には横位の短刻線を加えられた貼付瘤と、2個一對のものとがある。口縁部内面に1条の沈線がある。体部は不規則な縦行縄文である。

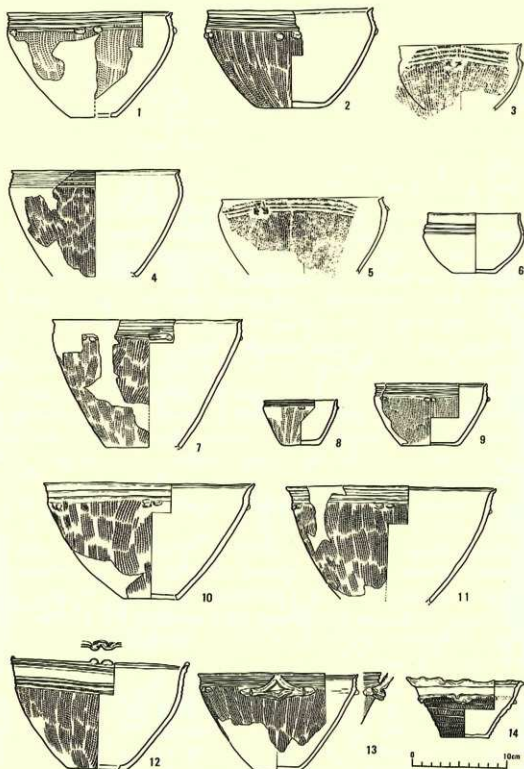
復原土器8 小型土器である。口縁に細かな刻み目をもつ。頸部には3条の沈線がある。最上段の沈線内に三角形の刺突列がある。口頸下端直下には刻み目の施された貼付瘤がある。口縁部内面に浅い1条の沈線がある。体部は縦行縄文である。

復原土器9 頸部には無文地に3条の沈線がある。口頸部下端直下には刻み目の施された貼付瘤がある。口縁部内面に1条の沈線がある。体部は縦行縄文である。

復原土器13 頸部には無文地に3条の沈線がある。口頸部下直下に刻み目の施された貼付瘤と把手状突起の内外面に三叉文的な沈線文が加えられている。

拓本資料 (図VIII-81-24・25・27~33)

24・25は同一個体である。口縁直下の2条の沈線で区画した文様帯に、半肉形的な雲形文を施している。27は器形全体が丸味をもつ。頸部下端で強く内湾し、頸部には2条の沈線がある。口縁部内面に1条の沈線がある。28は頸部には3条の沈線がある。口縁部内面に



図Ⅷ-79 土器集中Ⅲ(1)

は沈線がない。29は口縁に刻み目をもつ。口縁部の断面形態は切り出しナイフ状である。31には、無文地の頸部に2条の沈線がある。口縁部の断面形は角形である。32・33には縦行縄文上に1、2条の沈線が加えられている。

II a類 (図Ⅷ-79・81・6・34・35・37~39)

復原土器 6 小型土器である。頸部は無文である。頸部下端に浅い3条の沈線を加えて口頸部を区画している。平底である。

拓本資料 (図Ⅷ-81・34・35・37~39)

34には口頸部上端に1条、下端に3条の沈線がある。最上段の沈線の中に刺突列がある。口唇には小さな突起がある。口縁部内面に幅の広い1条の沈線が浅く施されている。口縁部の断面形は切り出しナイフ状である。体部は斜行縄文である。35は無文の口頸部をもち、口頸部下端から口頸部直下にかけて3条の沈線が施されている。貼付瘤は中段の沈線上にある。37には口唇に把手状突起の内外面に三叉文的な沈線が施されている。38には口唇に貼付けの突起と沈線が施されている。口縁部内面には浅い3条の沈線がある。39の口頸部下端から口頸部下端直下にかけて2条の沈線がある。体部は無文である。

深鉢形 (図Ⅷ-80・81・15~19・44~55)

I a類 (図Ⅷ-81・50・51)

拓本資料 50・51は、いずれもほぼ垂直に立ち上がる。50は縦行縄文、51は横走縄文上に2条の沈線が加えられている。

II a類 (図Ⅷ-80・81・15・16・18・19・44~49)

復原土器 15 器形全体が丸味をもち、口縁部が内湾する。口縁直下には3条の沈線がある。体部は縦行縄文である。口縁部の断面形態は角形である。

復原土器 16 口縁に刻み目がある。頸部には無文地に4条の沈線がある。口頸部下端に刻み目の施された貼付瘤がある。体部は縦行縄文である。口縁部内面に1条の沈線がある。

復原土器 18 頸部は無文地に4条の沈線がある。口頸部下端直下に刻み目の施された貼付瘤がある。口縁部内面に1条の沈線がある。体部は縦行縄文である。

復原土器 19 器面全体に条線文が施されている。頸部には地文上に4条の沈線がある。口頸部下端直下に2個一対の貼付瘤がある。口縁内面に1条の沈線がある。

拓本資料 (図Ⅷ-81・44~49)

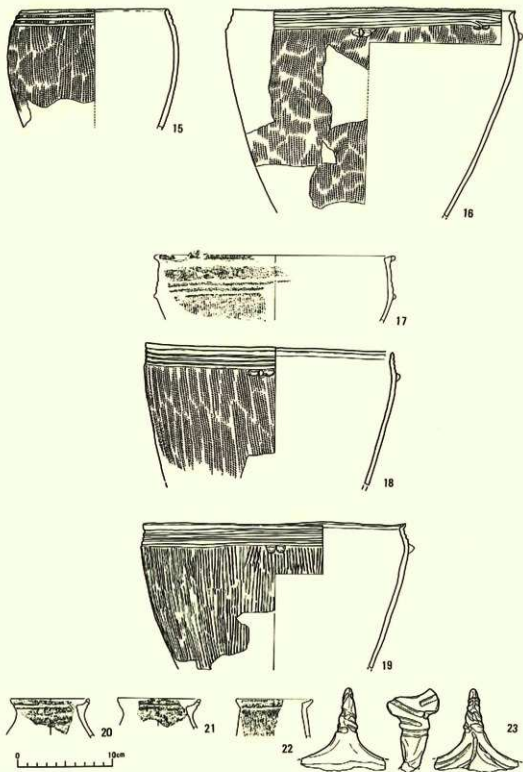
44~46は、いずれも口縁に刻み目をもつ。頸部には3条の沈線がある。47・48は地文上に3条の沈線がある。49は無文地に3条の沈線がある。

II b類 (図Ⅷ-80・81・17・52~55)

復原土器 17 口縁直下に2個一対の貼付瘤をもつ。口縁部内面には1条の沈線がある。口頸部下端に3条の沈線があり、口頸部下端直下に貼付瘤がある。体部は縦行縄文である。

拓本資料 (図Ⅷ-81・52~55)

52~55はいずれも頸部下端で緩やかに内湾し、口頸部は垂直ないし、かるく外反して立ち



図Ⅷ-80 土器集中Ⅲ(2)

上がる。52の口唇に2個一対の突起をもつ。口頸部下端には4条の沈線がある。54には口唇に山形突起がある。口頸部下端直下に貼付瘤がある。55には刻み目の施された貼付瘤が口頸部下端直下にある。53・54の口縁内面に3条の沈線がある。

雲形（図VIII-80・81-20-22・56-60）

復原土器がなく、すべて破片資料である。20-22、56・57は口縁部破片である。頸部から口縁部にかけて緩やかに内傾して立ち上がる。20・21には口唇部に2個一対の貼付瘤がある。56の口縁直下に貼付瘤と沈線がある。58は、口頸部下端に2条の沈線があり、貼付瘤が施されている。59は頸部無文帯下端に3条の沈線がある。60は体部破片である。

拓本資料（図VIII-81-26・41-43）

26は体部破片である。体部に雲形文が施されている。

41-43はV群C類である。41・42は口縁部に縄文が施され、頸部の文様は沈線で構成されている。頸部下端部に低い山形突起がある。43の体部には横位連続工字文がある。

小括

頸部形態と文様構成に基づいて4つに細分して出土資料を観察した。その結果、それぞれの特徴は次の通りにまとめることができる。

I a 類 頸部には磨消された無文地に3～4条の沈線が施されている。口唇部に突起や山形突起が少くない。口縁部内面に1条の沈線がある。口頸部下端直下には刻み目のある貼付瘤が施されている。口縁部断面形は口唇に向って薄くなる。体部は縦行縄文である。

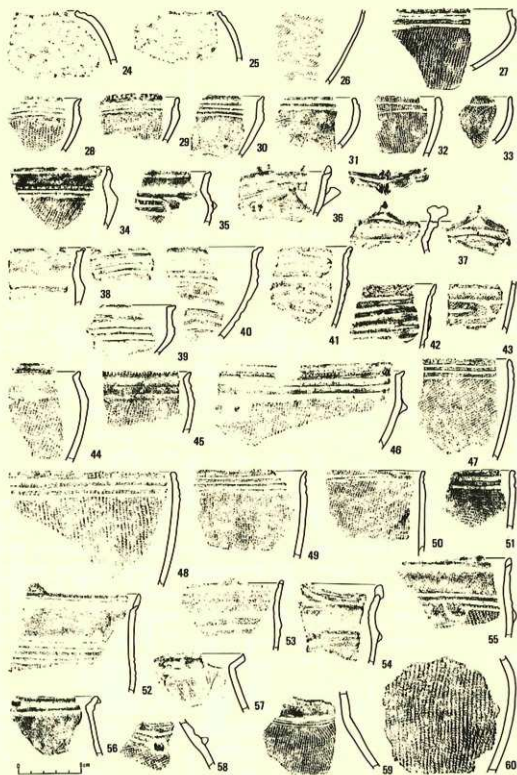
I b 類 口唇に2個一対の突起や山形突起がある。口頸部下端に貼付瘤や把手状突起がある。口縁部内面に1条の沈線がある。口頸部下端に3条の沈線がある。体部には縦行縄文や雲形文が施されている。

II a 類 頸部が幅の狭いものと、幅の広いものとがある。沈線は3～4条のものが多く、沈線間に縄文が観察されることから調整を加えず沈線が加えられているものがある。口唇部に突起や山形突起が少くない。口縁と頸部の沈線内に小さな刻み目が施されているものが多い。口頸部下端直下に2個一対の貼付瘤、刻み目のある貼付瘤、把手状突起がある。体部には、縦行縄文・雲形文が施されている。

II b 類 口唇に2個一対の貼付による丸味をもった突起や山形突起がある。頸部上端1条、頸部下端に3～4条の沈線を施し頸部無文帯を区画しているものがある。また、頸部無文帯下端に小さな刺突が加えられているものもある。口唇部下端直下に貼付瘤がある。体部は斜行縄文・縦行縄文が施されている。

これらに共通した特徴は次の通りである。

- ① 頸部が3～4条からなるものは平縁のものがほとんどで、口唇部に小突起や山形突起が少くない。無文帯をもつものの口唇部に2個一対の小突起や山形突起をもつものが多い。平縁のものには口縁に刻み目をもつものもある。
- ② 口頸部下端直下には2個一対の貼付瘤や刻み目のある貼付瘤がある。これらは頸部下端



図Ⅷ-81 土器集中Ⅲ(3)

の3～4条の沈線施文後に貼付けられたものである。沈線上に貼付されることは極めてまれである。所謂「B字状突起」がほとんどで、「A字状突起」が極めて少ない。A字状突起は粘土粒を貼付後に沈線を加えて作出しているものがほとんどで、これはB字状突起との施文手順が異なることを示している。

- ③ 体部には縦行縄文、斜行縄文、条痕文、雲彩文が施されたものがある。ほとんどのものが縦行縄文である。

これらの特徴をもつ資料を出土している道南の遺跡として函館市日吉1遺跡・木古内町札苺遺跡・南茅部町大船遺跡・七飯町聖山遺跡などがあげられる。また道央において白老町社台1遺跡・小樽市桃内遺跡、岩内町全修寺遺跡などがある。本集中出土の資料を、文様構成や器種が比較的纏って出土していて、距離的にも近い札苺遺跡を中心に据え、また他遺跡の資料との比較を通して特徴の明確化、編年の位置付けを試みる。

札苺遺跡出土の晩期に属する資料は、山内清男氏の晩期縄文土器の編年に基づいて、大洞C₁式の特徴をもつものを「第Ⅰ群土器」、大洞C₂式土器の特徴をもつものを「第Ⅱ群土器」として大別している。第Ⅰ群の特徴は、頸部がかかるく内屈して外方に広がり、頸部には半歯状文の退化した刻み目をもつ。頸部下端には2個一対のB字状突起が加えられ、体部には雲彩文が施されているものである。地文には斜行縄文が施されているものが多い。そして、札苺Ⅱ群土器には斜行の刻み目が加わり、頸部下端にB字状突起、A字状突起や、それらを組合せ併用したものがある。その貼付け位置は沈線下位、沈線上のものがある。またその手順には、沈線施文後のもの、貼付後に沈線が加えられたものがある。体部文様は、雲彩文、雲彩文から工字文への中間的な文様をもつもの、工字文などがある。文様構成を他遺跡資料と比較するならば、七飯町聖山遺跡出土の連繫入組文で代表される聖山Ⅱ式、知内町湯の里6遺跡出土の資料、森町尾白内遺跡出土の資料等に類似した資料を含み、晩期後半の比較的時期幅をもつものが含まれていると思われる。

本集中出土資料には、札苺Ⅱ群土器に見られる。口唇の刻み、頸部の刺突列等がみられる。粗製土器において、頸部下端直下の貼付瘤は、2個一対のもの、刻み目のあるもの(=B字状突起)、山形突起(A字状突起)等の形態がある。そして、B字状突起の形態、貼付け位置は札苺遺跡と聖山遺跡等の資料と総合すると次の様なものがある。

- ① 沈線施文前に口頸部下端直下に施されているもの。
- ② 沈線施文後、口頸部下端直下の沈線上、沈線間に貼付けられているもの。
- ③ 沈線施文前に貼付け、その貼付瘤間で沈線で繋ぐ、貼付瘤の上下にも沈線が加えられているもの。

本集中の多くのものは①手法で貼付けられている。この手法は札苺Ⅱ群土器の一部に認められる。②は聖山遺跡出土資料に多く見られる手法である。施文位置が沈線間に貼付されるといふ、A字状突起と同様な施文位置、同様な文様効果からA字状突起と共通点が多い。③は、聖山遺跡、添山遺跡等の出土資料に多く見られ、その手順はA字状突起と同じものと考えられ、

その施文位置、文様効果等、またA字状突起と併用されることから、B字状突起の新しい段階と思われる。本資料のうち、少量の聖山遺跡出土の資料に相当するものを除くと、本集中は、ほぼ札苅II群の古い段階に相当することになる。

(4) 包含層出土の遺物

(i) 土器

包含層出土の土器はI群土器からV群土器に属するものまでがある。出土層位は平坦面においてはIIIc層上面からV層にかけて出土している。沢部分においては、III層中に礫層が数枚挟在し、それぞれの上面にやや時間差のある遺物が平面的な広がりを示し、それぞれ多少異なった分布をもって出土している。II群B₂類、III群A類は東側平坦面の肩部分から斜面、沢底にかけて、IV群A₁類は西側斜面、IV群A₂類は平坦面の東側、IV群B類、同C類は、B地区に近接した北側の沢頭部分、V群B類は東側の斜面肩部分に多く分布する。

まず沢の斜面で大まかに層位的な出土状態を示した資料を例示し、次に包含層の資料を記載することとしたい(図VIII-82・83・84参照)。K-75・L-66・M-66の沢斜面部分において、礫層を挟み、近接した7箇所(1~7)の土器のまとまった出土状態が観察されたことから、これらについて図上で平面分布、垂直分布を作成し、層位順にNo 1から7の遺物(図VIII-83・84)を示してゆく。

実測図1 a・1 b 1 aは平縁の円筒形土器、1 bは底部から口縁に向けて緩やかに広がり、口縁は4箇所の低い山形口縁である。両者の口縁部の文様構成は同じで、明瞭な頸部をもたず、口縁部の無文地に撚りの異なる2条の縄を一組にした縄線文を3段加えている。体部は撚糸文で、1 aは頸部に2段、体部上半部に2段の結束羽状縄文がある。II群B類と思われる。

実測図2 底部を欠失した小型の筒形土器である。口縁部は外反し、4箇所に大きな山形をなす口縁をもつ。縄を押捺した太い粘土紐を貼付け、半截竹管状工具で刺突文を加えている。体部には結束羽状縄文が施されている。III群A類である。

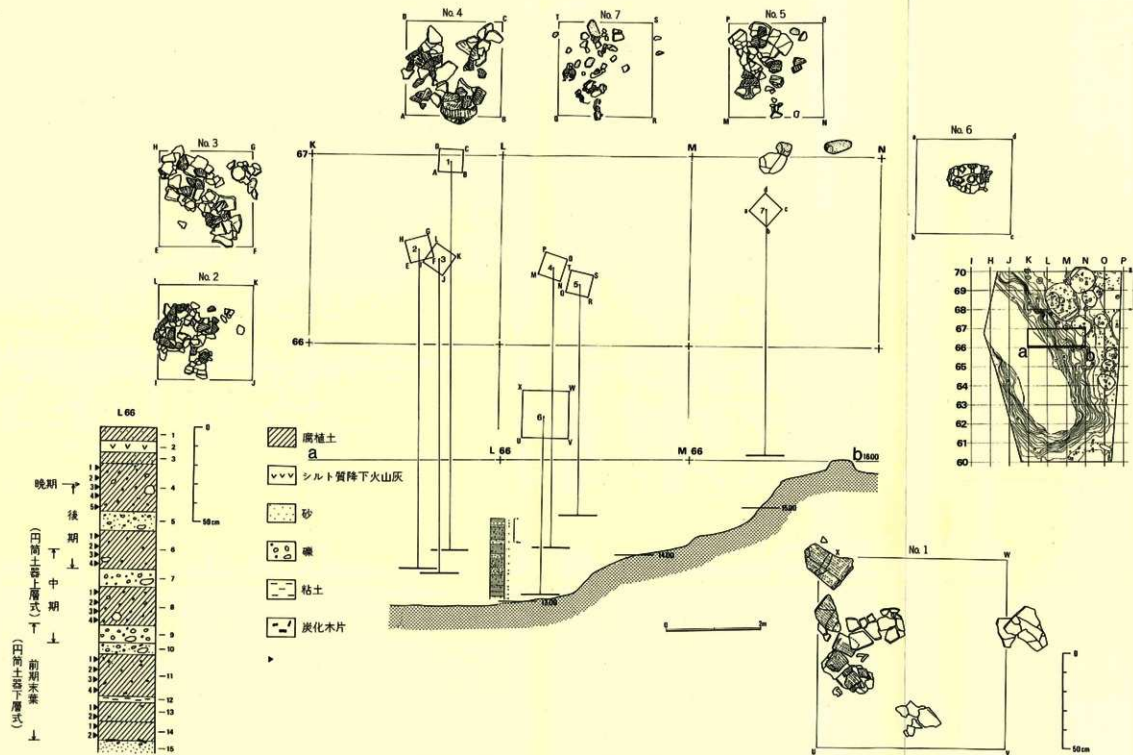
実測図3 a 4箇所の隆起部をもつ山形口縁の土器である。口唇部に縄の刻み目、体部には縄文と綾格文が加えられている。底部は張り出しをもちわずかに揚げ底である。III群A類である。

実測図3 b 底部を欠失する。口縁部は山形をなすと思われる。文様帯には縄の圧痕のある細い粘土紐を施し、篋状工具による刺突が加えられている。体部は斜行縄文である。III群A類である。

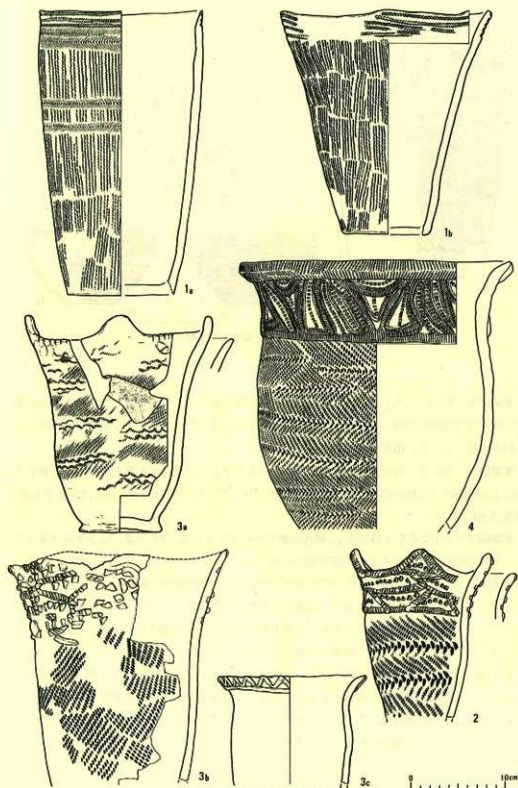
実測図3 c 底部を欠失する。平縁である。体部は無文で、わずかに口縁部に細い粘土紐を鋸歯状に貼付している。III群A類である。

なお、出土状況図でも示されているように2と3は接近し、ほぼ同じレベルから出土しており相互に接合したものもある。

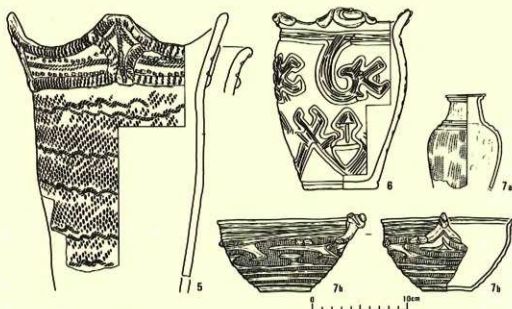
実測図4 底部を欠失する。口縁は平縁で、口縁部には縄を押捺した太い貼付帯がある。文様帯には、縄の圧痕のある粘土紐の貼付があり、同方向の撚りの3本の縄を平行させて押捺し、器面に半截竹管状工具による刺突が加えられている。体部は結束羽状縄文である。III群A類で



図Ⅷ-82 沢部分包倉層の土器出土状況図と花粉分析試料採取層位



図Ⅷ-83 沢部分包含層出土の土器(Ⅰ)



図VIII-84 沢部分包含層出土の土器(2)

ある。

実測図5 底部は欠失する。口縁部に4個の山形隆起部をもつ筒形土器。圧痕のある太い貼付帯で頸部文様帯を区画し、同方向の撚りの2条の縄を平行して押捺し、半截竹管状工具による刺突を加えている。III群A類である。

実測図6 細い粘土紐が口縁部内外面に弧状に貼付された4個の山形隆起部をもつ。櫛状工具による条線文で文様を描き沈線で縁取ったカニのハサミ状の文様がある。底部は平底である。IV群A₂類である。

実測図7a 小型壺形土器である。頸部は緩やかに立ち上がる。頸部下端には3条の沈線がある。体部は縦行の縄文である。V群b類である。

実測図7b 三叉文が加えられた把手状の突起をもつ小型浅鉢形土器である。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、4条の沈線を施す。体部には連繋入組文がある。頸部下端に刻み目のある粘土粒と三叉文が加えられた把手がある。V群b類である。なお同地点から土偶の足部が出土している。包含層出土の頭・胴・腕部分と接合している。

出土地点のレベルの低い順に出土土器に説明を加えてきた。実測図6の出土地点が沢肩部分であることを考慮し除外して考えるならば、下位からII群B類、上位からV群b類が出土している。中位出土のIII群A類の土器には、特徴を異にするものがあるけれども、沢部分では縄文前期から晩期のものが層位的に出土する状態を知ることができる。以下、他の資料を時期毎に説明する。

I群B類 (図VIII-101-1)

器面に粗い羽状を呈する摺糸文がある。胎土には繊維を含まない。東銅路IV式に比定されるII群A類(図VIII-101-2~5)

2~5は同一個体である。2は円形刺突文が加えられた丸味をもつ口縁部である。地文は不規則な浅い斜行縄文が施され、胎土に繊維を含む。

II群B₁類(図VIII-85-③、図VIII-101-6~14)

6は頸部に指頭と爪の圧痕をもつ細い貼付帯がある。口縁部には雄な綾格文、体部には粗い斜行縄文がある。7は頸部貼付帯に浅く横長の刺突が加えられ、体部には細かな斜行縄文がある。

8は口縁部文様帯に綾格文が施され、体部に摺糸文がある。

9~12は明瞭な頸部区画帯をもたず口縁部文様帯に2条一組の縄線文が施されたもの、またそれに類似するもの。

③は口頸部に2段の結束羽状縄文が施され、撚りの異なる2条一組の縄線文が1条加えられている。体部は粗い摺糸文である。底部は揚げ底である。11は幅の狭い口縁部に撚り方向の異なった2条一組の縄線文を3条押捺している。体部は粗い摺糸文である。頸部と体部に数段の結束羽状縄文が加えられている。

II群B₂類(図VIII-85-①~③、図VIII-101-15~21)

口頸部にくびれのあるもので、文様によってa、bの2つに細分される。

a類 口頸部文様帯に1条の縄線、羽状や菱形などの縄線文が施されているもの(図VIII-85-①・②、図VIII-101-15~18)

①は口頸部文様帯に縄線による羽状文があり、体部は摺糸文である。②は縄線による菱形、羽状の縄線文が施され、頸部隆起帯には竹管状工具による刺突文が加えられていて、体部は、多軸の原体による摺糸文である。

15は頸部に数段の縄線文が施されている。16~18は頸部下位に結束羽状縄文が加えられ、体部は、16は摺糸文、17・18は多軸の原体による摺糸文である。

b類 厚手で、口頸部文様帯に絡条圧痕文や2本一組の縄線文が押捺されているもの(図VIII-86-④・⑤、図VIII-101-19~21)

19・20は口頸部文様帯に絡条体圧痕文が施され、下位に2段の結束羽状縄文がある。体部は多軸の原体による摺糸文である。21は頸部隆起帯に篋状工具による爪形の刻み目がみられ、口頸部文様帯には撚りの異なる2条一組の縄線文の押捺、体部には多軸の原体による摺糸文がある。

④・⑤は多軸の原体による摺糸文の施された底部である。

III群A類(図VIII-86・87-⑦~⑩、図VIII-102-104-22~76)

a~gの7つに細分して記載する。

a類 太い貼付帯をもつもの(図VIII-86-⑦、図VIII-102-22~34)

太い貼付帯には縄の圧痕があり、文様帯内には撚りの異なる3条一組の縄線の押捺、縄による馬蹄形圧痕文、半截竹管状工具による刺突文の施されるものが多く、体部には結束羽状縄文、

斜行縄文がある。27は無文地に波状に縄線文が施されている。22・23・30・32には馬蹄形圧痕文がある。

b類 比較的細い貼付帯をもつもの(図VIII-86-⑧・⑨、図VIII-102・103-35~52)

貼付帯には縄の圧痕のあるものとなないものがあり口縁には鋸歯状に、体部にはやや複雑に貼付されているものが多い。文様帯内には2~3条一組の縄線文が竹管状工具による刺突文が組合わされている。37は弁状の口縁部をもつもので、文様帯には同方向の撚りの2条一組の縄線文があり、円形刺突文が加えられている。39は平縁で、口縁部には鋸歯状、体部には弧状の縄の圧痕のある貼付帯があり、無文の器面に半截竹管状工具による刺突が加えられている。⑩は口縁の4箇所に2頂の隆起部と橋状把手をもつ。体部には肋骨文風に2本一組の貼付帯を縦位と横位と3段に施している。地文は結束羽状縄文である。

c類 沈線文をもつもの(図VIII-87-⑪・⑫、図VIII-103-53~61)

沈線によって連弧文、肋骨文を描くものがあり、地文は斜行縄文、羽状縄文がある。⑪の口縁は4箇所山形をなすと思われる。体部には、環状の貼付文があり、肋骨文風に沈線文が描かれている。⑫は小型土器である。地文は不規則な複節の斜行縄文である。54は口縁の山形隆起部の頂部に三重の円が沈線で、57は環状の貼付文が施されている。

d類 貼付帯や沈線文をもたないもの(図VIII-86-⑨・⑬~⑮、図VIII-104-62~68)

⑨は口縁の4箇所に3頂の隆起部をもつ。隆起部には縦に貼付文がある。地文は結束羽状縄文である。63には渦巻状、64には円形の貼付文がある。68は口唇に篋状工具による押引き文と口唇直下に縄線文が加えられている。

e類 魚骨回転文を施すもの(図VIII-104-69~72)

いずれもニシントタイプの魚骨文を施すものである。70は口唇に刻み目があり体部に沈線文が加えられている。

f類 半截竹管状工具を用い、刺突文、沈線文を施したもの(図VIII-104-74・75)

74は、口頸部の縦位の貼付帯の両側に半截竹管状工具の内側で斜位に刺突を加えている。75は、口唇に矢羽状の刻み目を施し、体部に半截竹管状工具の内側で沈線を加えている。

g類 大木8a式に関連するもの(図VIII-104-76)

76は、2個一組の隆起部をもち、縄を擦捺した細い粘土紐を口縁部に貼付している。体部には、2本一組の沈線が加えられている。地文は斜行縄文である。

III群 B₁類

文様要素と口縁部形態からa~dの4者に細分される。

a類 口唇部にワラビ状の沈線文、ないし簡略化された円形文、渦巻文をもつもの(図VIII-87-⑬、図VIII-105-77~87)

⑬は口縁の低い隆起部直下に指頭押捺による円形文が見られる。頸部には横位の細長い楕円形の区画文が描かれ、その中に円形刺突文が加えられている。体部には2重の円と細長い楕円形を組合せた沈線文が描かれている。地文は斜行縄文である。

77・78は口唇部にワラビ状の沈線文をもつものである。地文は斜行縄文である。82はくずれた感を呈すワラビ状の沈線文が口唇部に施され、体部には横位の楕円形の小さな区画文内に円形刺突文が加えられている。83は体部に縦位に楕円形の小さな区画文が描かれ、その内側と外側に縄を圧捺している。84は口縁の隆起部の頂端部に円形の押捺文がある。87は貼付帯による円形文が施されている。

b類 口縁部に幅広い無文帯をもつもの(図VIII-105-88-90)

88・89は同一個体の可能性がある。90は複節の斜行縄文のみが施されている。

c類 縄文ないし無文のもの(図VIII-87-⑬・⑭、図VIII-105-91-93)

⑬は4箇所の隆起部をもつと思われる。体部は複節の斜行縄文のみである。93は無文。

d類 無文地に楕円形状の区画された磨消文をもつもの(図VIII-105-94)

94は無文地に条線文を施し、沈線で3重に楕円形状に区画している。口唇部には1条の沈線が加えられている。文様構成において、82・83に近いものといえる。

III群 B₂類(図VIII-88-⑳～㉑)

器形、文様構成においてa～fの6者に細分する。

a類 体部文様構成においてIII群 B₁類に近い特徴をもつが、文様構成の簡略化が著しく、器形胎土等が本群に類似するものを一括して扱った(図VIII-106-100-104)

100は山形口縁と思われる。口唇に刻み目をもち、体部に沈線による円形文、横走る沈線文が描かれている。101は強く外反する口縁部をもち、体部に渦巻文(ワラビ状文)を4個組合せ文様を描いている。104は口縁部に貼付帯をもち1条の縄を圧捺し、貼付帯直下にも2条の縄の圧捺がある。

b類 口縁部に数条の縄線文の認められるもの(図VIII-88-㉒、図VIII-106-107-112)

㉒は口縁部に5箇所の隆起部をもち、口頸部に6段の縄による縄線文が施されている。体部は不規則な斜行縄文である。107は口唇部直下に無文帯があり、2条の縄線文が加えられている。地文は不規則な斜行縄文である。112は口唇部に粘土粒貼付による2個一対の小突起がある。108は口唇上に縄線文が加えられている。

c類 口頸部に貼付帯をもつもの(図VIII-106-107-105・106・113-118・132-139)

105は口唇直下に3条の縄線文が加えられている。113は緩やかな山形口縁と思われる。頂部には刻み目をもち、縄文が施された貼付帯が楕円状に施されている。115-118は胴部破片でいずれも貼付帯より上半部は無文である。

d類 口頸部に、半截竹管状工具による刺突や円形刺突文の加えられた貼付帯をもつもの(図VIII-107-119-128・133-136・138-139)

120は無文地に2条、横環する貼付帯の上・下端に1条づつの縄線文が加えられている。貼付帯には、円形刺突文の施された貼付帯がある。127は口唇にも円形刺突文が加えられている。119は、口唇直下に円形刺突文の施された貼付帯がある。127は押引き文が加えられている。126・127は、口唇直下に円形刺突文が加えられている。119は、口唇に刺突が加えられている。

133～136・138・139は胴部破片である。134は貼付帯によって区画された部分に2本一組の沈線が施されている。

137は半截竹管状工具の内側を用い刺突を施している。

e類 口縁部に沈線が施されているもの(図Ⅷ-107-129～131)

129は2条の沈線に加えて2段の小さな円形刺突文が加えられている。131は2条の沈線文と2段の刺突文が交互に施されている。

f類 縄文のみのもの(図Ⅷ-88-㉔～㉕、図Ⅷ-107-140～143)

器形はくびれをもち、口縁が外反し、縄文は不規則な斜行縄文のものが多い。㉔は撚り戻しの原体による縄文が横位に施されている。

Ⅲ群C類(図Ⅷ-88-㉖)

㉖は切り出しナイフ状の口唇をもち、口縁は平縁である。体部には結束羽状文が施されている。調整は内外とも粗雑である。胎土は極めて粒子が細く、焼成も良く、灰黄褐色である。

Ⅳ群A₁類(図Ⅷ-88-㉗・㉘、図Ⅷ-107・108-144～161)

文様構成、器形等a～cの3者に細分する。

a類 磨消文をもつもの(図Ⅷ-108-144)

144は太い沈線で区画された磨消文をもつ。

b類 口縁部に貼付帯をもつものと、それに類似する波状の細い沈線が加えられている。146は無文帯をもつ。147～150は薄い貼付帯をもつ。151～154は貼付帯をもたず、口縁部には方向の異なる斜行縄文が施されている。155は底部破片である。1条の貼付帯がある。

c類 縄線文が施されているもの(図Ⅷ-88-㉙、図Ⅷ-108-156～158)

㉙は口縁部に緩やかな5箇所の隆起部をもつ。口唇と隆起部に縄の押捺がある。口縁直下に2条の縄線文が無文地に加えられ、体部には不規則な斜行縄文がある。胎土は砂礫粒を多量に含み、焼成は悪く脆弱である。156は縄線が押捺された2本の縦位の貼付帯が施されている。地文は斜行縄文である。157・158は無文地に縄線が施されている。159はオオバコの回転文である。160は地文上にオオバコの押捺文が2条加えられている。161は沈線で区画された中に円形刺突文が加えられている。類似資料が少なく、一応ここで扱っておく。

Ⅳ群A₂類(図Ⅷ-89-96-㉚～㉛、図Ⅷ-108-162～299)

本土器群は、C地区の出土土器の主体を占めるものである。本遺跡の土器分類においてⅣ群A₂類は、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するものではあるが、これらの土器群に先行すると思われる涌元式、後続すると思われるウサクマイC式との間には明瞭に分けられない資料も少なくない。器形、文様構成等によって便宜的に2に大別する。

a類 無文地に細い文様が描かれているものを主体とするが、地文のあるものも含む。

(図Ⅷ-89・90-㉚～㉛、図Ⅷ-108・109-162～198)

文様構成・器形等から4つに細分する。

1 体部文様帯が「C」字状、「S」字状、「渦巻」状の入組文で縦位に区画されるもの。

(図VIII-89-㉔~㉕、図VIII-108・109-164・165・168・172・177~182)

㉔は平縁で向きの異なる「C」字状沈線文を組合せた入組文、㉕は波状口縁で「S」字状の入組文、㉖は頂部に「8」字状の貼付帯のある波状口縁で、隆起部から5条の「S」字状の沈線文が垂下している。㉗は5箇所隆起部をもつ波状口縁である。体部文様帯は3段から成る。上段には、鋸歯状に区画された文様帯に、入組文ないしカニのハサミ状の沈線文が描かれている。中段、下段は、「C」字状入組文で文様帯が区画され、中段には鋸歯状文が描かれている。㉘は、壺形土器である。頸部に櫛状の把手が4箇所にある。体部は2段の渦巻状沈線文で区画され、羽状の沈線が加えられている。地文は横走の縄文である。

2 体部文様が3~4条の縦位の沈線で区画されるもの(図VIII-109-173・183~186)

173は、山形の折返し口縁をもち、4条の沈線が垂下している。183は3条の沈線と「S」字状の沈線が垂下し、鋸歯状文が施されている。

3 体部文様が入組文、波状文等、横位に展開されるもの(図VIII-89-㉖、図VIII-108-166)

㉖の口縁は緩やかな波状である。体部中央に3本一組の波状の沈線文が施されている。166は刻み目をもつ緩やかな波状口縁で、体部には2本一組の波状文が描かれている。

4 明瞭な区画文をもたない沈線文のあるもの、無文のものも含む。(図VIII-89・90-㉙・㉚~㉛・㉜、図VIII-109-171・176・187~198)

㉙は、緩やかな波状口縁をもつ、頂部に3箇所の刻み目をもつ。体部に弧線文が描かれている。㉚は波状口縁をもち、体部には鋸歯状文が描かれている。㉛~㉜は沈線のみのものである。㉜は小型深鉢形土器である。折返し口縁「8」字状の貼付をもつ。体部には「S」字状の沈線が垂下している。

b類 体部に櫛状工具による文様、磨消縄文等が見られるもの(図VIII-88-㉞・㉟~㊱・㊲、図VIII-110-114-199~298)

文様構成、器形等から8つに細分する。

1 口縁部、体部に貼付帯による文様が施されているもの(図VIII-90・91-㊳・㊴~㊵、図VIII-110-199~217)

㊳は弧の貼付帯のある隆起部をもち、頸部に2段のカギの手状の貼付文をもつ、㊴は体部に櫛状工具による文様が2段に施されている。㊵は体上部に入組文から変化したとみられるS字文を描きその下に雷文が施されている。209は波状、211はカニのハサミ状の文様が施されている。口縁部、頸部に貼付帯による文様があるものには、口縁の強く外反するものがある。体部には櫛状工具による文様が描かれ、太い沈線で縁取りをしているものが多い。また沈線による「Z」字文の出現率は極めて低い。217は、小型浅鉢である。体部には磨消縄文が施され「Z」字文が加えられている。

2 体部に櫛状工具による文様 磨消縄文によって帯状の文様が描かれているもの。(図VIII-88・91・92-㊶・㊷~㊸、図VIII-111-220~223・228~241)、オオバコ回転文のものもある。

㊹・㊺は小型浅鉢である。体部は櫛状工具で曲線の文様を描き、㊺には沈線による縁取りが

加えられている。㉔は平縁の大型深鉢と思われる。頸部に1条、体部にはカギの手状の文様が2段施されている。㉕は体上部に弧状と「S」字状に施されている。㉖は、比較的直線的な文様構成で、縄文施文後、沈線で区画している。縦横の区画には3本一組の沈線が用いられている。㉗は体部文様の曲線化が見られ「矢印」状の文様等が描かれている。221・222は、3本一組の沈線でカギの手状の文様を描いている。228～231は体部上部の平行する沈線を小さな弧線文や貼付帯で結んでいるものである。228には円形刺突文が加えられている。231には貼付帯があり、その上に円形刺突文が加えられている。㉘・235は、オオバコ回転文である。236・241は同一個体、240は無文地に極く細い刻線文がある。

3 無文地に横位に展開する波状の入組文が施されているもの(図VIII-111-224～227)

224～227は1条の太い沈線で文様が描かれている。文様構成は、トリサキ式に近いと思われるが、器形、施文具等の違いが認められたためここで扱った。

4 体部に沈線で雷文を描くもの(図VIII-112-242・243・253・254)

242は、体部上部に施文されている。口縁部の幅は狭く、強く外反している。243は無文地に描かれているもので、上部に2本の沈線間を結ぶカギの手状の沈線文が文様区画帯的に加えられている。

5 体部に「Z」字・蛇行・「く」の字状沈線文や鋸歯状の沈線文が施されているもの。「Z」字状の沈線文は、体部に1段ないし無文帯を挟み2段に施され、主要文様要素として用いられているものもあるが、体部の主要文様の磨消縄文の上下端に単独、ないし複合されて用いられ、文様区画帯的な効果をもつものが多く、その組合せもバリエーションに富んでいる(図VIII-93・94-㉓-㉔、図VIII-112・113-244～276)。

㉓は体上部の幅の狭い文様帯内に「く」の字状の沈線文が加えられている。㉔～㉕は主要文様として1段描かれたもの。㉖～㉗・244は、無文帯を挟み2段描かれたものである。いずれも口縁部は無文で比較的幅の広いものが多い。㉗は、上段文様帯には「Z」字状沈線文、下段文様帯には鋸歯状の沈線文が加えられている。㉘～㉙・247・257・258は文様区画帯的な効果を示すものである。㉚は無文地に施されたものである。㉛は体部文様帯の下端に「Z」字と矢羽状の沈線文が加えられている。245・246は沈線で区画された縄文地にくずれた「Z」字文が加えられている。259は無文地に「Z」字状と羽状の沈線文が組合せて用いられている。260は方向の異なる羽状の沈線文が2段加えられている。266～268は同一個体である。

6 口縁部には沈線で弧線文、入組文、波状文、流水文が施され、体部には曲線的な磨消文や地文上に曲線的な沈線文が加えられるもの。(図VIII-114-277～284・287～295)

277・278は地文上に弧線文を内外面に施した波状口縁である。口唇部は角型で縄文が施され、口縁部と体部は1条の沈線で区画されている。体部は磨消縄文である。281・284は流水文である。282・283は同一個体と思われる。小型浅鉢で口縁部に波状の沈線文、下位にはやや縦むきに「Z」字状の沈線文が加えられている。293はオオバコ回転文である。

7 口縁部と体部が無文帯で区画されているもの。(図VIII-114-285・286・296)

285は波状口縁のもので縄文地に弧線文が施されている。口唇は角形を呈し、縄文が施されている。体部には流水文が加えられている。

8 縄文のみのもの、無文のもの(図VIII-99-㉔~㉗)

㉔~㉗には斜行縄文が施されている。㉔は口縁に隆起部をもち、口唇に刻み目が施されている。㉕~㉗は無文のもので、㉗は小型土器である。㉗は口唇に縄文が施されている。

㉘~㉚は壺形土器の口縁部、㉘は頸部の4箇所に橋状把手がある。体部には磨消縄文がみられる。㉙は頸部の隆起帯と沈線によって区画された文様帯の中に半截竹管状工具による爪形の押し引き文が加えられている。㉚は橋状の把手をもつ小型土器である。無文地に沈線文が施されている。㉛~㉝は底部である。㉛は曲線的な沈線文、㉜は流水文的な波状文が描かれている。㉝は無文地に2条の細い沈線文と底面に渦巻状の沈線文が描かれている。㉞には底面に笹葉状の圧痕がある。また十腰内Ⅱ式の一部に相当すると思われるもの(297)も出土している。突起部分と思われ、口唇部には「S」字状の装飾が加えられ、体部には沈線の区画に細かな縄文を施し、刺突を加えている。昨年報告された本遺跡B地区包含層出土の資料に類似している。

IV群B類 (図VIII-96-㉞、図VIII-97・98-㉟~㊱、図VIII-114-299、図VIII-115-300~320)

口縁部の文様構成によってa~cの3類に区分される。

a類 口縁部に鋸歯状の沈線文が施された船泊上層式に相当するもの。(図VIII-114-299、図VIII-115-300)

299は口唇部を欠失する。鋸歯状の沈線文が施され、口縁部と体部は無文帯で区画されている。300は口唇直下に2条の沈線が引かれ口縁部文様帯が区画され、中に鋸歯状の沈線文が加えられている。

b類 手稲式に相当するもので、1~4の4者に細分する。

1 口縁部に横走する数条の沈線文が施されているもので、垂下する「S」字状の沈線文、小さな弧線、刻み目が加えられているものもある。(図VIII-97-㉟~㊱、図VIII-114-298、図VIII-115-301~313)

㉟は横走する6条の沈線の間に小さな弧線文を加えている。体部には磨消縄文がある。㊱には細い7条の沈線が加えられている。308・309は刻み目が加えられている。

2 弧線文を組合せ磨消縄文を描くもの。(図VIII-115-314)

3 沈線で区画された縄文帯をもつもの。(図VIII-115-315・316)

4 縄文のみのもの(図VIII-97・98-㉟~㊱)

㉟の口縁部はわずかに内湾し、口唇は角形に調整されている。体部には斜行縄文がある。㊱は小さな山形の波状口縁をもつものである。斜行縄文が施されている。

317~319は胴部破片である。317は弧線文で区画された磨消縄文のあるものである。320は突起部である。

c類 口縁部、頸部に刻み目文をもつもので航調式に相当するもの(図VIII-98-㉟~㊱、図VIII-116-321・322)

㊦は注口土器の口縁部である。口縁部、頸部とそれらを結ぶ縦位の貼付帯に刻み目が加えられている。㊧は口縁部を欠失している。頸部に1条の刻み目がある。体部は弧線文で区画された磨消縄文である。地文は羽状縄文である。321・322は同一個体である。頂部に刻み目をもつ小突起が貼付され、口縁部に刻み目が加えられている。地文は不規則な斜行縄文である。

Ⅳ群c類 (図Ⅶ-98-㊨-㊩、図Ⅶ-116-323-336)

口唇断面が切り出しナイフ状や角型を呈するもので内面からの刺突の加えられているものもある。

323-325は沈線文が加えられている。㊨・㊩・326-328は縄文のみのものである。㊨は羽状縄文、㊩は無節の斜行縄文である。㊪は口唇部に2個一対の貼付による突起をもち、頸部に無文帯をもつ。地文は羽状縄文である。329-332の口唇は切り出しナイフ状で内面から刺突をもつものである。331の口縁は小さな波状である。㊫・333・334は口唇部断面が角型で内面からの刺突をもつ。㊫は体部にカギの手状の磨消縄文がある。㊬は粗い羽状縄文である。

㊭・㊮・336は底部破片である。㊭は細かな斜行縄文が施された揚げ底の底部である。Ⅴ群A類に属す可能性もある。

Ⅴ群B類 (図Ⅶ-99・100-㊯-㊰、図Ⅶ-116・117-337-377)

浅鉢形、深鉢形、皿形、壺形を呈する土器と、台付土器の台部が出土している。台付土器は破片資料が断片的に出土しているにすぎず復原されたものはない。器形、文様構成等による細分は土器集中Ⅲで行ったものと同じである。

浅鉢形土器

I a類 最大幅が口縁にあり、頸部が数条の沈線から成るもの(図Ⅶ-116-337-340)

頸部が3-4条の沈線から成り、体部に雲形文、入組文が施されているものが多い。338は、口唇部が薄く突起の痕跡を残す。内面に3条の沈線が加えられ、頸部は4条の沈線からなり最下段の沈線上に粘土粒の中央に刻みを入れた貼付瘤がある。体部には雲形文が施されている。340は口縁に刻み目をもつ。頸部は4条の沈線が施され、最上段に三角形の刺突が加えられている。体部は半肉形的な文様が描かれ、地文は縦行の縄文である。

I b類 最大幅が口縁にあり、口頸部が無文帯のもの。

㊯は平縁で、口縁部外側に2個一対の貼付瘤、内面に1条の沈線がある。口頸部は上端に1条、下端に3条の沈線で区画されている。㊰は平縁で、口唇の断面は九形である。頸部下端には3条の沈線が加えられている。体部は縦位の条痕文である。

II a類 最大幅が口頸部下端直下であり、口頸部が数条の沈線からなるもの。(図Ⅶ-99-㊱-㊲、図Ⅶ-116-351-355)

㊱は平縁で、口唇部に刻み目をもつ、頸部は3条の沈線からなり、上段の沈線内に三角状の刺突文が加えられている。頸部直下には粘土粒に刻み目を入れた貼付瘤がある。㊲は頸部が4条の沈線からなり、上段の沈線内に刺突文が加えられている。頸部直下に渦巻状の沈線を加えた貼付瘤がある。㊲の口頸部はわずかに内湾している。口唇部に刻み目がある。頸部が4条の

沈線からなる。2個一對の貼付瘤がある。

II b 類 最大幅が口頸部下端直下にある、口頸部が無文帯のもの、(図VIII-116-341~350)

342は頸部を沈線で区画し、体部には入組文が施されている。344・345・347・348は頸部下端の沈線内や頸部無文帯下部に小さな刺突が加えられている。346は口縁に刻み目がある。

深鉢形土器

I a 類 (図VIII-117-365)

365は明瞭な頸部をもたず、3条の沈線が施されているものである。地文は縦行縄文である。

I b 類 (図VIII-117-356)

356は平縁で口唇部に1条の沈線が加えられ、頸部の上端に1条、下端に3条沈線が施されている。

II a 類 (図VIII-99-㊸~㊹、図VIII-117・357~364)

㊸は平縁で、口縁部内面に1条の沈線がある。頸部は4条の沈線からなる。体部は不規則な斜行縄文である。㊹・㊹は、明瞭な頸部をもたず沈線のみである。364は口唇部に1条沈線があり、頸部は幅の広い3条の沈線からなる。頸部下端には刻み目がある。

㊹・366~368は縄文のみのものである。㊹の口唇部には刻み目をもつ貼付瘤がある。体部は不規則な斜行縄文である。366・367は口唇断面は切り出しナイフ状である。

皿形土器 (図VIII-117-369~373)

369は口唇部上に口唇部外側の刻み目と沈線で連続する「S」字状の半肉彫的な文様を施している。体部文様帯の上端は3条、下端は2条の沈線で区画し、「く」字状の沈線文が描かれている。地文は斜行縄文である。内面底部近くに微隆起帯をもち三角形の刺突が加えられている。胎土は細かく、調整も良く光沢がある。赤色の付着物がある。372の口唇にも369と同様の文様があり、底部内面近くに2条の沈線が施されている。体部には雲形文がある。

壺形土器 (図VIII-100-㊺~㊻、図VIII-117-374~377)

㊺は無文の頸部をもち、頸部上端には1条、下端には3条の沈線文が施されている。㊺~㊻はミニチュア土器である。㊻は外反する無文の頸部をもつもので、底部には丸味がある。㊺・㊻は無文である。㊻は折返し状の口縁である。377は体部に斜行する2条の沈線がある。地文には縦位の縄文が施されている。統縄文時代に属する可能性もある。

㊺は小型土器である。口縁部には貼付による突起があり、体部には入組文が施されている。㊺~㊻は底部である。㊺は台部で半肉彫的な入組文が施されている。㊻は無文の揚げ底である。㊺には沈線文があり、細かな縄文が施されている。胎土は極めて粒子が細かく、器面調整も丁寧で光沢をもつ。㊺は把手状突起で三叉文が施されている。

V群c類 (図VIII-117-378~389)

文様構成、文様施文法によって2つに大別される。

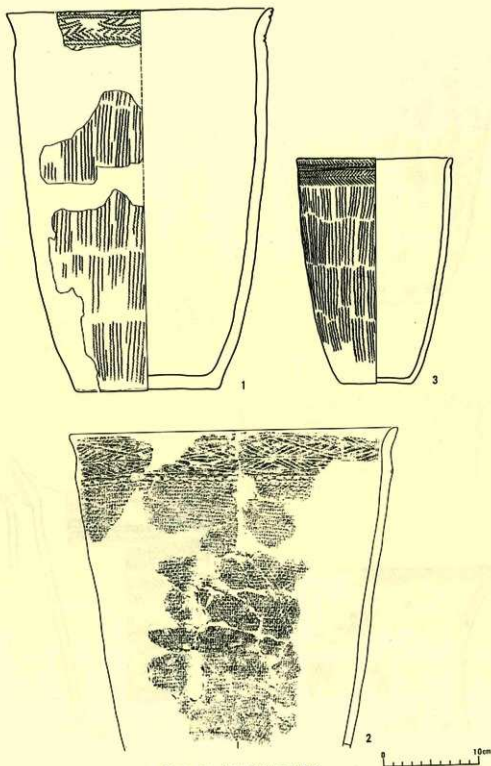
a 類 沈線多重手法によって体部文様が描かれているもの(図VIII-117-378~385)

378~382は浅鉢土器である。頸部は数条の沈線からなり、頸部下端には山形の突起が施され

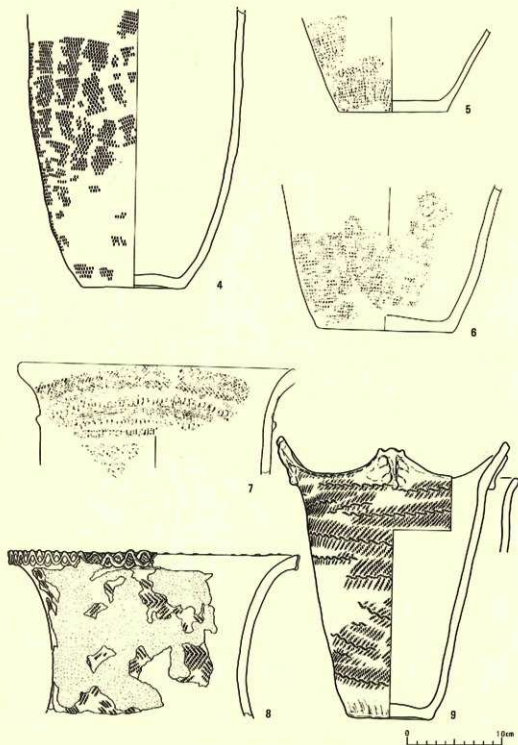
ている。体部には横位連続工字文が描かれている。383は深鉢土器である。頸部は無文上に太い沈線が3条加えられている。384～386は壺形土器である。384は口縁部破片で、口唇部はストレートに立ち上がり、外側に1条の沈線が加えられ、刻み目のある貼付瘤がある。体部は斜行縄文である。385は頸部下端に刻み目をもつ貼付瘤があり、体部に横位連続工字文が施されている。

b類 体部文様が沈線によって描かれているもの(図VIII-117-387～389)

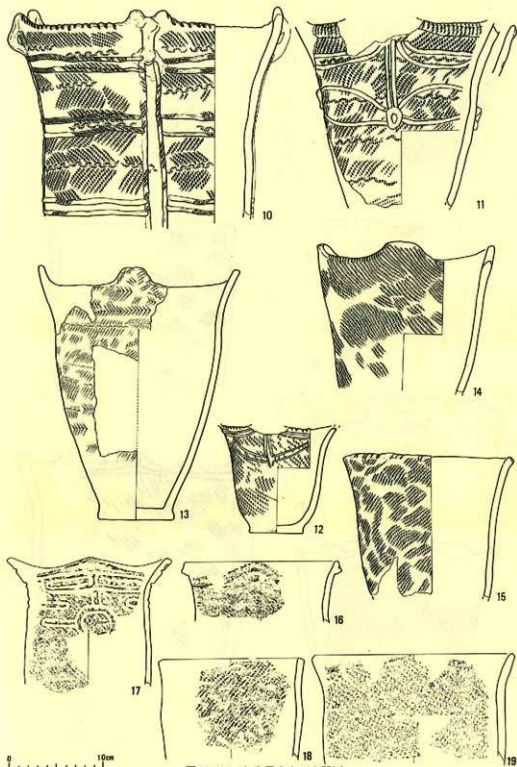
387は口唇部に貼付による2個一対の突起をもつ。体部沈線の上に小さな粘土粒を貼付した山形の突起がある。



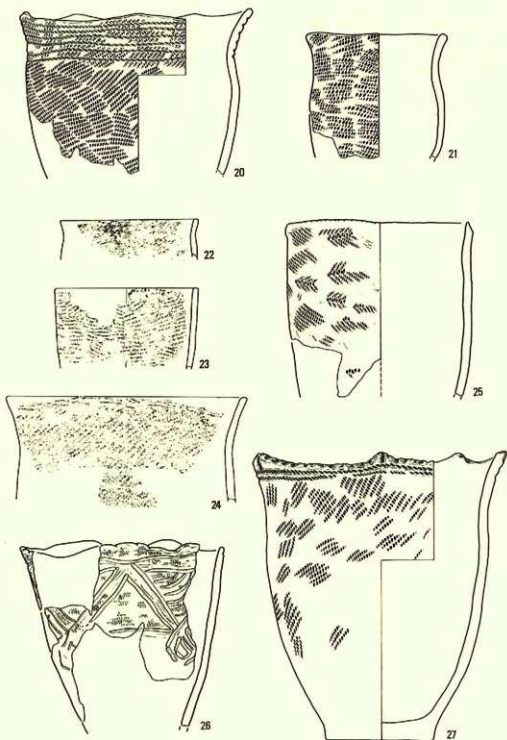
図Ⅶ-85 包含層出土の土器(1)



図Ⅷ-86 包含層出土の土器(2)



図Ⅶ-87 包含層出土の土器(3)

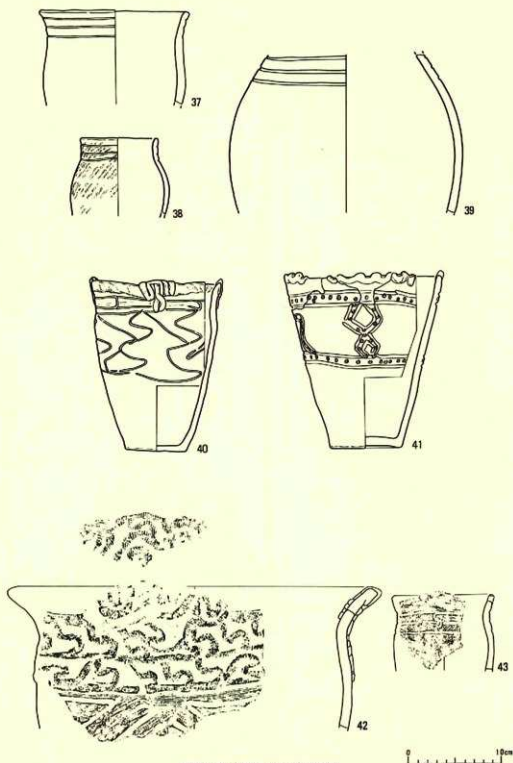


図Ⅷ-88 包含層出土の土器(4)

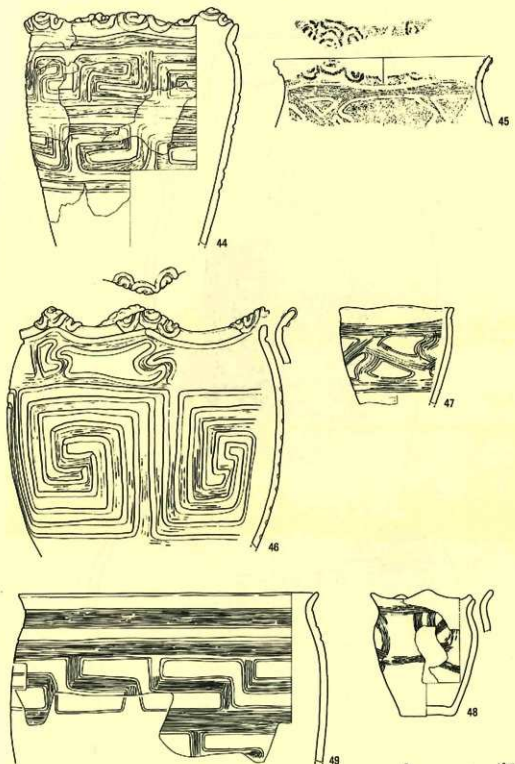
0 10cm



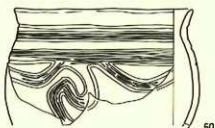
図Ⅷ-89 包含層出土の土器(5)



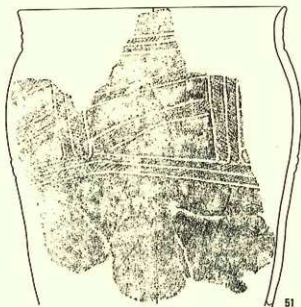
図VIII-90 包舎層出土の土器(6)



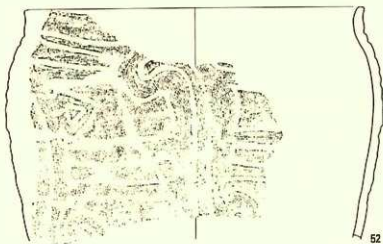
図Ⅶ-91 包含層出土の土器(7)



50



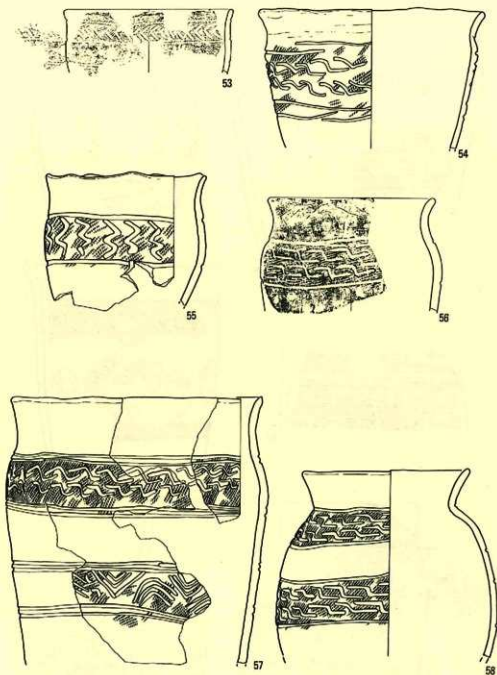
51



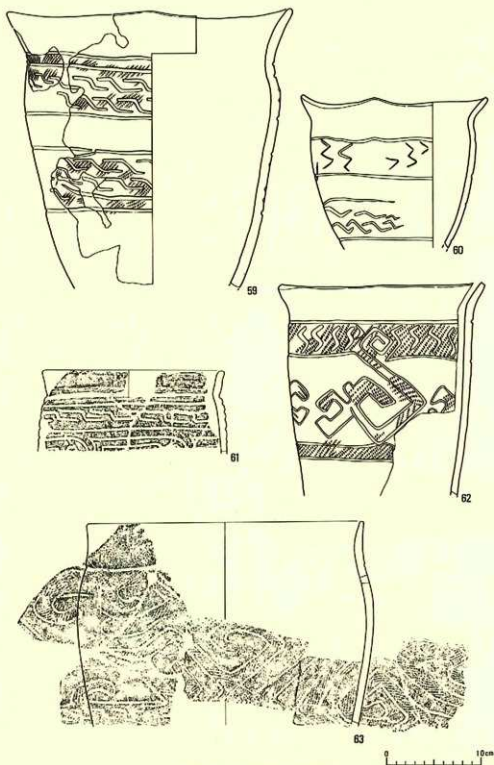
52



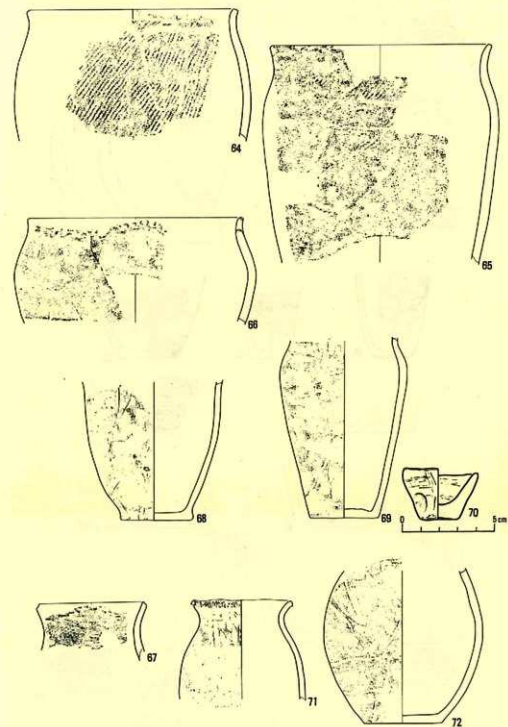
図Ⅶ-92 包含層出土の土跡(8)



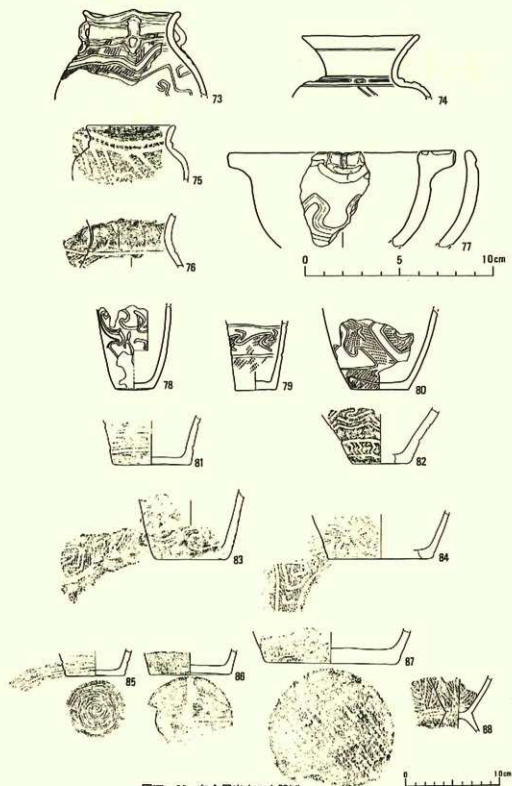
図Ⅶ-93 包含層出土の土器(9)



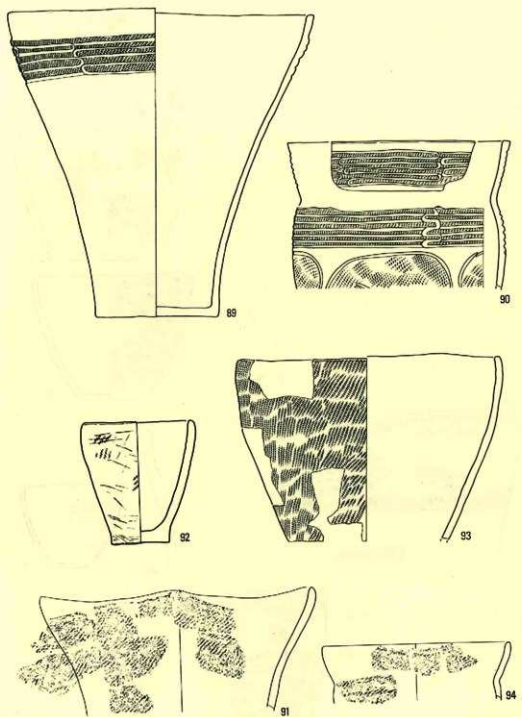
図Ⅷ-94 包倉層出土の土器(Ⅱ)



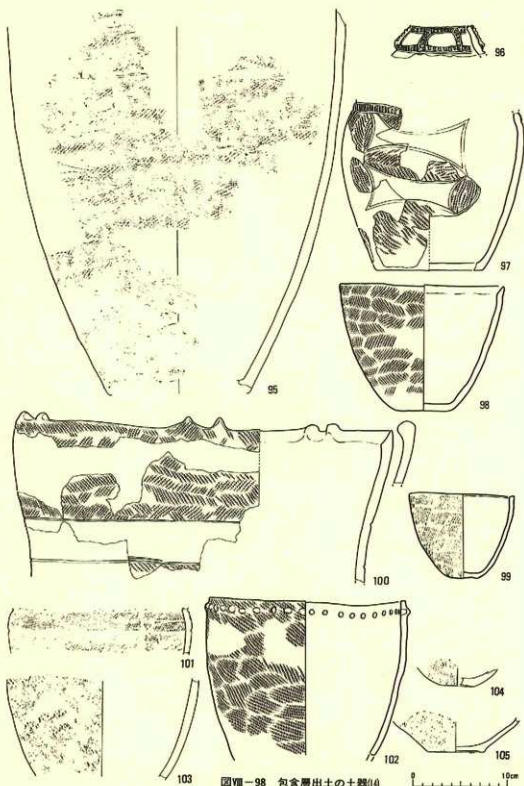
図Ⅷ-95 包含層出土の土器(1)



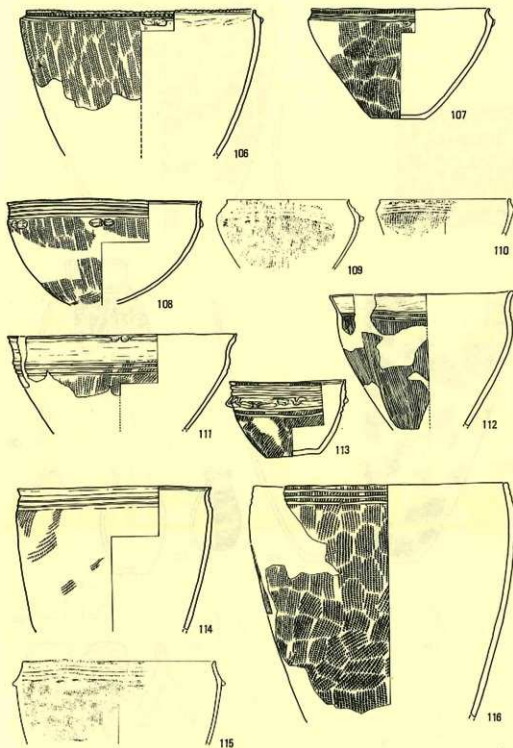
図Ⅶ-96 包含層出土の土器(2)



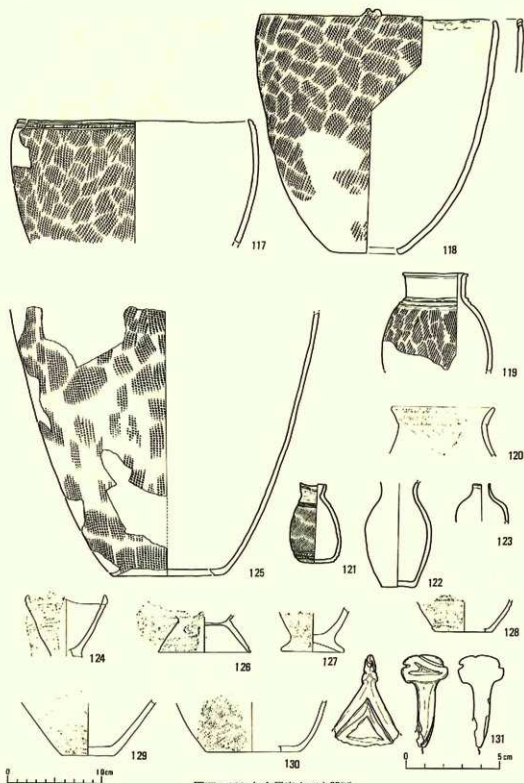
図Ⅶ-97 包含層出土の土器(3)



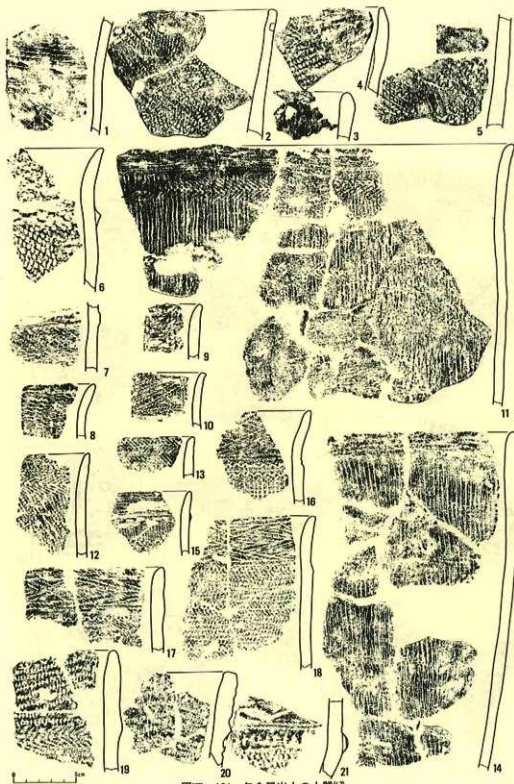
図Ⅷ-98 包含層出土の土器④



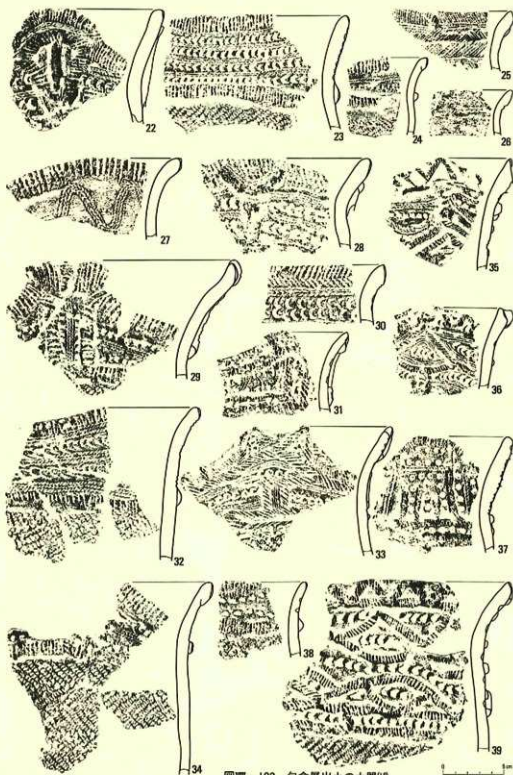
図VII-99 包含層出土の土器09



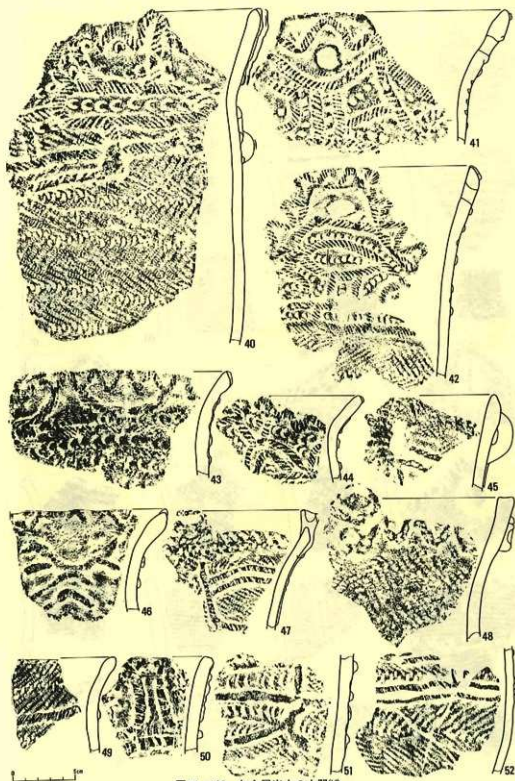
図Ⅷ-100 包含層出土の土器等



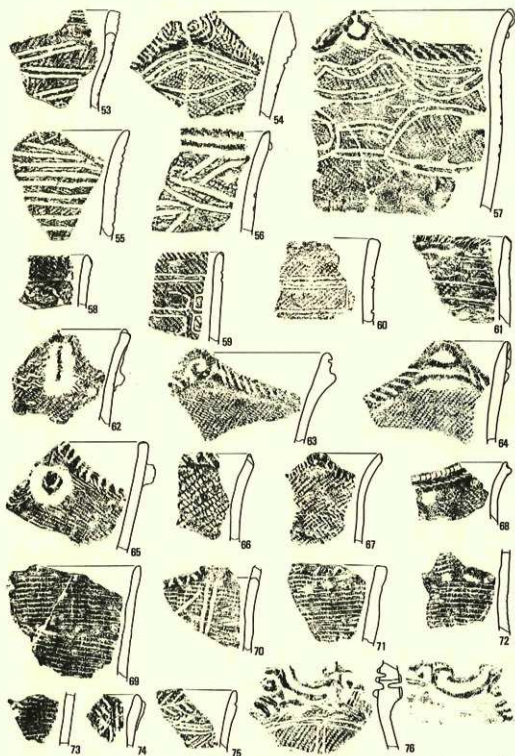
図VIII-101 包含層出土の土器(7)



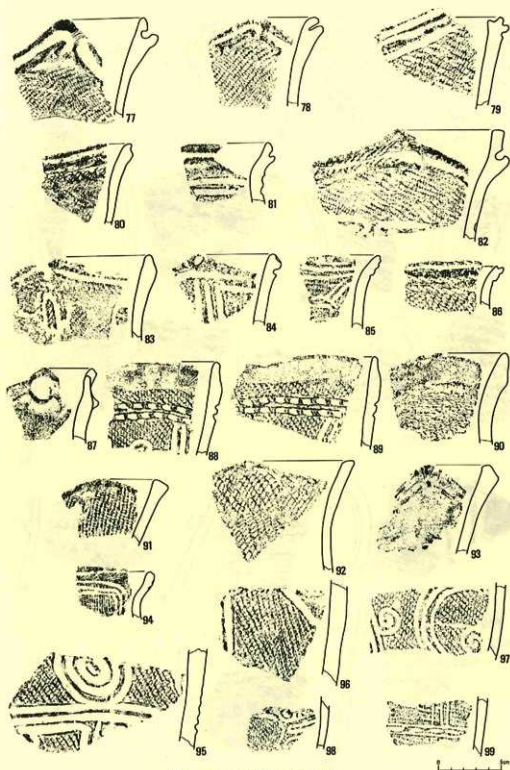
図Ⅷ-102 包含層出土の土器(Ⅷ)



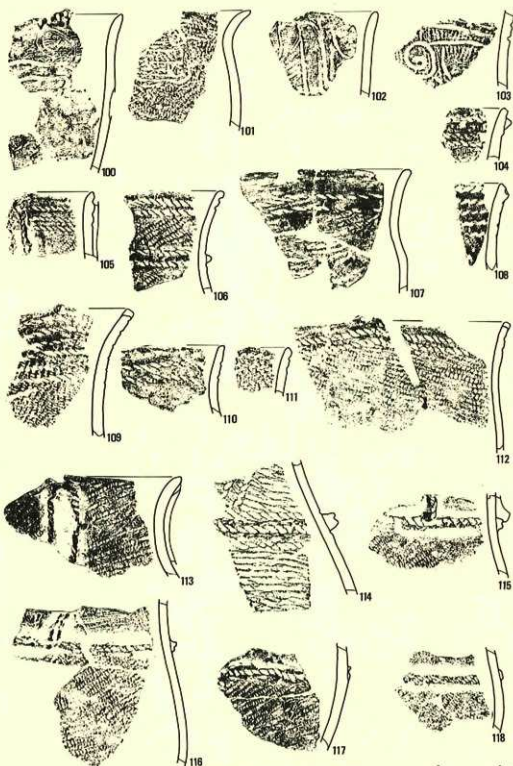
図Ⅷ-103 包含層出土の土群⑩



図Ⅶ-104 包含層出土の土器(28)

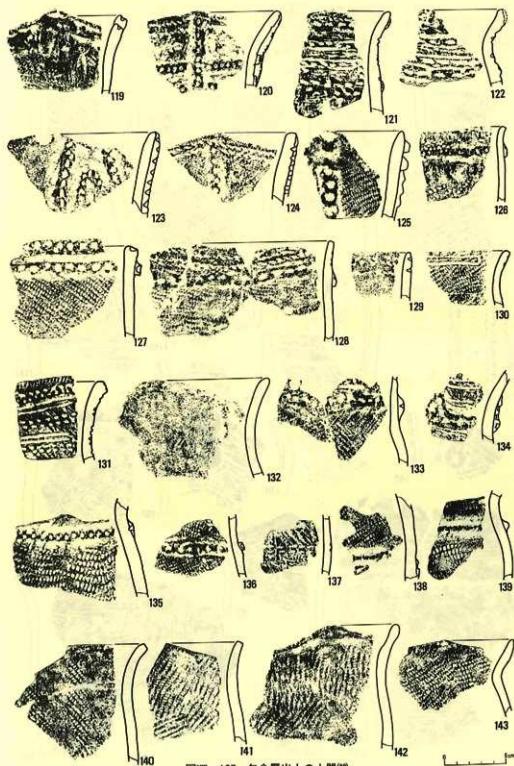


図Ⅶ-105 包含層出土の土器(2)

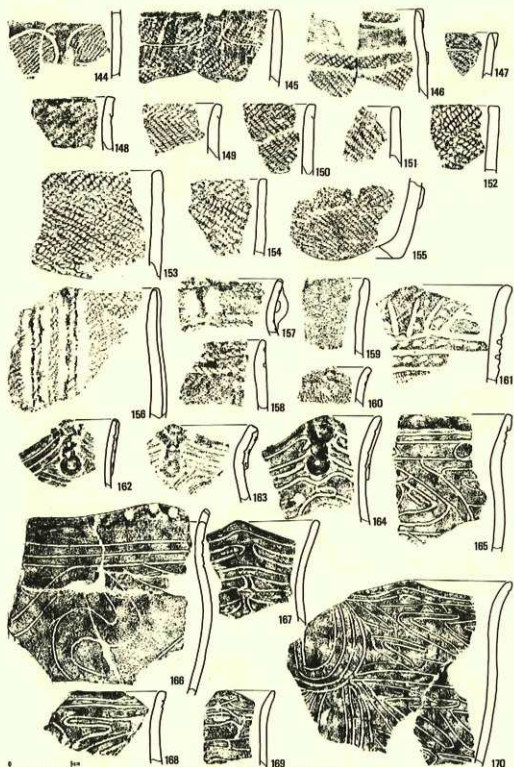


図Ⅷ-106 包含層出土の土器(2)

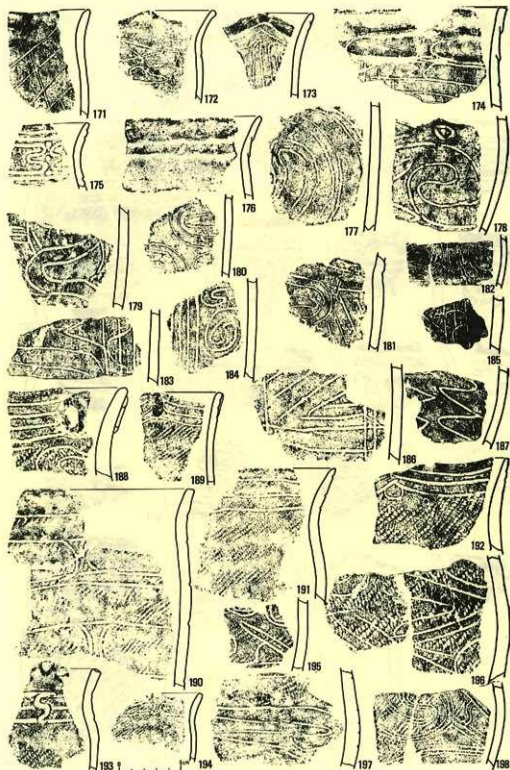




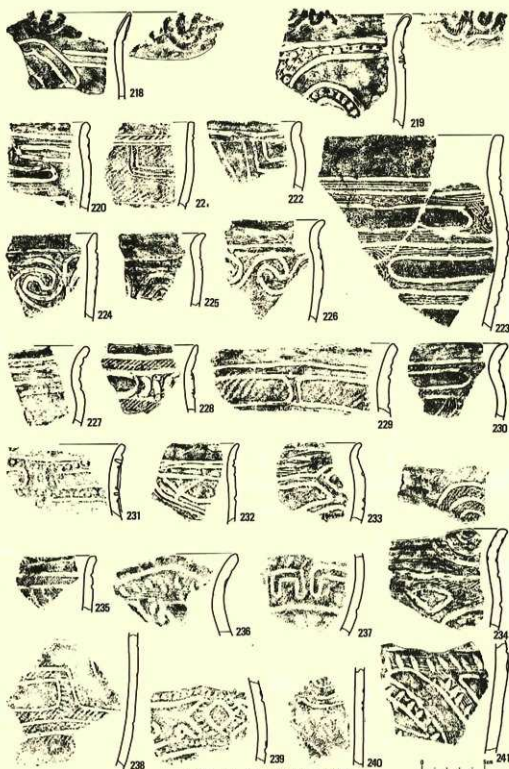
図Ⅷ-107 包含層出土の土器(2)



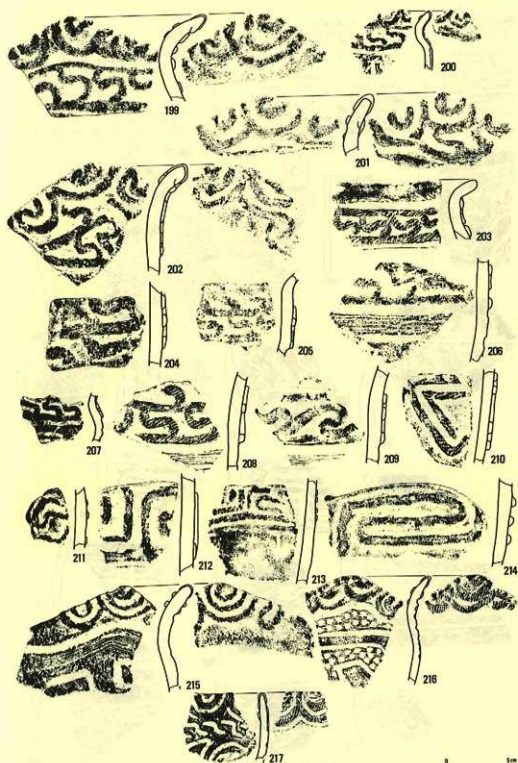
図Ⅷ-108 包含層出土の土器(4)



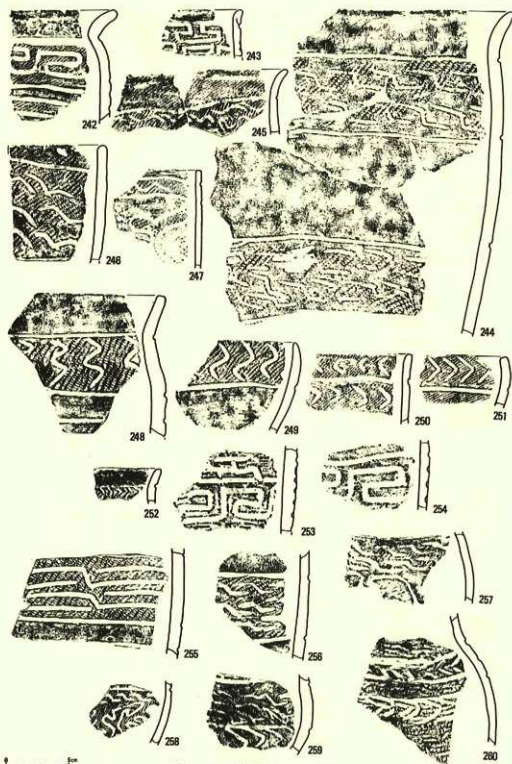
図Ⅷ-109 包含層出土の土器(四)



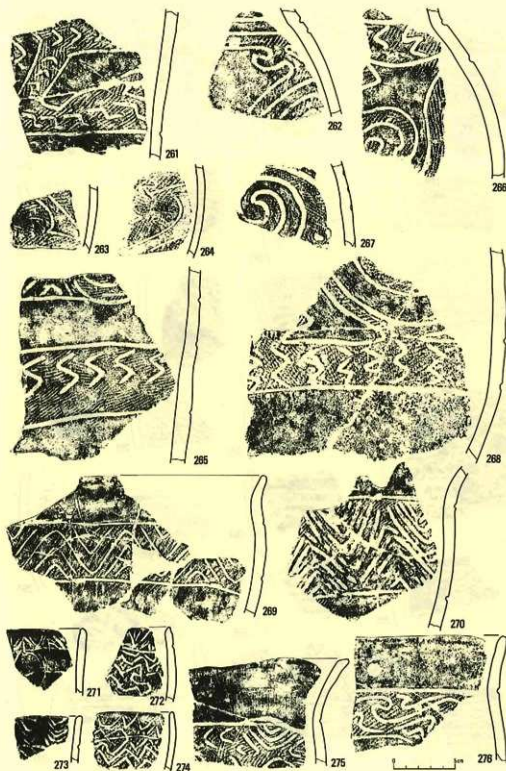
図版一110 包含層出土の土器②



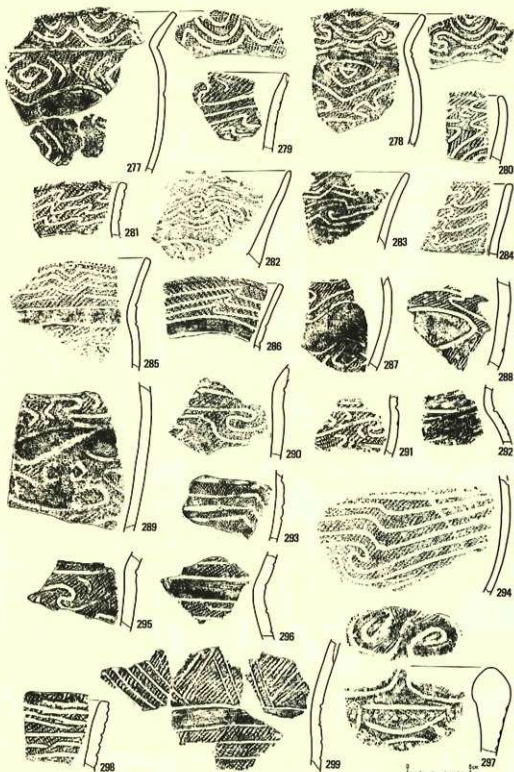
図Ⅷ-111 包舎層出土の土器切



図Ⅷ-112 包含層出土の土器(28)



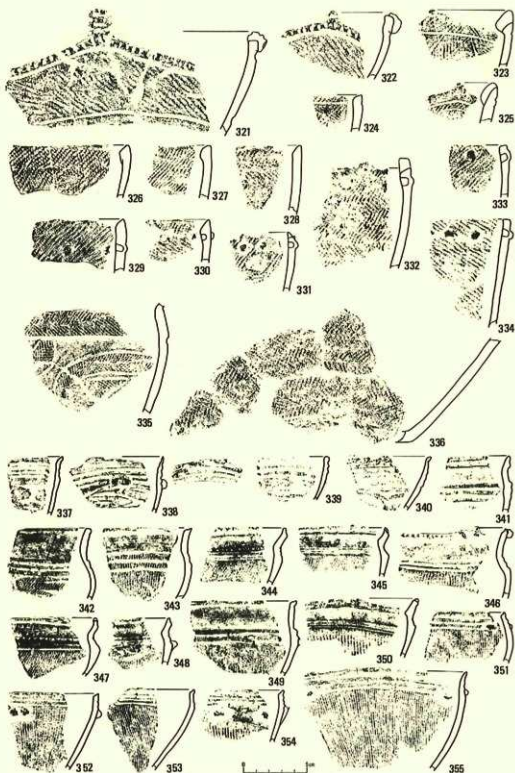
図Ⅷ-113 包含層出土の土器(2)



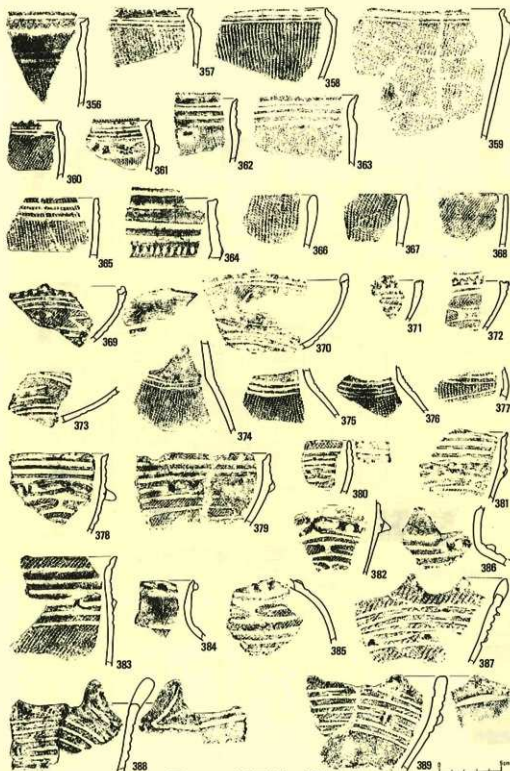
図Ⅷ-114 包含層出土の土器30



図VIII-115 包食層出土の土器30

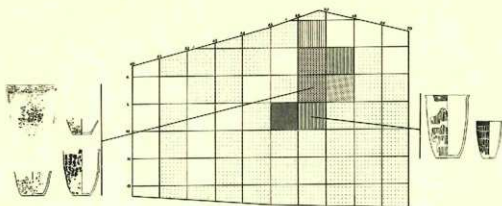


図Ⅷ-116 包含層出土の土器(3)

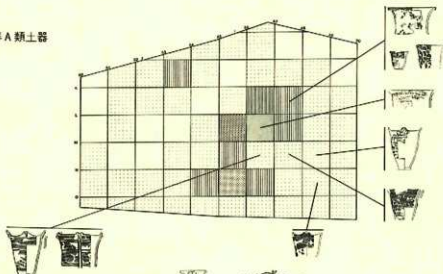


図Ⅷ-117 包含層出土の土器(3)

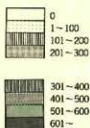
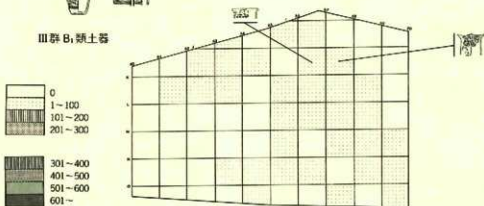
Ⅱ群B類土器



Ⅲ群A類土器

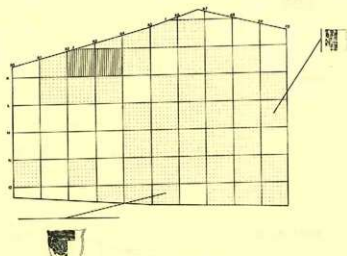


Ⅲ群B類土器

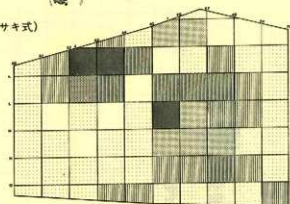


図Ⅶ-118 土器分布密度(I)

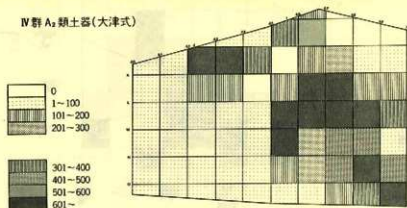
Ⅲ群 B₂類土器



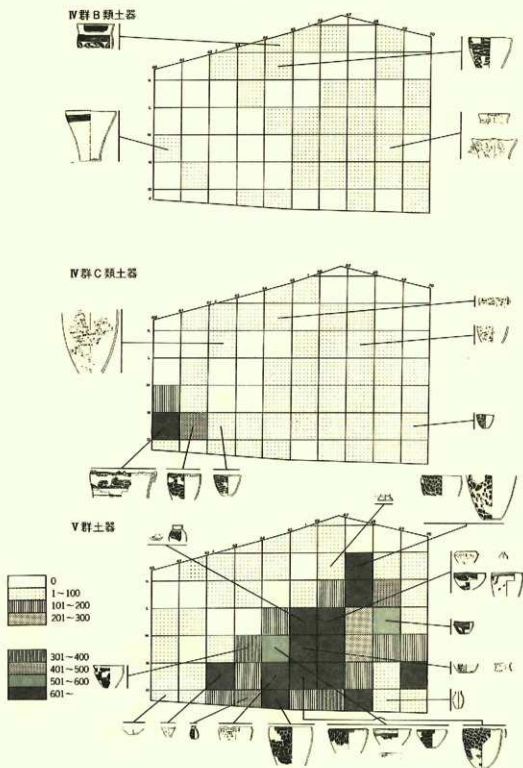
Ⅳ群 A₂類土器(トリサキ式)



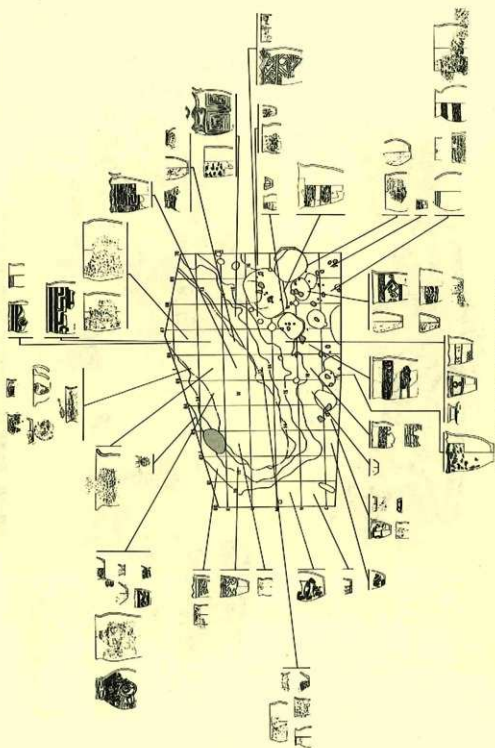
Ⅳ群 A₂類土器(大津式)



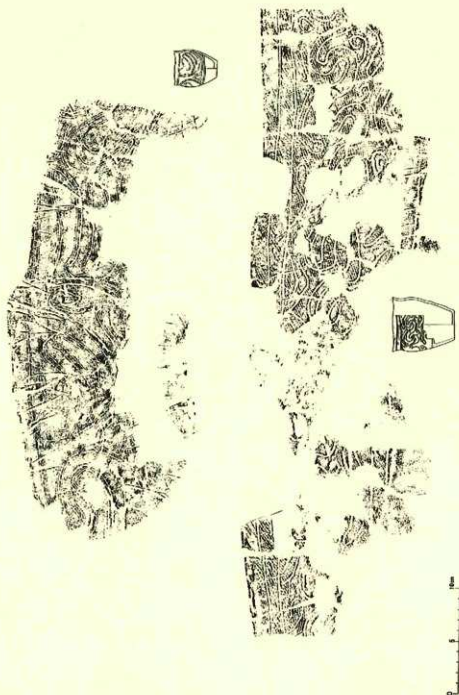
図Ⅷ-119 土器分布密度(2)



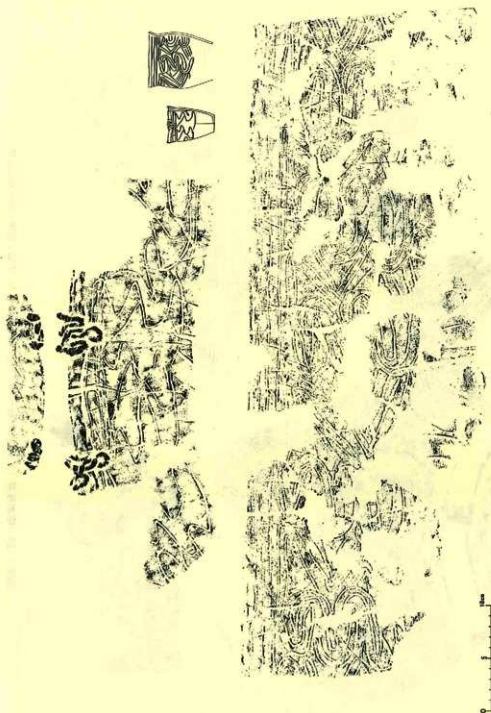
図Ⅷ-120 土器分布密度(3)



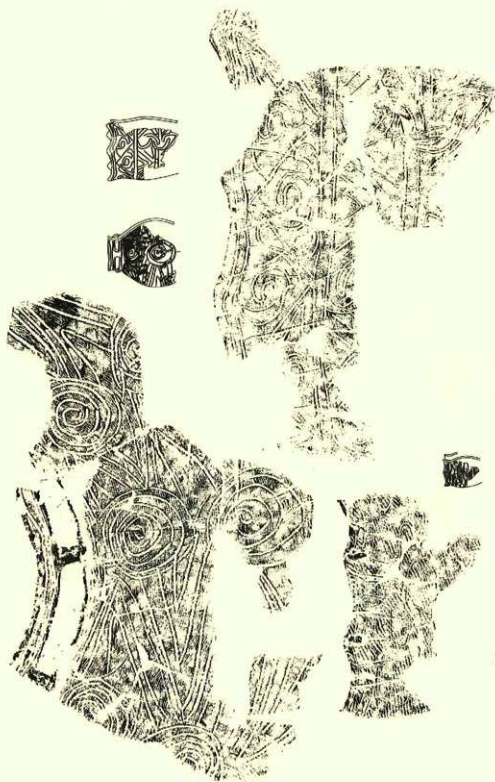
図一 121 N群A3 聚落跡分布図



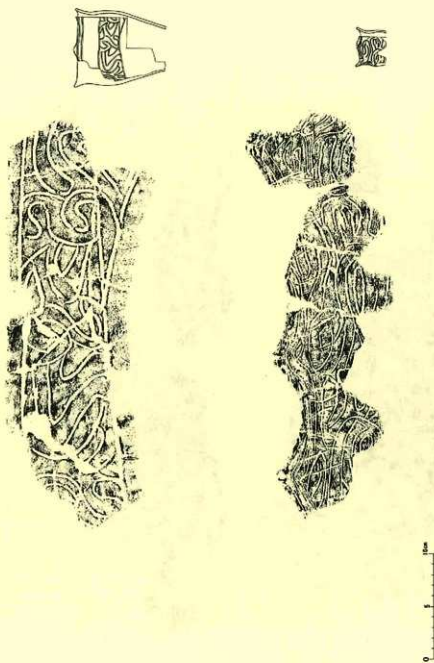
図Ⅷ-122 拓本展開 (上：図Ⅷ-58-18, 下：図Ⅷ-68-13の土器)



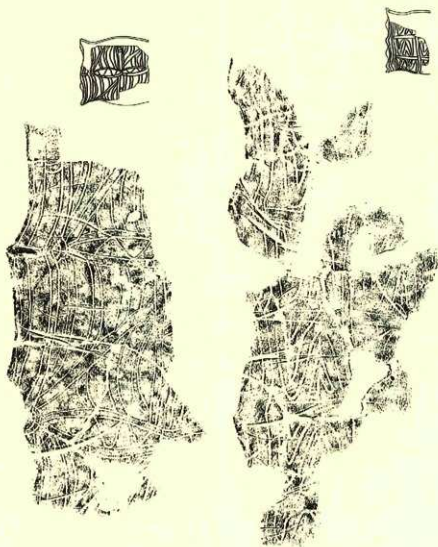
図面-123 拓本展開 (上: 図面-90-40, 下: 図面-58-16の土器)



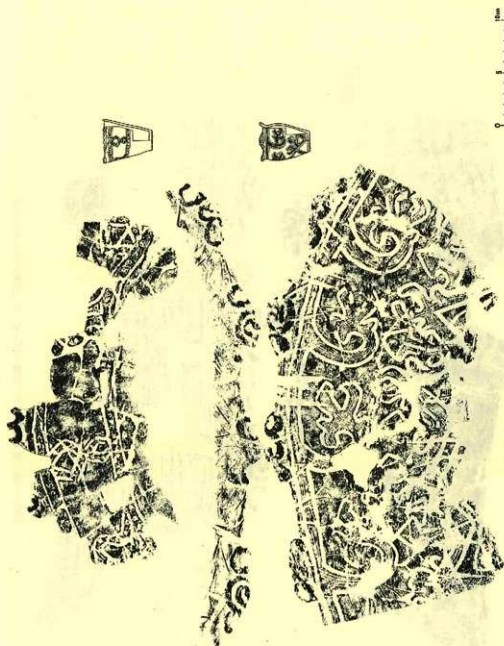
図Ⅶ-124 灰土器片 (上：図Ⅶ-89-34, 下左：図Ⅶ-66-2, 下右：図Ⅶ-89-33の土器)



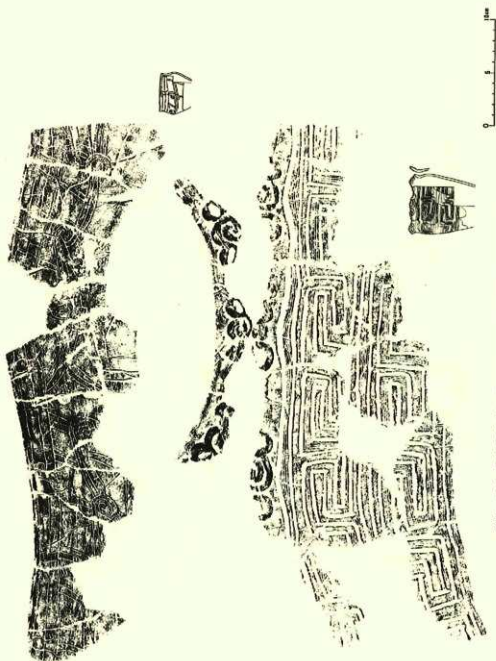
図Ⅷ-125 拓本残断(上:図Ⅷ-66-5, 下:図Ⅷ-59-30C土器)



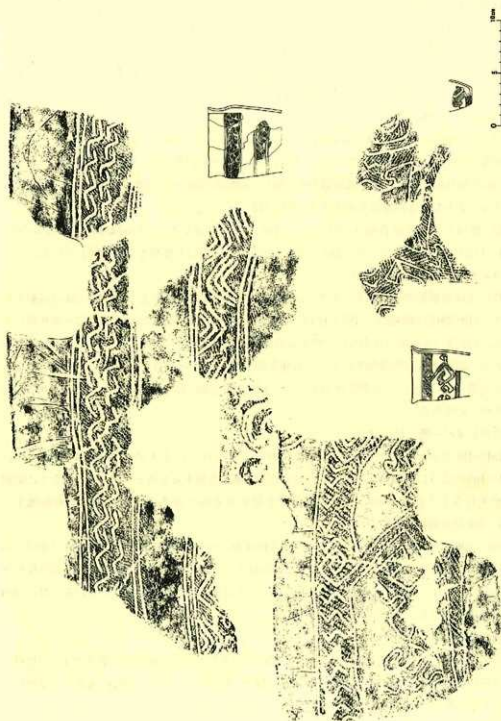
図Ⅶ-126 拓本展開（上：図Ⅶ-58-17，下：図Ⅶ-67-8の土器）



図Ⅷ-127 杯本展開 (上: 図Ⅷ-90-41, 下: 図Ⅷ-84-6の土器)



図Ⅶ-128 拓本展開（上：図Ⅶ-59-32，下：図Ⅶ-91-44の土器）



図Ⅷ-129 拓本展覧 (上: 図Ⅷ-93-57, 下左: 図Ⅷ-94-62, 下右: 図Ⅷ-96-80の土器)

(ii) 石器

石鏃 (1~73)

出土点数 357 点のうち無茎鏃は 5 点で、いずれも凹基である (1~4)。5~23 は有茎凹基、24~27 は有茎平基、28~62 は有茎凸基、63~71 は菱形・柳葉形の尖基鏃、72・73 は木葉形の凹基鏃である。31 点にアスファルトの付着が認められ、図示したものは 5・7・9・17・18・20・26・34・37・50・51・53・57・60 の 14 点である。

ドリル (74~96)

74~82 は棒状のもの。83~95 は剥片の一端に機能部を作り出したもので、83~91 はつまみ(頭部)との区分が不明瞭なもの。92~95 はつまみ状の頭部をもち、機能部の短いものである。96 は縦長剥片の打点側に機能部を作り出し、両側縁に細かな二次加工を施したものである。

ポイントもしくは両面加工のナイフ (97~114)

97・98 は有茎、99 は有柄のものである。100~113 は木葉形もしくは柳葉形を呈するもので、111~113 は半分欠損している。114 は「く」の字状に屈曲した特異な形状を呈している。

つまみ付ナイフ (115~150)

115~118 は横形の両面加工のもので、117・118 は外湾する刃部をもつ。119~124 は斜形のもので、119・120 は両面加工、121~123 は片面加工もしくは周辺加工によって刃部を作り出している。124 はつまみ部の作出だけで明瞭な刃部の加工は認められない。125~150 は縦形のものである。125~146 は周辺加工によって刃部を作り出している。147 の片面加工のものはつまみ部が欠損しているが、その製作技術からみて I 群 B 類土器に伴うものである。148~150 は両面加工のものである。

スクレイパー類 (151~232)

151~181 はエンドスクレイパーで筈状石器と称されているものである。形態的には、151~160 のように両側縁が刃部近くで急に広がる撥形を呈するものと、161~181 のように両側縁が平行もしくは緩やかに広がる短冊形を呈するものとがある。151~162 は両面加工、163~181 は片面加工のものである。

182~196 はほぼ円形もしくは卵形を呈する両面加工のもの。197~216・221~232 は素材である剥片の形状をほとんど変えることなく、周辺加工によって直刃や内・外湾する刃部を作り出したものであり、前者の一群は縦長の剥片を、後者は横長の剥片を素材としている。217~220 は尖頭部をもつもの (convergent) である。

楔形石器 (233~249)

出土点数 17 点の全例を図示してある。平面は四辺形もしくはそれに近い形状を呈し、相対する縁辺に細かい剝離痕が認められ、その多くは階段状となっている。縦断面は概して分厚い両凸レンズ状を呈する。

三脚石器 (250~252)

3 点とも頁岩の板状の礫を素材としている。二次加工によって一面が内湾するのが一般的で

あるが、251・252は素材の内湾した風化面をそのまま利用している。いずれもIV群A類土器に伴うものである。

異形石器 (253・254)

253は剥片の一侧縁に角状の小突起を作り出したもので、類例は59年度B地区(図V-60-156)から出土している。254は三日月形を呈するもので、石材は黒曜石である。

トランシェ様石器 (255-258)

刃部が直線的か鋸歯縁状で両側縁はやや内湾する。255・258は横長の剥片を素材としているが、他の2点とともに刃部には片面に調整加工が施されている。

磨製石斧 (259-274)

259-262は石のみと称される小形石斧で、いずれも全面に磨きが施されている。263・264は打ち欠きによる成・整形のものである。265-269はベッキングによる成・整形で、266の刃部はきわめて狭小である。270・271には擦切りの痕跡が認められる。272-274については全面に磨きが施され、成・整形の方法は不明である。

礫器もしくは石核 (275-277)

275は石核もしくは両刃の礫器(chopping tool)で、石材は頁岩。276・277は片刃の礫器(chopper)で、石材は276が砂岩、277が泥岩である。

石鏝 (278-282)

278は半分欠損しているが、双孔と推される。その形状は弥生時代の「石庖丁」に酷似しているが、一応石鏝に含めておく。石材は凝灰質砂岩。同様の資料がCH-7の覆土からも出土している(図VIII-33-6)。279・281・282は使用部位の断面がU字形を、280のそれはV字形を呈する。282は両側縁が使用されている。

擦切痕ある礫 (283-285)

石材はすべて緑色泥岩である。283は一側の両面に、284は一側の片面に、285は両側の両面にそれぞれ擦切途中の痕跡が認められる。

すり石 (286-344)

286-304は半円状扁平打製石器と称されているもので、286-299は使用部がzig zag状で幅が狭いもの、300-304は幅の広いものである。305-312は両端を打ち欠いて一側縁をすったもの。313は扁平礫の両側縁をすったもの。314は両端にベッキングが施され、両側縁をすったもの。315-317は三角柱状の礫の一稜をすったもの。318・319は長円礫の両端(頂)をすったもの。321-336はいわゆる北海道式石冠である。321・322は円礫を半截し、その面を使用した山形を呈するもので、322は頂部にも使用痕が認められる。323-336はベッキングによる鉢巻状の溝を有し、把握部が作り出されたもの。337-344は球状のものである。

たたき石 (345-370)

345-348は長軸の一端もしくは両端を、349-357は端部と側縁部を、358・359は側縁のほぼ全周を使用したものである。360-370はこれらの使用部位のほかに腹面にも使用痕が認められ

る。

くぼみ石 (371~393)

371~384はくぼみの形状がほぼ円形で深い円錐状を呈するもので、358~393のそれは不定形で浅い皿状のものである。前者には三面以上使用されているものが多い。

砥石 (394~398)

すべて欠損品か破片である。394は有溝のもの。395~398は縁が残り、砥面は弓状に湾曲している。

石皿・台石 (399~404)

平盤状の大型の礫を利用しているが、半分以上欠損しているものや破片が多い。399・403は使用面がわずかにくぼんでいる。

石錘 (405~409)

405~408は礫の長軸の両端を打ち欠いたものであるが、407・408はすり石の未使用のものとも考えられる。409は両端にベッキングが施されたもので、類例は59年度B地区から2点出土している。

石冠 (410)

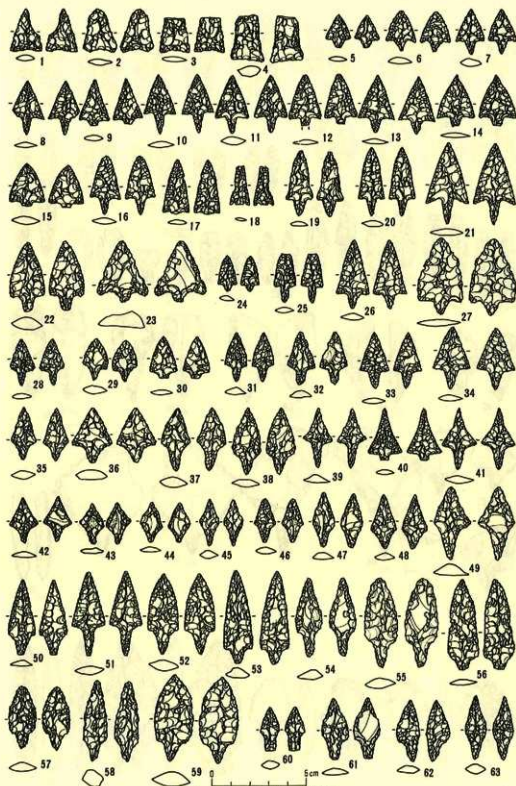
ベッキングと研磨によって全体的に成・整形されており、頭頂部は刃部状を呈している。この頭頂部が石鋸のような機能をはたした可能性は否定できないが、形態的に一応石冠としておく。道内では長万部町富野A地点遺跡、松前町大津遺跡出土²⁸のものが典型的なものと目され、これらと比較すれば本例は未成品の可能性もある。時期は前記遺跡出土例からも後期(IV群A類)と考えられる。

石刀 (411~413)

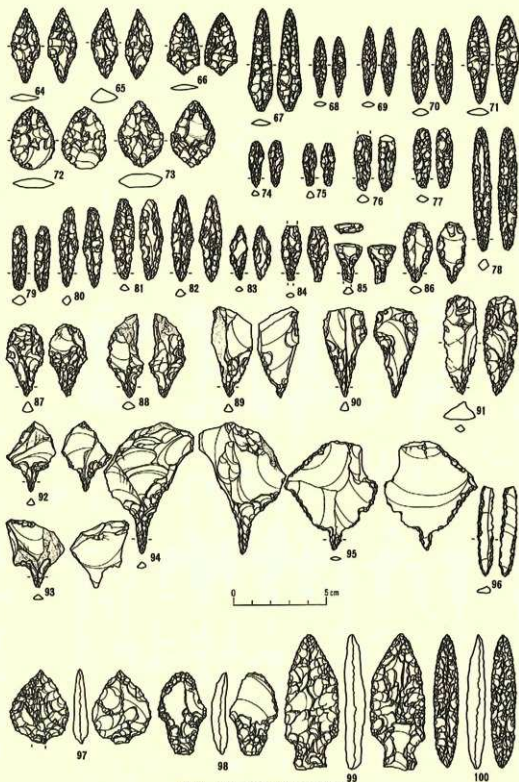
411は地(図右)に四つ足の動物か二羽の鳥のような線刻画とおぼしきものがある(口絵V)。412は身が内反りで、棟に彫刻が施されている。413は長さ52cmにも達する未成品で、身は内反り、柄頭もしくは刃区・棟区に相当する部分に擦切りによる切り込みがつけられている。

註 松下 亘 1967 「北海道長万部町出土の冠状石製品一本州の石冠に対比される資料」『北海道の文化』11、PP. 60~65

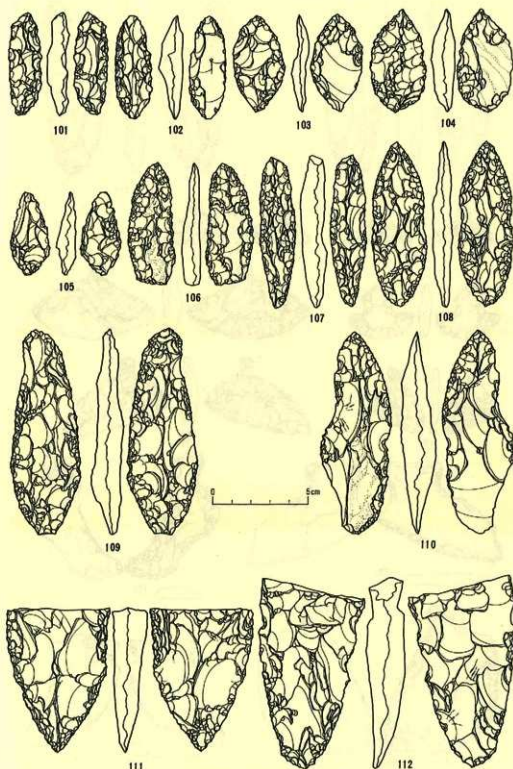
斉藤 傑・氏江敏文 1974『松前町大津遺跡発掘報告書』



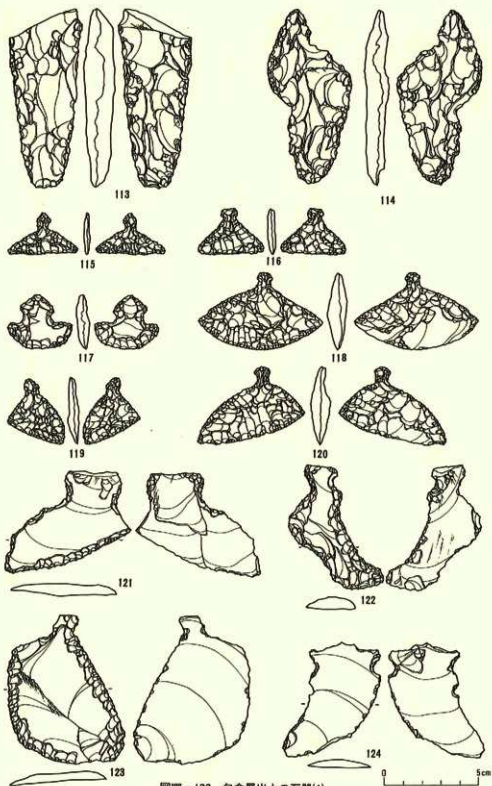
図Ⅷ-130 包倉層出土の石器(1)



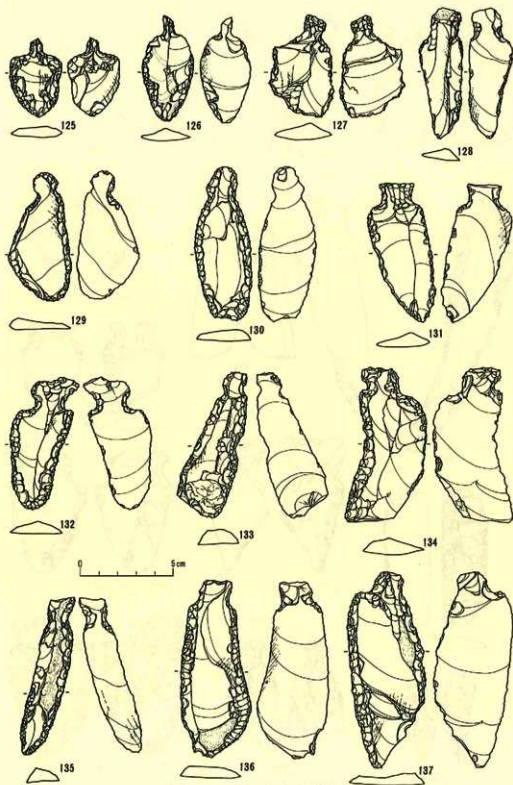
図Ⅶ-131 包含層出土の石器(2)



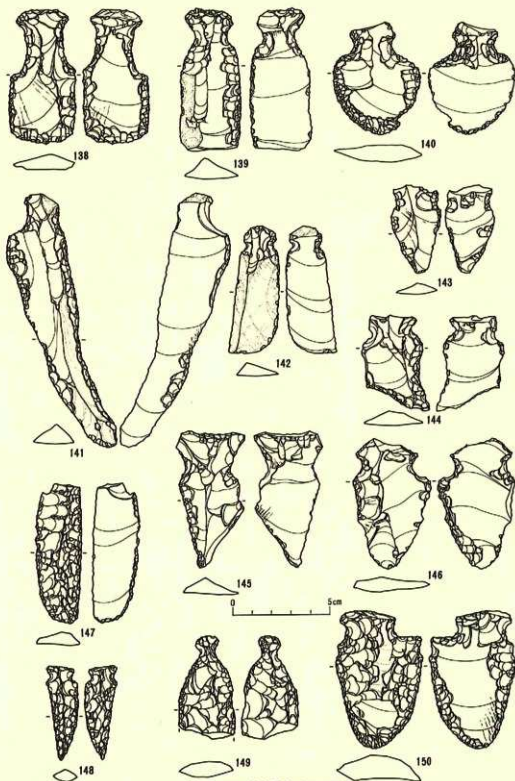
図Ⅷ-132 包含層出土の石器(3)



図Ⅷ-133 包舎層出土の石器(4)



図Ⅷ-134 包舎層出土の石器(5)



図Ⅷ-135 包含層出土の石器(6)